天の鳥舞い降りるは月色の都

栞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
天の鳥舞い降りるは月色の都

【Ｎコード】
Ｎ９２０９Ｏ

【作者名】
栞

【あらすじ】
ああ神さま。一生分の幸せをありがとうございます。
生まれてこのかた１６年。最高の幸せです。
その日、零は憧れの先輩に告白された。
痩せでちっぽけで胸も無くて、いつも短い髪の所為で男の子と間違われがちな自分が告白されるなんて・・・・・信じられないっ。
信じられないほどの幸せ。何度ほっぺた抓っても抓り足りないくらい。
しかしその夜・・・・・・・・・・・・。

世界設定・登場人物（前書き）

■　注意！　■

この頁は「天の鳥舞い降りるは月色の都」本編が進むにつれて人物が増えていきます。
最初は読まずに本編を読む事をお奨めします。
一度読んだ人、どうしても人物関係がわからない人向けのものです。

世界設定・登場人物

■　登場人物　■

・藤崎零（ふじさきれい）
１６歳、高校２年生。
短い黒髪と黒い眼。身長１４５ｃｍ。
誕生日は４月１５日。

・ウィンド・ディ・イシュバート
２２歳。腰までの長い銀髪と若草色の眼を持つ。
イシュバート帝国の第１皇子。
皇帝アルバと前妃アルテナの第２子。
身長１８０ｃｍ。

・シヴェリ・クイ・イシュバート
２２歳。肩にゆるく掛かるほどの黄金色の髪。眼は右が藍、左が紫。
イシュバート帝国の第２皇子。
皇帝アルバと皇妃エルリスの第１子。
ウィンドと同年ではあるが春生まれと冬生まれの差、かつ、元は妾の子という位置故に第２皇子の位へ。
身長１７５ｃｍ。

・パール・リロ・イシュバート
２３歳。緩やかな象牙色の長い髪と若草色の眼を持つ。
イシュバート帝国の第１皇女。
皇帝アルバと前妃アルテナの第１子。ウィンドとは実の姉弟。

・アルバ・ジン・イシュバート
イシュバート帝国の１２代目皇帝。黄金色の短い髪と灰色の眼を持

つ。

・エルリス・リュウ・イシュバート
イシュバート帝国の現皇妃。シヴェリの実母。
象牙色の短い髪と藍色の眼を持つ。
前皇妃であるアルテナとは実の双子で元々は後宮の位に居た。
エルリスが双子の姉であり、アルテナが双子の妹にあたる。

・アルテナ・ニマ・イシュバート
イシュバート帝国の前皇妃。パールとウィンドの実母。
象牙色の長い髪と若草色の眼を持つ。
ウィンドを生んで間も無くに病の為死去する。

・サーシェス・エル・ルーングルム
２３歳。シヴェリとは幼馴染にあたる現皇宮警備近衛隊の若い騎士。
短い蒼髪と黄土色の眼を持つ。ウィンド等姉弟とも仲は良いがシヴェリのような軽い付き合いは流石に出来ない。
剣の腕が立ち、副隊長どころか隊長をも狙える位置に在るが若さ故の経験の無さが妨げになっている。

・マリエ、ルト、ラシェ
侍女長であるマリエを筆頭にシヴェリと零の身辺世話を行う侍女達。
零が異世界からの来訪者という事を知っている。

・エリザベート・ラエル・アリエスダヌス
２４歳。白く長い髪と水色の眼を持つ。
皇宮警備近衛隊長モーラの１人娘。かつてシヴェリの側近を望み叶えられなかった過去を持つ。

・モーラ・ジ・アリエスダヌス

エリザベートの父親であり皇宮警備近衛隊長。野心家では無いが妻の忘れ形見である1人娘をかわいがっており、娘の願いが叶えば良いとは思ってくれているようだ。

・アリシア・メル・リープ
トロストの宮廷魔術師長。

・アリス・マグ・アークストーン
27歳。長い灰髪、灰眼を持つ。
ロストレヴェス魔術兵団の若き指導者であり、皇の側近魔術師。

・ジオムント・ギル・ロストレヴェス
64歳。ロストレヴェス帝国の10代目皇帝。短い白い髪と群青色の眼を持つ。

・リヴ
12歳。短い鳶色の髪と同色の眼を持つ少年。アリスの身の周りの世話をしている。

・ロマ・ラーナ・リュート
短い象牙色の髪と翡翠の眼を持つ。リュート国の皇。
イシュバートに嫁いだエルリス、アルテナ両双子の兄である。

・パミトラ・リュエ・セイルーン
肩までの深紅の髪と紫の眼を持つ。セイルーン女皇であり2児の母。

・メイヴェス・トア・セイルーン
短く赤い髪と紫の眼を持つ。セイルーン第一皇子。10歳。

・リーゼロッテ・アリィ・セイルーン

短い薄桃色の巻き毛と紫の眼を持つ。セイルーン第一皇女であり次期女皇。6歳。

■　国家　■

・イシュバート
深い森と湖に囲まれた美しい国。規模的には中規模国。

・ロストレヴェス
渓谷に造られた大国。天然要塞。イシュバートと地図的には隣接している大規模国。

・トロスト
砂漠にあるオアシスを中心に造られた小国。位置的に中立国。

・セイルーン
北方にある緑豊かな小国。女皇制で代々女皇が収めている。

・リュート
西方辺境の海沿いにある小国。イシュバート皇妃の故郷であり、友好国。

1話　吉と凶が一度に落ちて来た日

「・・・藤崎零(ふじさきれい)さん。俺と・・・付き合って下さい」
それは高校2年の冬。ある雪降る夕暮れの事だった。
まるで夢のような話。憧れの先輩に告白をされた。
1つ上の3年の先輩。陸上部の吉岡勇次(よしおかゆうじ)先輩。憧れている女生徒はそれこそ自校のみならず他校にも及ぶ。
痩せでちっぽけで胸も無くて、いつも短い髪の所為で男の子と間違われがちな自分が・・・・・・・・・。
・・・・・思い掛けない出来事に頭が真っ白になった。
「藤崎、さん？」
無言でかたまっていたのを見て相手も心配になって来たのだろう。
恐る恐るな様子で声を掛けて来て。
「は、はいっ」
慌てて応えた声はかなり素っ頓狂なものだったに違いない。
「駄目、かな？・・・その、揶揄(からか)っているとかそういうつもりはないんだけれど」
恥ずかしげに頬をかいている1つ年上の先輩に顔を赤くしたまま首を横へと振った。
「だ、駄目なんか・・・っ。ただ、その。あたしなんかでホントに・・・良いんですか？あたしよりもっと先輩に似合いそうな人はいっぱいいるのに・・・・・・・・・」
「俺は見てくれで人を選んだりはしないよ。藤崎さんは自分が思ってるよりずっと素敵な女性だと・・・思う。本当、だよ？校舎裏の兎小屋(どうぶつ)の世話。雨の日も雪の日も一生懸命・・・あんな大変な事を誰よりも頑張ってた姿、俺はずっと見ていたから」
「・・・吉岡先輩・・・・・・・・・。ありがとう、とても嬉しいです。あたしも1年の頃から・・・先輩の陸上部の練習を見てて、ずっと・・・。片思いと思ってたから、信じられなくて・・・・・・

・・・」
しどろもどろな口調が自分でもわかって恥ずかしい。震える手を胸元で合わせる形で項垂れると大きな手が伸びて来た。顔を上げた瞬間に強く抱き締められる。
「こんな事なら。・・・・・・・・もっと早く告白しておけば良かったな」
「・・・先輩が卒業しても会いにいきますよ」
「そうだな。幸い志望してる大学は近場ばかりだから」
ああ神さま。一生分の幸せをありがとうございます。
生まれてこのかた１６年。最高の幸せです。
分かれ道で吉岡先輩と別れた後、零はそっと自分のほっぺたに手を添えた。そのままぎゅっと抓ってみる。
「痛っ・・・。あは、は。夢じゃないんだあ」
やった、やったあ。
そのまま零はぴょんぴょんとその場で跳ねた。

「どうしたんだ。零の奴。今日は随分とご機嫌じゃないか」
夕食後、新聞を読みながらそう父親が言い。母親がくすりと笑う。
「ええ。教えてはくれなかったけれど、学校で良い事があったみたい。あんなにニコニコしているあの子を見るなんて久しぶりね」
１年の頃から気弱でクラスメイトともあまり馴染めていなかった零はいじめこそなかったがクラスの輪に溶け込めていなかった。
学校内での事を話されたわけではなかったが、母親はそれをずっと気懸かりにしていたのだ。
だから今日の零の顔を見てほっとした。
良い事、楽しい事を１つでも見出してくれたのだと。
「新しい友達でも出来たかな？」
「あら、彼氏かも知れないわよ」

悪戯っぽく笑った母親の言葉に父親は茶を吹き出した。

その頃、零は自室の机に向かいながら夕方の余韻にまだ浸っていた。
あたしが先輩の彼女・・・・・・。
今まで人と付き合うなんて事なかったけれど、ちゃんと先輩の彼女になれるかな。
そうだ、明日の朝早起きしてお弁当を作ろう。簡単なお惣菜もどきしか作れないけれど、先輩喜んでくれるかな・・・・・・。

・・・・・・・・・・・・どれだけ時間が経っただろう。ふと零は机に突っ伏した状態で眼を覚ました。
「ん・・・・・・あれ。やだ、あたしあのまま寝ちゃって・・・・・・今、何時？」
慌てて時計を見るとコチコチと無機質に時を刻み続けている時計は夜中の2時半を示していた。
宿題はやり掛けで放り投げたまま。溜息を零し、零はそれ等を片付け始めた。
・・・・・・と、その時。階下で大きな声が聞こえ。零は参考書類を抱えたまま部屋の戸口の方を見た。
父親の声だ。
「火事だーっ！！！」
緊迫した父親の声に冗談ではない事を知る。真夜中にやるような冗談でもない。零は瞬時にそれが本当に起きている出来事と察し、顔色を変えて廊下に向かった。
「お父さん、お母さんっ！？・・・・・・・・う、あっ・・・・・・・・ごほっごほっ！！」
廊下は既に煙で充満しており、何も見えない。
父親が叫んだという事は火の元は1階なのだろう。母親はこの2階の隣室にいるはずだが。
「お母さん、お母さんっ！！」

返事は無い。自分の部屋もあっという間に煙に満たされて視界が悪くなる。
「お父さん、お母さんーっ！！」
ゴオオオオ、と地鳴りのような音が聞こえる。青ざめ、その場に蹲っていればその音が近くなっている事に気付き。
顔を上げた瞬間、天井が焼け落ちて来た。
悲鳴は上げた、はずだった。しかし轟音の方が激し過ぎて何がなんだかわからない。
熱さも痛みもわからないまま、零は意識を手放した・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

2話　儀式の珍入者

・・・・・・息が苦しい。
真っ暗な意識を抱えたまま零は眉を顰めた。
もがいた手が虚空を掴む。
苦しい、苦しい。お父さん、お母さん、助けて。吉岡先輩・・・っ。
誰か、助けて。死にたくない・・・・・・・・っ！！！

突然視界が開けた。とはいえ薄暗い視界だ。
まず最初に眼に飛び込んで来たのは深紅の絨毯。眼下にそれが見えた。
「きゃあ！？」
高度的には中空という表現が正しいかも知れない。突如空中に投げ出された零はそのまま深紅の絨毯の上に落ちた。
「痛っ・・・。・・・・・・うんっ！？・・・・・・ごほっごほっ！！」
それまで煙に侵されていた肺に新鮮・・・とは言えぬかび臭い空気が流れ込んで来て、うずくまったまま大きく咳き込んだ。
「な、何者だっ！！」
少し離れたところで怒声が聞こえ。零は喉を押さえたまま何とか顔を上げた。
まるで絵本のなかのような、如何にも魔法使いです、という男が３人と壮年の、これまた如何にも王さまです、という男が立っていた。
「娘！どうやって儀式の間に入り込んだ！！」
「・・・・・・っ。こ、皇帝陛下っ。駄目です、陣が発動致します。お下がり下さいっ」
儀式？陣？皇帝？・・・・・・夢を見ているのか。
零はわけもわからないままただその場に崩れ落ちている事しか出来なかった。

後ずさる一行。フォン、と足下が急に明るくなる。
線が、薄水色に光っている。否、円だ。これは・・・・・魔法陣？
ズズズズズ、と室内が揺れ始め。零がよろけるように立ち上がった。
「何・・・？何なの？・・・・・・・・・けほっ。これって・・・・・・っ」
「動くでない、娘！こうなってしまっては仕方ない。どうやって此処に入り込んだかは知れぬが、今この場に在った事を不運に思うのだな。冥王シバの供物となれ！！」
「え、ええ！？」
皇帝、と呼ばれた王さまちっくな男の言葉に零が驚いた声を上げた。冥王とか突っ込みどころ満載ではあったが供物という事は生贄という事ではないか。何とも物騒な話である。
冗談じゃない、と魔法陣の外側に出ようとしたその瞬間。何かに足を掴まれ、そのまま逆さ吊りにさせられた。
「きゃあ！！」
今気付いたが寝間着のままだ。スカートがめくれる心配こそないが、そんな事を言ってる場合ではない。
何故なら自身の足を掴んでいるのは巨大な・・・・・頭が山羊で身体が人のようで、でも全身毛むくじゃらで。腹部にも大きな口がある、化け物だ。
「陛下！あれは冥王シバではありません！・・・・・・あ、あれは、貪欲の下位悪魔オルグですっ」
「何だと！？魔法陣は完全なはずだっ！！」
「恐らく娘の乱入で陣の一部に損傷が」
「・・・・・・・・・そんな事どうでも良いから助けてーっ！！」
だが零の言葉に応えてくれる者は誰もいない。
山羊の頭がぬう、と零に近付いて来た。
「ひっ・・・・・・・・・・！！」
殺される。両眼を大きく見開いたまま息を飲み。死を覚悟した。
・・・・・・・・・その瞬間。

「右手に過去を、左手に未来を、７つ星に分かちたるは現在を！それ即ち本質なり。９つの星よ、異質なるものを清めたまえ！！」
すらすらと、だがいっぺんには理解出来ない単語が聞こえ。零は何とかそっちを見ようと顔を動かした。部屋の出入り口のところに２人の男性が立っている。１人は腰までの長さの銀の髪に若草色の眼を持つ男性。もう１人は肩までの黄金色の髪に藍色と紫色のオッドアイを持つ男性だ。
さっきの早口言葉は銀髪の青年の口から発せられたものだった。
白い光の帯が悪魔を取り囲み、縛り上げる。苦悶の叫びが悪魔の口から零れ、掴まれたままの身体が大きく揺れた。爪が、緩む。だが放り出された身体が床に叩きつけられる事はなかった。
黄金色の髪の男性が飛び込んで来て受け止めてくれたのだ。
「・・・・・・・・っ！！」
「こっちは大丈夫だ、ウィンド！早くそれを浄化してしまえ！！」
黄金色の髪の男性の声に銀髪の男性が頷いた。
それまで放心状態だった皇帝がはっとして男性達に声を荒らげる。
「ウィンド、シヴェリ！この間へ踏み入る事は禁じたはずだ！！！」
「そのような事を仰っている場合ではありません、父上。オルグが市街に出ればそれこそ多大な被害が生じます。・・・・・・・・・いい加減眼をお覚まし下さい、悪魔召還でロストレヴェスへ呪いを与える等・・・・・他国に知られれば我が国にとって不名誉極まりない事態となるでしょう」
「ええい、黙れ！これ以上は時間が無いのだ！連中はもう正面切って勝負に出、敵う相手ではないのだ。このままではイシュバートが」
「父上、危ない！！」
黄金色の髪の男性が叫ぶのと悪魔が束縛を解き皇帝の頭部に爪を叩きつけるのとほぼ同時だった。
熟れたトマトのように頭部が潰され、血肉が深紅の絨毯へ散る。
「きゃあああっ！！」

零の口から悲鳴が突いて出、思わず黄金色の髪の男性にしがみついた。
その耳元でチッと焦りに似た小さな舌打ちが響く。
「お前達！魔力を貸せ！シヴェリ、こいつをもう一度陣のなかへ放り込むぞ！！」
腰を抜かしている魔法使い達に鋭い声を投げ掛けながら銀髪の男性がパシッと両手を合わせた。
「いけるか？」
「俺の位では五分五分だ。まあ、お前も居るし・・・・・・・・・・・・そこの腰抜けどもの魔力もあれば、7割には引き上げられる。・・・・・・何としてでも此処で阻止せねばならん」
だろ？と。勝気に笑った銀髪の男性に黄金色の髪の男性が苦笑を浮かべた。
一方・・・・・・零はただ彼にしがみついている事しか出来ず。
化け物が出た、人が死んだ。どうしてこの人達・・・・・・こんなに平静で居られるの！？
これは夢だ、と思いつつも、最初の落下の際にぶつけた右腕がじんじんと痛みを伝えて来る。まるで現実から眼を背ける事を許さないように。

3話　2人の皇子

「「開け悠久の門、覚醒めよ調律の番人。歪みがもたらし異質の獣を在るべき地へ戻したまえっ！！」」
銀髪の男性と黄金髪の男性がほぼ同時に同じ句を唱え。
びりびりと室内が震え始める。
「ひ・・・・・・・・・っ」
「・・・・・・怖いか？もう少しの辛抱だ。あいつは勝算が薄いような事を言っていたが・・・・・・大丈夫だ。ウィンドは我が国でも屈指の術師だから、あんな下位悪魔になんか負けん」
耳元で囁かれ、零は涙目で彼を見上げた。ほら、と指し示される方。今まさにオルグが光の渦に捕らわれ陣に引きずり込まれようとしていた。
オオオオオオオオオオ・・・・・・・・・・・・・！！！！！
まるで魂すら引きずられそうなそんな怨みの叫びを上げながら、オルグは魔法陣の内へと消え去った。
やがて静寂が訪れると、ふう、と銀髪の男性が溜息と共に天井を仰ぎ。黄金髪の男性がようやくに零を床へ下ろした。
「・・・・・・・・・以前から精神的に危うい男だとは思ってはいたが、こんなあっけなく殺られるとはな」
「ウィンド」
吐き捨てるように呟いた銀髪の男性を咎めるように黄金髪の男性が睨みつけた。「わかってるよ」と、銀髪の男性が肩を竦め。
「義母上（ははうえ）と姉上に話して来る。義母上から元老院に伝えて貰う方が話が通じやすそうだからな。・・・・・・・・・おい、お前等！いつまでも呆けてるんじゃねえぞ！！すぐに此処の陣を片付けろ！！跡形も無く、だ！！」
銀髪の髪の男性の怒声に生き延びた魔法使い達が慌てて立ち上がった。

「後は・・・・・・。シヴェリ、そこの生贄ちゃんの面倒は任せた」
「い・・・？」
自分の事か、と零が眼を丸くした。
「大方オヤジが冥王への手土産として何処からか調達して来たんだろう。ああ、この件に関しての他言は一切禁止だぞ。最悪この国の情勢が揺らぎかねん。オヤジは病で急逝した。・・・・・・お前等もだ！徹底を忘れるな！！」
有無を言わさぬ言葉には見えない氷の刃が含まれていた。
皇の気質というものがあるなら、きっとこれなのだろう。
佇んだまま零はこくりと息を飲んだ。
「・・・・・・・・・あ、あの・・・・・・・・・」
ようやく口を開いた零に黄金髪の男性が見下ろして来た。
「・・・・・・怖かったかい？」
優しく声を掛けられると小さく頷き。だが再び零は顔を上げた。
「此処・・・は、何処なんですか？あたし・・・・・・・・・」
しどろもどろながらにも零は自分の身に起きた事を話し始めた。
家で寝ていて、火事が起きて、そこで意識が途切れて。
気付いたらこの部屋に、陣の上に、「落ちて来た」事を。
「・・・・・・・・・？？？ちょっと待て。夢を見たのか？」
ニホンなんて国は知らない。ましてこの世界に住む者なら魔法の事も悪魔の事も知らないわけがない。
零の言葉に黄金髪の男性が半信半疑に零を見下ろした。
「・・・・・・・・・此処はイシュバート帝国。皇宮の最奥たる場所で民間人が立ち入れる場所じゃない。連れて来られたのでなければ此処に立ち入る事は不可能に近いが・・・・・・。だが、信じられないな。そんな国の名前も、そこまで大きな転移魔法も、聞いた事は無い」
「だ、だって・・・・・・だって・・・・・・っ。し、信じられないのはこっちよっ」
言い切った後、零は自分の顔を両手で覆った。

ひどい火事だった。お父さんとお母さんは無事なのか。
どうしてこんな場所に居るのか。
何もかもがわからなく、ただ涙が溢れる。
お父さんお母さんの無事が知りたい。元の世界に戻りたい。
ひっくひっく、と喉を震わせて泣き続ける零に黄金髪の男性が後頭部をかいた。
「・・・・・・・・・わかった。わかったよ。信じてやるから泣くな」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「どのみち身分が無いと皇宮に留まる事は出来ん。暫くは私の小間使いとして側に居なさい。召喚術に詳しい者に話をしてみよう」
「小間使い・・・？」
聞き慣れない単語に零は首を傾げた。
「私はシヴェリ・クイ・イシュバート。このイシュバート帝国の第2皇子にあたる」
「え、ええ？お、皇・・・・・・皇子、さま！？」
「・・・ちなみにさっきの口が悪いのが腹違いの兄にあたるウィンド・ディ・イシュバート。皇位継承権を持つ第1皇子だ。父上がお亡くなりになった今、ウィンドが皇帝の位を継ぐのは確実だろうな」
何だか凄い人にしがみついてしまったようだ。
さりげなく距離を開けた零にシヴェリがくすりと笑い。
「取って食いはしないから此方へおいで。・・・・・・・・いつまでも此処に居たくはないだろう？」
ちらりと布をかぶせられているが足が見えている皇帝の死体を見遣る。
ぞくりとした後に零は慌ててシヴェリの側へ駆け寄った。
くしゃ、とシヴェリが零の髪を撫で。
「良い子だ。・・・ああ、名前は？」
「ふ、藤崎零・・・・・・・・・あ、いえ。零、です」
「レイか。とりあえずその服は目立つな。侍女に衣を用意させよう」

促され、共に歩き出しつつ、零は既に気が遠くなりかけていた。
どうやら漫画でも小説でもない、自分は本当に・・・夢じゃなくて本当に。異世界とやらに飛んでしまったようだ。
一体どうして。何もかもわからない状態だけれど。
何としても元の世界に戻らないと・・・・・。

お父さん、お母さん。
吉岡先輩・・・・・・・・。

4話　残酷な仮説

「・・・・・・られないな」
「だが・・・は、可能性が・・・らしい。私も最初は半信半疑だったが・・・・・・・・・」
遠いような、近いような場所で、人の声が聞こえる。
これはシヴェリ皇子と・・・ウィンド皇子・・・・・・・・？
はっとして零は眼を開けた。
柔らかい絨毯の上にクッションが幾つか置かれており、その1つを枕にする形で零は横たえられていた。
そしてそのすぐ傍らにシヴェリとウィンドが座っており。先にウィンドが気付き、零に声を掛けた。
「お、生贄ちゃんが眼を覚ましたようだな」
「ウィンド。彼女の名前はレイだ」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・え、あ、あたし・・・・・・・・・」
緩慢な仕草で零が起き上がればウィンドが素焼きのカップに入った水を差し出して来た。
「憶えているか？部屋に向かう途中で倒れたんだ」
シヴェリがそう声を掛け。零はウィンドからカップを受け取った形のまま驚いた表情を浮かべた。
「倒れ・・・？」
「色んな事がいっぺんに起きた為の精神疲労だろう。丸1日半眠り続けていたんだぜ」
零はきちんと座り直し。それからカップの水を飲み始めた。
糖が入っているのかほんのりと甘い。
1日半・・・そんなに長い時間寝ていたなんて・・・・・・・・・。
「で、だ。お前が寝ている間に私も色々調べてみた。ウィンドも相談に乗ってくれてな」

「え？」
零がウィンドを見遣ればパチンとウィンクされ。少しだけ零が頬を染める。
「し、信じてくれた、んですか？」
「俺は元々召喚系の専攻していたからな。・・・結論から言えばこれは召喚術とは断言出来ないだろう。オヤジ・・・・・アルバ皇帝が行った悪魔召喚の儀式の影響で次元が歪み、本来通じない世界から遊離していた魂を引き込んだ可能性が高い」
「ゆう、り？」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
ウィンドが言葉を留め、シヴェリを見遣った。シヴェリもまた表情を曇らせ。
「正式な儀式により呼び出したものでない場合、肉体を持たない魂を引き込む事がほとんどだ。お前の場合・・・・火災に遭った、と言っていたな。話を聞く限り、肉体が無事な可能性は限りなく低い」
「・・・・・・それって」
「・・・・・・・・・・・・。火災で死んだばかりで消失する事無く遊離した魂がこの世界に引き寄せられ、悪魔召喚の際の構成式に取り込まれて偶然肉体を得た可能性が高い、という事だ」
「あたしが死んだって・・・・・・事？」
押し黙る2人の前で零が首を横へ振る。
「そんな・・・・・・っ。だって、あ、あたし、こんなに元気なのにっ。この世界に来た時は少し呼吸が苦しかったけど、火傷も何も・・・・・・何も無いのに、そんなの・・・・・・っ！！」
「器が再構成されれば火傷もへったくれも無い。綺麗なものだろう。だが・・・・・・。レイ。・・・・・・レイ、ショックなのはわかるが、少し落ち着け。こんな話を聞かされて平静を保てと言うのは難しいかも知れんが、可能性が高いというだけで断定したわけじゃない。だからあまり取り乱すな。あくまで仮説、だ。酷な仮説だが、お前は知っておく必要がある。だから話したんだ」

オロオロしつつ、今にも泣きそうな零の頭の上にポン、とウィンドが手を置いた。そのまま苦笑を浮かべ。
「・・・・・・何にしろこの国に在る文献を調べる限りはこれ以上の仮説は見当たらない。だがひょんな事から何かわかるかも知れない。それまで、此処に居れば良い」
ポロ、と涙が零れた零に、あーあ、と声を上げながらウィンドがその涙を拭ってやった。
「だから泣くなって。ほっぽりだしたりしないから心配するな」
「・・・・・・う、ん。でもどうして・・・・・・そこまで親切にしてくれるの？」
零の質問に2人が顔を見合わせた。
「1つはこれも何かの縁と思った事、もう1つは異世界から来たお前に興味を持った、という事だ。私達の知らない世界を知り、この世界の事を何も知らない。・・・・・・傍に置いたら退屈しなさそうだろう？」
そう言いながらシヴェリに笑われれば面食らい。零が視線を外した。
「パンダじゃあるまいし・・・・・・」
「拗ねるな。飲食居住も身分も心配せずに暮らせるのはそう悪くないだろう。それにお前を揶揄(からか)うつもりで言っているわけじゃない。お前だけが知っている事をたくさん教えてくれ。俺達もお前にこの世界の話を聞かせてやる」
「イシュバート、がこの国の名前・・・・・・でしょ？」
零の言葉にウィンドが片眉を上げた。
「お、正解。・・・・・・ちなみにこの国には凄い綺麗な湖があってなあ・・・・・・」
「ウィンド皇子。皇妃さまがお呼びです。星の間まですぐ来るようにと」
木製の戸の向こう側から声が聞こえ、ウィンドが言葉を止めた。そのまま肩を竦め。

「ああ、わかった。今行く。・・・・・・さて、ちょっと忙しくなりそうだ。レイ、当面はシヴェリの言う事を良く聞いて大人しくしているんだぜ？」
そういえば皇位継承が待っているんだった。気絶する前にシヴェリから聞いた話を思い出しながら、ウィンドの言い付けに「わかりました」と頷いた。
その後、慌しくウィンドが退室していき。シヴェリと2人きりになれば、そういえば・・・と見上げる形で尋ねた。
「・・・・・・小間使い、って何をすれば良いの？」
「うん？・・・・・・そうだな。今のところは何もしなくて良い。ただ、私の傍で大人しくしていてくれれば。指示はその都度出すが、そう難しいものはないさ」
「だって皇子さまなのに・・・・・・」
零の言葉にふむ、とシヴェリが考え込み。ぱんぱんと手を叩いた。
え？と零が眼を丸くし。何？と尋ねる前に女性が数人部屋に入って来る。
「お呼びでしょうか、シヴェリ皇子」
「ああ、この者がさっき話した娘だ。理由(わけ)あって暫く我が下に置く。大衆の眼に入っても恥ずかしくないように身なりを整えてやってくれ」
「畏まりました。・・・・・・では」
女性達が零を取り囲みにっこりと笑った。ひく、と零の笑みが引き攣り。
「では湯浴みにお連れします」
「え？何？ゆ、ゆあみ、って何？・・・・って、ちょっ、シ、シヴェリ皇子！？」
「私が居ない方が落ち着けるだろう。しっかり綺麗になって来い。これが最初のお前の仕事だ」
頑張れよ、とエールを送られつつ、零は女性達に半ば引き摺られるように連れ去られていった・・・・・・・・・・・・。

5話　原石

「・・・・・・・・・」
シヴェリは驚きが隠せなかった。
乳臭い小動物のようなイメージしかなかった小柄な少女が小一時間侍女達に預けただけで見違えるように美しい容姿になって戻って来たのだから。
短い癖のある黒髪には白い花をモチーフにした銀の髪飾りが付けられ、両耳にも同じモチーフを散らす。色白な象牙色の肌には金鎖の装飾を宛がい、丈の短い子供用の衣から女性用の丈の長い白の衣に替えた、ただそれだけだというのに。
たかが装飾1つ、化粧1つで此処までも変わるとは思ってもいなかったからだ。
「これは、思っていたより・・・」
「や、やだ。あんまりじろじろ見ないで下さい」
顔を赤らめて零が顔を背けた。
だがシヴェリは揶揄(からか)うつもりは全くなかった。これは化けたと片付ける話ではない。強いて言うなら・・・宝石の原石だ。
最初はただの石ころ。だが軽く磨くだけでこれだけの艶を出す。
「だ、だから変だ、って言ったのに。こんなの小間使いが着けていようなものじゃないしっ」
途中から彼女の素質に気付いた侍女達が暴走した結果、なのだが。
結果としてはこれはこれで面白い一面が見れた。
ほう、と息を吐き出した後、く、とシヴェリが喉を鳴らして笑い。
「確かに小間使いでこれは無いな」
「で、でしょ？」
「小間使いとしては似合わなさすぎる。「設定」を変えるべきか」
「せ・・・・・・？」
きょとんとした零の頭にシヴェリがポン、と手を置いた。

控えていた侍女達もニコニコとそんな様子を眺めており。
「第２皇子の側室、として置いても元老院から文句が上がらない美しさ、という事だ。寧ろその方が自然だな」
「側室！？」
その言葉に零が驚き。この世界の理は知らないけれどその単語は知っている。
簡単に言えば愛人という事か。
「小間使いより好待遇、かつ自然な流れで私の側に在れる。どうだ、悪い話じゃあるまい」
「で、でも愛人だなんてっ。あたしまだ１６・・・っ！！」
「１６！？」
シヴェリの驚きに零が眼を丸くした。
「・・・てっきり１０歳前後だと・・・・・・」
「ひ、ひどいーっ！！」
手を出すつもりはさらさらになかったが１６と聞けば見る目も変わって来る。
じ、と見つめられ零は居心地が悪そうに身を竦めた。
「まあ、愛人だからとあれやこれやが必然的に絡むわけじゃない。当初の目的は先に話したのと何も変わらないさ」
「う、ん・・・・・・」
零の頷きにシヴェリがにっこりと笑った。それから侍女達を見。
「お前達もご苦労だった。感謝する」
頭を下げて部屋を出て行く彼女達を見送った後、零は溜息を零した。
「ゆあみ、って何かと思ったらお風呂だったからびっくりしたわ」
「オフロ？そうか、お前の世界では湯浴みの事はオフロと呼ぶのか。１つ勉強になったな」
そう言って笑うシヴェリに零が唇を尖らせた。
「じ、自分で洗えるのに無理矢理・・・」
「姫の位に座する事となれば当たり前になる。今のうちに慣れておくんだな」

姫。
第２皇子の側室に上がるという事はそれだけの地位を持つ事になるのか。
零は不安げに口元に手を当てた。
放り出された見知らぬ世界。２人の皇子。全てが理解する前にトントン拍子で進んでいく。
本当にこのままで良いのだろうか。・・・・・・本当に。
「・・・・・・どうした？レイ」
「・・・・・・あの、皇子？もしあたしが１０歳だったとして・・・・・・それでも側室に上げるつもりだったんです？」
「うん？側室には年齢制限は無いからな。さっきも話した通り、側室といえども色々な位置がある。手を出さずとも幼少から手元に置いて自分好みに育てるのもまた楽しみというものだ」
「ひ、光源氏計画・・・・・・」
呟いた零の言葉にシヴェリが首を傾げた。
「ヒカルゲンジ？」
「・・・・・・な、何でも無いです」
もしかしてこの世界ってロリコンがいっぱい居るのだろうか。
そう考えるだけで零は頭がくらくらし、額に手を添えた。

6話　美姫の戸惑い

「・・・・・・そうでしたか、矢張り父上はそこまで追い詰められて・・・・・・・・・」
ウィンドの話に緩やかな象牙色の髪を腰まで伸ばした美女が表情を曇らせた。
ウィンドと同じ若草色の眼を持つ彼女はウィンドの実の姉であるパールだ。ウィンドの1つ上であり、男子であったなら皇位継承権第1位を持っただろう者。
腹違いの弟シヴェリにも実の弟のように接する、心優しい姫君だった。
そしてエルリス皇妃。パールとウィンド姉弟にとっては母にあらず、シヴェリの実母であり姉弟の母である前皇妃アルテナとは双子である。
現在この3人が集い、皇帝死去に関しての話をしていた。
「あの方の心の脆さは最早誰が何を言おうともどうにもならなかった事でしょう。・・・ウィンド。シヴェリと共に行った悪魔封印。ご苦労さまでした。下位悪魔とて怪我もなく・・・本当に良かった」
エルリスの言葉にウィンドが頭を下げた。
「即日、陣は破壊し現場への立ち入りを禁じました。室内に汚染は見られませんでしたが念の為に清めの呪(まじな)いを施しております」
エルリスがその言葉に笑顔で頷いた。そして緩く首を傾げ、ウィンドへ尋ねる。
「その後何か変わった事はありませんか？」
一瞬脳裏に零の姿が浮かんだが少し考えた後にウィンドが口を開き。
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・そうですね、特には。一先ずは今後に関しての事でしょう。いつまでも皇帝の座を空位にしておくわけにもいきません。ロストレヴェスに知られる前に穴埋めを」

「シヴェリ派がごねるかも知れませんが、とりあえずは同年とはいえ先生まれである貴方が座に収まるべきでしょう、ウィンド。シヴェリが皇位を望むなら後々好きなだけ勝負を行えば良いでしょうが・・・あの子は皇族でありながらそういうところは無頓着ですから」
「はは・・・、違いない。ですが義母上(ははうえ)としては息子であるシヴェリに皇位に着いて貰いたいのでは？」
茶化すように言ったウィンドにエルリスが少し驚いた表情を浮かべ、それから笑った。
「母親が願うのは子の幸せ。皇帝になろうがそうでなかろうが、あの子が幸せならそれで良いのですよ。ウィンド、それにパール。貴方達のお母上・・・アルテナも健在ならきっと同じ事を言った事でしょう」

わあ・・・っ。
突然窓の外で聞こえた声に3人が顔を上げ。
「何事です？何かあったのですか？」
扉の向こう側で立つ衛兵にパールが声を掛け。
「は。シヴェリ皇子が何処からか姫を連れて来たようで・・・・・」
「姫？」
ウィンドは一瞬嫌な予感がし眉を上げたが、いやいやと首を横へ振った。
「姫君・・・とは？シヴェリも一体いつの間にそんな・・・・・・」
「そこまではわかりませんが、何とも美しい異国の姫君だそうで」
まさか。
「・・・あー。義母上、姉上。話も一区切り着いたところですし、シヴェリの姫君の顔でも拝みに行って来ますよ。側室に興味すら抱かなかったあいつが見つけたというなら異母兄弟の俺とて興味があります」

「ええ、構いませんよ。ただし今宵には継承の儀を執り行います。それまでには支度を万全に整えておくように」
了解致しました、と2人に頭を下げてウィンドが席を離れ。そのまま中庭の方へ向かい走り出した。
程なくしてウィンドの「嫌な予感」は的中するわけだが・・・。
着飾られた零の姿を見れば咎めの声を上げる余裕も失い、息を飲んだ。
「あ、あ・・・。ウィンド皇子・・・っ」
恥ずかしそうに衣の袖で口元を隠す零の肩をシヴェリが抱き寄せて。
「・・・・・・・・・すまん、予想外に話が広まってしまってな」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・。目立つ真似はするなと言っただろう、と咎めるつもりだったが・・・。こいつは・・・驚いたな」
そっと頬に手を添えられ、零が驚いた表情を浮かべ。それからほんのりと頬を染めた。
「名目を小間使いから側室に変えたのはある意味正しいな。悔しいがこればかりはシヴェリに先を越されたか。もう少し早くレイの本質に気付いていれば俺の側室に入れられたというのに」
「も・・・う、シヴェリ皇子もウィンド皇子も、揶揄(からか)わないで下さい・・・・・・っ」
「揶揄う？冗談じゃない。レイはもう少し自分の美しさを自覚すべきだな」
ウィンドの指先が離れ。レイが戸惑った表情を浮かべた。化粧とかはした事無かったけど、でも日本に居た頃は別にもてたわけじゃない。
逆にちんちくりんとか言われていたくらいだった。
だからいきなりめかし込んだだけで「美しい姫」等と言われても自覚出来るはずもなく。ありえない、と再び首を横へ振った。
「レイ、まだ遅くないぞ。俺は今宵皇帝になる。俺の側室になったらそのまま皇妃コースまっしぐらだ。今からこっちへ乗り換えない

か？」
笑顔でそう言うウィンドに零が驚いた表情を浮かべ。シヴェリが片眉を上げた後に咎めの声を掛ける。
「ウィンド。正式な生まれを持たないレイが皇妃に立てるはずもないだろう。それに今の位置はレイが皇宮に留まる為の口実に過ぎん」
「それなら俺の側室として置いても問題は無いだろう？」
「皇帝になれば仕事が山積み状態だ。側室に構ってる余裕等当分は無いぞ？」
何やら笑顔で火花を散らしている2人に、ひええ、と零が肩を竦めた。
「け・・・けんかはダメっ！！」
突然大声を出した零に2人が驚いた表情で見下ろした。
「・・・けんか、しないで下さい。折角の兄弟なんだから・・・仲良くして。あ、あたしは、その。・・・・・・今はこのままで良いです。これ以上状況が変化したら・・・頭のなかがパンクしちゃいそうだから・・・・・・」
シヴェリの側室のままでいい、と細々口にした零にウィンドが溜息を零した。
「あー、まあ、その、なんだ。半分は冗談だから気にするな。俺とてシヴェリと本気で争うつもりはないさ。な？シヴェリ」
同意を求められシヴェリが慌てて頷く。
「あ、ああ」
「さてと！それじゃ俺は儀の準備があるから戻るが・・・・・・。シヴェリはともかくレイも、継承の儀には是非来てくれ。シヴェリの同行という名目でなら参列が赦されるはずだからな」
ぱちん、とウィンドがウィンクをし。そのまま皇宮内へ戻っていった。
ほ、とシヴェリが溜息を零すのを見、レイがシヴェリの顔を見上げる。
「・・・・・・あたし・・・・・・」

「ああ・・・・・・。レイは何も気にする必要は無い。私達こそ不安にさせるような言動を済まなかったな」
「ううん・・・・・・」
首を振った零だったがふと思い立ったように。
「そう、だ。夜にはウィンド皇子が皇帝になるんでしょ？あたし、皇子に花束をプレゼントしたいです」
「うん？・・・・・・ああ、そうだな。なら郊外に小さな花畑がある。そこまで連れて行こうか」
「い、良いんですか？」
シヴェリの言葉に零が驚き。シヴェリが微笑んでみせた。
「何、かわいい側室の頼みだからな」
その言葉に零は顔を赤らめ。また袖で口元を隠した。

7話　希望の花（前書き）

※挿絵：高瀬コウさま※

7話　希望の花

＞i20748―2844＜

「わあー・・・。きれーいっ」
シヴェリが用意してくれた馬車に乗り大門を出ればその場所はもう目と鼻の先であり。
こじんまりとした丘には白い蒲公英を大きくしたような花が咲き乱れていた。
「これ等はホープという名の花々だ。地方気候によって色も様々だがイシュバート近郊に咲くホープは白い」
「ホープ・・・。皇子、あたしの住んでいた世界ではホープは希望って意味なんです」
「うん？そうか。それは、良いな。・・・・・・ならばウィンドがイシュバートの希望となれるようこの花をたくさん束ねると良い。私は御者と話をして来るから、あまり遠くへは行くなよ」
笑顔で零は頷き。その場にしゃがんでホープの花を摘み始めた。その様子を眩しげに眺めた後シヴェリはすぐ傍に停めてある馬車へと戻り、御者に何事かを話し始め。
零は此処暫くの目も回るような事態の展開に疲れ気味だった事も忘れるように楽しげに花を集めていった。

「あら・・・・・・」
ふと聞こえた声に零は顔を上げた。見れば白い長い髪に水色の眼の美女が数人の侍女を連れて少し離れた所から此方を見ている。
さっきは気付かなかった。きっと奥の林の方から歩いて来たのだろう。
ホープの花束を両手に抱えたまま零はきょとんと彼女を見詰めた。
「あ・・・、こ、こんにちは・・・・・・」

「どうもご丁寧に。先ほど中庭を騒がせていた姫君ですね。私はエリザベート・ラエル・アリエスダヌス。皇宮警備近衛隊長モーラの娘、でございます」
「ど、どうも・・・。初めましてエリザベートさま。レ、レイです」
じっと見詰められ、零は居心地悪そうに身を竦めた。すい、と袖を口元に当ててエリザベートが眼を細める。
「・・・・・・・あ、あの？」
「・・・・・・・あれだけの騒ぎ、どれほどの美姫かと思いましたが・・・・・・・」
「・・・・・・・え？」
「レイ姫。シヴェリ皇子は心優しいお方。貴方を側室に置いたのも同情しての事でしょう。決してその座に甘えるような事、あってはなりませんよ」
すい、と立ち去っていくエリザベートに零はぽかんとしたままそれを見送った。
嫌味、妬み、だったのだろうか。エリザベートもシヴェリの側近を望んでいた身だったのか。
だけど自分は。
「・・・それくらいわかってるもの」
ぽつり呟いた。あまりにどんぴしゃすぎて苛立ちも悔しさも無く、馬車の方のシヴェリの背を眺めた。
皇子は優しい。同情しての傍置き。全て当たっていたからだ。
自分は本当に「第2皇子の側室」になるつもりはないし、元の世界に戻れる方法があればすぐにでも皇宮を出ていくつもりだ。
皇子はそれまでの間、居場所を提供してくれているだけに過ぎない。
そう、自分達はそれだけの間柄だ。
「レイ、良い花は集まったか？」
シヴェリが歩きながら声を掛けて来る。エリザベート一行は既に林の向こう側に消えており、シヴェリはそれに気付く事も無く。
ちょっと呆けていた零の姿に首を傾げた。

「どうかしたか？」
「あ、ううん・・・・・・。何でも無いです。皇子、ほら・・・こんなに。これだけあれば、皇帝へのプレゼントにしても恥ずかしくないですか？」
両手いっぱいの花束を見せて微笑んだ零にシヴェリもまた微笑み。
傍らに咲いていたホープの花を手折ればそれを零の髪に挿した。
その行動に零が驚いた表情を浮かべ。
「お前の黒髪には白が映える。・・・花束はそれで充分だろう。そろそろ風も冷えを纏い始める・・・・・・馬車へ戻るぞ」
「はい・・・・・・」
どうしてどきどきするの？
あたしには吉岡先輩がいるのに・・・・・・。
花束を抱いたまま、零はシヴェリに次いで歩き始めた。
赤くなった顔、隠すように花に埋めて。

・・・・・その様子をエリザベートは林の奥から眺めていた。
「シヴェリ皇子・・・・・どうして私の願いを断ったというのに・・・・・あんな年端もいかない小娘等を・・・・・」
「エリザベートさま・・・・・」
侍女が表情を曇らせながらエリザベートに声を掛け。エリザベートは眦に溜まった涙を指先で拭った。
「あんな何処の骨かも知れぬ小娘。少々脅かせば皇宮を逃げていくに違いありません。皇子もきっと眼を覚まして下さるに違いない・・・・・」
それは命令、という形ではなかった。それでも侍女達は仄かに口元を笑ませたまま静かに頷き。
エリザベートはそんな彼女達を一瞥する事無く、立ち去る馬車を眺め続けていた。

8話　皇位継承

「汝、ウィンド・ディ・イシュバート。そなたを血列の誓いに沿い、故アルバ・ジン・イシュバートの後継として皇帝の位を与える」
大勢の国民に歓迎されてのものではない。
継承の儀は皇宮内でひっそりと、皇族他、一部の者達だけで秘密裏に執り行われた。
皇妃エルリスの言葉にウィンドが頭を垂れて眼を閉じ。その頭に皇帝の証であるサークレットが載せられた。
す、とウィンドが眼を開き。
周囲からは控えめな拍手が鳴り始めた。
「ウィンド皇子はアルテナ皇妃に似て賢いお方。立派な皇帝におなりになる事でしょう」
そう言いながら笑うのは皇宮警備近衛隊長であるモーラ・ジ・アリエスダヌス。
「エリザベート姫の技量なら側室の方々と競いウィンド皇子の傍らを狙えるでしょうに」
笑いながらそう近衛副隊長が言い。モーラが溜息を零して首を横へ振った。
「あれは気難しい娘でな・・・。わしとて実の娘が皇帝の妃になれるなら万々歳なのだが」
その視線がちらりと零と並ぶシヴェリの方へと向いた。
娘が誰の妻になりたいのか、父親はその願いを聞いていたのだ。
何年も、何年も。エリザベートが初めてシヴェリに会ったその日から。
視線の先でシヴェリが零を促し。零が頷きながら花束を抱えたままウィンドへと近付いていった。
「ウィンド皇子、いえ・・・ウィンド皇帝陛下。おめでとうございます」

現れた零の姿に一部からは「ほう」と眼を瞠る声が挙がる。
「・・・あれがシヴェリ皇子が何処からか連れて来た姫君か。大方何処かの部落(むら)の娘だろうが・・・。まだ幼さが残るが美しい娘だ。数年も経てば国1番の美姫になるやもしれんな」
ぽつりとモーラが呟き。「ええ」と副隊長もそれに同意するように笑み顔で頷いた。
「ありがとう、レイ。これは・・・ほう、ホープの花か。良い香りだ。シヴェリに花畑に連れて行って貰ったのか」
嬉しそうにウィンドがそれを受け取り。零が笑顔で頷いた。
「あたしの世界ではホープという単語は希望を意味するんです。・・・陛下、立派な国を築かれて下さいね」
「・・・。お前も手元に在れば希望も未来も明るいものになるんだがな」
「え？」
呟きを聞き返そうとした瞬間に手を引かれ、零は眼を丸くした。
ぱさり、小さな音と共にホープの花束が深紅の絨毯の上に広がり。
瞬間、儀の場がシン、と静まり返る。
零は何が起こったのかわからないまま身を堅くしていた。
ウィンドの唇が自身の唇に重ねられていて。次の瞬間その身体を強く押し返す。
「・・・嫌あっ！！」
「ウィンド！！」
シヴェリが声を荒げ、ウィンドから零を引き離した。
「悪いな、レイ。お前の祝福を貰えば元気も勇気も数百倍と思っていただけだが、そこまで嫌がられるとは」
悪気もなくしれっと口にしたウィンドをシヴェリが睨み付けた。
「祝福だと？レイは神官でも何でもない、私の側室だ」
「シヴェリ。如何に気に入りの娘とて側室に上げていつまでもそのままか？手出しもなく清らかなまま大事にしていたら・・・・・・・・そのうち「誰か」にかっ浚われても、何も文句は言えんぞ」

2人の睨みあいを黙ってみていたエルリス皇妃が立ち上がり。全員の視線がそこに集まる。
「陛下。皇帝ともあろうものが他の側室に無断で手を出すような事、あってはなりません。貴方はたった今、国の頂点に立つ身となったのです。重々それを承知した上で行動しないとなりませんよ」
「義母上(ははうえ)。・・・・・・。・・・申し訳ございません。少々はしゃぎすぎました」
すい、とウィンドが2人から視線を外し。シヴェリが零を抱き締めた。

・・・・・・・・こうして小さなハプニングがあれど皇帝継承の儀は滞りなく終わり。
まだショックで元気が無い零を連れてシヴェリは自分の宮へ戻っていった。

(そのうち「誰か」にかっ浚われても・・・)
どういう事だ。
ウィンド、お前もレイの現在の状況を理解していたはずだ。
この娘は側室であって側室ではない、それをわかっているはずなのに。
お前はレイをこの国へ繋ぎ止めたいのか。私利私欲の為だけに。

「皇子・・・」
零の声にシヴェリがはっと顔を上げ。傍らで不安げに見上げている零を見下ろした。
「・・・。嫌な思いをさせて悪かったな」
「い、いいえ。・・・あたしも大袈裟にびっくり、しちゃって・・・」

「・・・・・・・・・悪い奴ではないのだがな」
「それは、あたしも・・・わかってます」
頼りなく肩を落としつつ室内へ歩き出す零の後ろ姿を眺めつつ、シヴェリが溜息を零した。
「・・・レイ。私はお前を側室に入れた状況を理解しているつもりだ。だが・・・」
言葉を濁すように口にしたシヴェリに零が振り返り。「皇子？」と首を傾げた。
「・・・お前がウィンドと口付けた瞬間、頭が真っ白になった。公の場でなければ・・・剣を抜いていたかもしれん」
「そんな、剣なんて物騒な・・・っ！！」
「・・・・・・まさか女を巡ってウィンドと争う事になるとはな」
「え・・・・・・？」
それって。
何も言えずに立ち尽くしている零の姿を見遣りつつ、シヴェリは少し恥ずかしそうに眼を細め。再度大袈裟に溜息を零した。
「私は・・・・・・」
「お、皇子！きっとお酒で酔ってるんですっ。疲れとか色々・・・重なって、だからっ。もう今日はお休み下さいっ」
遮るように零が声を上げ。傍らをすり抜けるように部屋を出て行く。
「レイっ」
「あ、あたしも・・・頭を冷やしたいから。今夜は侍女のお部屋にお邪魔させて貰います。・・・・・・・・お休みなさい、シヴェリ皇子」
逃げるように廊下に出。シヴェリが追って来る前に扉を閉ざした。
驚いている部屋番の兵達を見上げ、滲んだ涙を拭い。
何も言わずに零は走り出した。

馬鹿だ、あたしは。
吉岡先輩が好き。先輩の所に帰りたい。それなのに。

シヴェリ皇子が言いたかった事がわからないほど子供じゃない。
嬉しかった。でも嬉しいと思った自分が嫌だ。
こんなに自分の事が嫌いになったのは初めてだ。

侍女の部屋はそれほど離れた場所ではないけれど、零は侍女達に泣いた顔を見られるのが嫌だった。
少し気を落ち着かせてから行こう、そう思い。
廊下の突き当たりにある中庭へ続く扉をそっと開いた。
・・・・・・・・・・・・昼間此処で皇子と一緒にいた時は何も思わなかった。
こんな気持ちになるくらいなら、あの時悪魔に食べられていた方がマシだった。この世界に引き込まれなければ良かった。

あたしは、誰が好きなの？

しゃがみ、声無く涙を流し続ける零。その後ろから静かに近付いて来る複数の影に気付く事はなかった。

9話　嫉妬

「・・・所詮は男を知らぬ小娘」
三日月がほんのりと照らす夜空を見上げながらエリザベートは1人呟いた。
皇子の側室に上がる事がどういう事か。どういう意味か。
皇子が彼女を抱く、その前に。身を重ねる事に恐怖を憶えれば・・・
如何に美しい姫とて皇子もそんな娘に興味を抱かなくなる。
まして身分の無い娘ならなお更に・・・・・・。
「シヴェリ皇子・・・・・・」
かり、とエリザベートの整えられた爪先が窓辺の壁に小さな音を立てた。

「・・・・・・あ、貴方達誰？」
中庭で泣いていた零はいつの間にか複数人の男達に囲まれていた。
衛兵のような鎧を纏っているわけでもない、身なりを見れば一見町人にも見えなくはない。
だが皇宮に在る以上はそれなりの身分か或いはコネクションがある者なのだろう。
しかし彼等は零を見遣ったまま薄笑いの笑みを浮かべており。その表情を見た瞬間零の背後にぞくりとした何かが駆け上がった。
それは警鐘だ。
無意識に後ろに下がった零に男達が喉を鳴らす。
「おっと、何処にも逃げられやしないさ、お姫さま。出入り口は俺達の後ろにあるからな」
「巡回兵に見付かるとまずい。一先ず皇宮の外へ運び出せ」
頭が真っ白になって何がなんだかわからない。この人達は誰？何を

言っているの？
咄嗟に走り出そうとした零の手首を男の１人が捉え。零の口から悲鳴が上がる前にその口も大きな手で塞がれる。
「ん、ん・・・・・・っ！！」
「おい、急げ」
大の男の腕力にただでさえ小柄な零では敵うはずもなく。ぐいっと引かれればよろめくように零は引き摺られ始めた。
怖い。
何処へ連れて行かれるの？何をされるの？
怖い・・・・・・っ！！シヴェリ皇子・・・・・・っ！！！

「あっ・・・・・・！！」
どんっと突き飛ばされる形で零は床へと投げ出された。
皇宮の裏口から連れ出され、強引に馬に乗せられて。闇夜を駆けたのはほんの１～２分だ。
皇宮からさほど離れた場所ではない、のは体感的にわかっていても、この建物のなかで騒いだ所で兵が気付くはずも無い。
２、３、４・・・４人の男達が零の身体を見下ろしながらにやにやと笑っていた。
「やめて」
複数の手が伸びて来て、零の身体に掴み掛かる。
「やだ、やめて・・・っ！！」
び、と音がしたのは衣が強引に引き千切れた音だ。もがくように手足を虚空へ伸ばすがそこには何の助けも無い。
男達の鼻息荒い吐息が間近で感じられて。零はぎゅっと眼を閉じた。
「嫌ああああっ！！シヴェリ皇子っ！！！」

「・・・・・・何をしている！！」
声に男達の手が止まり。圧し掛かられた形で零は泣き顔を上げた。
戸口。そこには１人の騎士を伴ったシヴェリが血相を変えた様子で

立っており。零の顔を見付けた瞬間にその剣を抜いた。
ひいっ！！と男達の口々から悲鳴が上がるが出入り口はシヴェリ達が抑えている。逃げ場は何処にも無い。
「レイから離れろ！その薄汚い手を離せ！！」
一振り。零に圧し掛かっていた男の前髪がはらりと落ち。慌てて壁際へ逃げていく。ようやく自由になった零をシヴェリが抱き起こし。連れ立って供していた騎士がシヴェリの代わりに男達へ剣を向けた。
「レイ・・・レイ。怪我は無いか？身体は・・・・・・」
「皇子、・・・・・・皇子っ・・・・・・！！」
喉を震わせ泣きじゃくるレイを抱き締めたままシヴェリが男達を睨み付ける。
「お、俺達はまだ何もしてないっ！本当だ！！」
1人が慌てて両手を振ってそう言い。騎士・・・短い蒼髪の男性がその黄土色の眼を細めた。
「皇子・・・この者達を如何なさいますか？皇家の身分ではないとはいえ、姫君は皇子のお気に入りの側室・・・。貴方さまがお望みなら、今すぐにでも首をはねますが」
首をはねる。その言葉に零がシヴェリの腕のなかでびくりと震え。シヴェリが騎士を見遣った後に小さく溜息を零した。
「レイが受けた恐怖を思えば首をはねろ、と言いたいところだが・・・・・・。それは賢明な判断とは言えんだろう。なかなか意地悪い言い方をするな、サーシェス」
にこりとサーシェスが笑い。それから男達へ向き直った。
「警備の厳しい皇宮内でこれだけの事を仕出かすには大きな後ろ盾が必要です。この者達だけの計略とは考えにくい。・・・一先ずは警備所へ連行し、首謀者の名を吐かせるのが一番かと」
「・・・・・・任せた。私が行うとうっかり殺してしまうかも知れないからな」
シヴェリとて今まで幾人もの姫の側室への希望を蹴って来た自覚はあった。その絡みでの嫉妬か。

誰々とは特定は出来る推測ではなかったが、この零へ対しての仕打ちは自らが原因だろうという事はシヴェリとて察していた。

私が護らねば。

ぎゅっと抱き締める手に力が篭るのを感じ、零はその腕のなかで眼を閉じた。

「・・・・・・サーシェスは近衛隊に務めている騎士だが、私とは幼馴染の間柄でな。剣の腕も立ち、次期の近衛副隊長と言われている。今回の事もサーシェスが物音に気付いて私に知らせてくれたのだ」

零はシヴェリに連れられたまま大人しく皇子の部屋に戻っていた。未だ恐怖から彼の衣の裾を握り締めた形で寝台に横たわっており。その眦から零れ落ちる涙をシヴェリの指先が拭った。

「・・・すまない、レイ」

「・・・・・・・・・・・・・・？」

「今夜の事は恐らく・・・私の優柔不断さが招いた事だ。今まで私は側室を迎え入れる事を全て断って来た。そして、そこにお前だ。お前の存在を嫉妬した者の犯行の可能性が一番高い」

「皇子の所為、じゃないです・・・。あたしが・・・あたしが無用心に夜中に出歩いたりしたから・・・・・・」

さり、とシヴェリの指先が零の黒髪を撫で。零は再び涙を流した。それを痛ましげにシヴェリが見下ろす。

「ウィンドが言った事も・・・嫌味ではなくきちんと受け止めねばならんな」

「・・・・・・・・・・・・」

「お前が組み敷かれているのを見た瞬間・・・・・・心臓が止まる

かと思った」
ぎし、と寝台が軋み。零は大きく眼を見開いた。
横にシヴェリが上がって来る。先ほどの男達の事を思い出せば恐怖で身体が震えて来るが、シヴェリが零の後ろから柔らかく掛け布団ごと抱き締めて来ると何故かその震えが止まった。
「皇子・・・・・・」
「私はウィンドにも・・・ならず者にも、お前を奪われたくは無い。・・・・・・私の。私だけのものにしたい」
「・・・・・・で、でも、あたしは・・・・・・」
「わかっている。お前にも帰るべき場所がある事は。だが・・・・・・それでも。・・・私はお前の事を愛してしまったんだ」
シヴェリの言葉に零の双眼からポロポロとまた涙が零れた。
ぎゅっと唇を噛み締め。無理矢理に眼を閉じる。
零が泣いているとわかり、シヴェリもまた何処か苦しげに眉を顰めた後無言で眼を閉じ。

こうして波乱に満ちた夜は更けていった・・・。

１０話　恋の終わり

シヴェリは悩んでいた。先日捕らえた賊を問い詰めた結果出た名前、その名前に思い当たるものがあったからだ。
エリザベート姫。
一度だけ会った事がある、皇宮警備近衛隊長モーラの娘だ。
言葉を交わした事は無かったが、控えめで美しい少女だったのを憶えている。
その後、モーラを通じ側室へ希望して来たが・・・。
矢張り、原因は自分にあったか。
今回の事、彼女が思い詰めての犯行だったと思えば彼女だけを咎めるわけにもいかない。
「そう」追い詰めてしまったのは自分なのだから。
捕まえた賊等は死刑にするわけにもいかず秘密裏に処罰し孤島へ流刑としたが、こういう裏事情がある以上エリザベートまで罰するわけにはいかない。
だが放置するわけにもいかない。またいつ何時零に危害を加えて来るかわからないのだ。穏便に彼女との会話の場を設けねばならないだろう。
「・・・・・・。どうしたものか・・・」
シヴェリは壁に凭れたまま疲れた溜息を１つ零した。

「・・・悔しい」
侍女経由で差し向けたならず者達は戻らず、零は翌日中庭に姿を現した。
つまりそれは失敗を意味していた。
ガシャン！！と硝子のグラスを床へ投げ付けて、エリザベートは悔

しげに歯を食い縛った。
零は少々怯えたような眼差しをしていたが、逆にシヴェリは零を周囲から庇うような仕草をしていたとも聞いた。
2人の結び付きはますます強くなっただろう、というのが侍女達の見解だった。
「一体どうすれば・・・」
何処か皇子の眼に入らない、絶対手の届かない場所へ連れ去ってしまえれば。
「・・・・・・・・・・・・！！！」
エリザベートは動きを止め。ツ・・・とその頬を汗が伝った。
ロストレヴェス。
我が国イシュバートと数百年数代に渡り争い続けている隣国。
敵国に彼女を渡してしまえばそれこそ永遠に・・・。
「でも、どうやって・・・」
当然ながらイシュバート生まれイシュバート育ちのエリザベートにロストレヴェスの知り合いはいない。
「無理だわ、やっぱり・・・・・・・・・・」
下手をすれば国そのものを危険に陥れる。
この手は使えない。エリザベートは悔しさと悲しさに涙を滲ませて。
その場に崩れ落ちた。

・・・・・・どれくらい泣いていただろうか。
「エリィ？エリィ、部屋に居るのかい」
何処か嬉しげな父の声にエリザベートは涙を拭い顔を上げた。
「え、ええ。お父さま・・・一体どうなされました？」
「喜べ、エリィ。お前の想い人が訪ねて来て下さったぞ？」
エリザベートは心臓が止まるかと思うほど驚いた表情を浮かべた。
まさか、ばれたのだろうか。
私を罰しに来たのだろうか。
割れ鐘のように鳴り続ける胸をぎゅっと片手で押さえたままエリザ

ベートは汗を滲ませた。
「エリザベート姫、失礼致します」
ノックが聞こえたがエリザベートはとっさに反応出来ず。無言のままシヴェリを出迎えた。
「モーラ、すまないが席を外してくれないか」
秘め恋い事と勘違いをしたか、モーラが嬉しそうに頭を下げ。いそいそと退室していく。
部屋に2人きり。だが待っているのが恋のやり取りじゃないのはエリザベートも重々わかっていた。
無言で頭垂れているエリザベートをシヴェリがじっと見つめ。
「・・・・・今日は。・・・・・・・・・姫に謝罪を申したく参上させていただいた」
「しゃ、ざい？」
「貴方がなさった事を咎めはしない。赦せるようなものではないが・・・・・・・・そこまで追い詰めてしまったのは私の責任だ」
カッとエリザベートの顔が赤くなる。
知っている。皇子は何もかも知っているのだ。知っていて・・・言っているのだ。
「・・・・・・・・・・・・お、おっしゃってる事が・・・わかりませんわ」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・どうして、なんですの？」
震える声でエリザベートが口を開き。キッと睨み付けるようにシヴェリを見遣った。
「私の願いを断り・・・どうしてあの娘を側室に・・・っ！！？」
「・・・貴方だけではない。貴方を始め多くの女性達の心を傷つけてしまったと思っている。だが、貴方がその想いを未だ棄てずにいるように、私もこの想いを棄てる事は出来ない」
エリザベートがはっとする。そして両眼からポロポロと涙を零し。
「貴方は・・・卑怯ですわ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
ふら、とエリザベートが棚の方へ向かい。護身用の一振りの短剣を取り出した。シヴェリの片眉が上がり。
「・・・姫」
「・・・・・・・・・・・・赦して、皇子」

ガターン!!!

大きな物音を聞き、大間で茶を飲んでいたモーラは慌ててエリザベートの部屋へと向かった。
「エリィ?何かあったのかい?シヴェリ皇子?・・・・・・・・・・!!」
そっと部屋を覗いたモーラが言葉を失い。顔色を変えて部屋へ飛び込む。
2人は居た。ただしシヴェリの左腕からは血が流れており、エリザベートの手には血で塗れた短剣が握られていた。
わなわなと身を震わせた後、モーラはエリザベートへ駆け寄り、その手から短剣をもぎ取ると大声を上げた。
「おい、誰か!誰でもいい!!手当て箱を早く、急げ!!!・・・シヴェリ皇子、シヴェリ皇子・・・っ。ああ、娘が・・・娘が何て事を・・・っ!!」
「あ、ああ。モーラ、落ち着け。落ち着いてくれ。私は大事無い」
モーラがエリザベートを睨み付け、そしてその大きな手でエリザベートの頬を力一杯張った。
「!!モーラ!!」
シヴェリが叫ぶのとエリザベートが床に転がるのはほぼ同時で。駆け寄ろうとしたシヴェリだったが駆けつけたアリエスダヌス家の侍女に止められる。
「皇子、手当を」
「いや、私の傷はそれほど・・・。エリザベート姫!」

「・・・・・・・・・何て事をしてくれたのだ、エリザベート！お前が皇子を好いている事はわかっていたが、まさかこんな事を仕出かすとは！！皇族に刃を向ける事は死罪になってもおかしくない重罪だぞ！！お前は・・・お前は、アリエスダヌス家の名に泥を塗ったのだ！！恥と知れ！！」
「・・・・・・・・・叶わぬ恋ならば皇子を道連れに、と思いましたが。どうやら失敗したようです」
くすくすと笑うエリザベートにモーラがもう1発頬を張ろうとする、が、シヴェリがそれを留め。
それを眺めていたエリザベートが眼を伏せた。
「・・・殺すなら殺すと良いでしょう。それが叶わないなら、国外追放を望みます。もうアリエスダヌスの名にもイシュバートにも未練はありません」
わなわなと震えるモーラを止めながらもシヴェリは眼を細めていた。
「死罪等、そんな罪は与えない。貴方を追い詰めたのは私だ。・・・この国が嫌なら出る事は構わないが、追放はしない」
「皇子っ」
「モーラ。彼女に殺意は無かった。わざとこの状況を作ろうとして行った事だ。傷も浅い、生命に別状はない。姫は始めから急所を狙いはしなかったのだ。だから・・・そう彼女を責めないで欲しい。それと、どうか。この話は内密に頼む」
「罪に問うな、と？こんな重罪を犯した娘を・・・っ」
「頼む」
頭を下げられ、モーラが驚いた表情を浮かべ。ぐ、と歯を食い縛った後、エリザベートに声を掛けた。
「皇子の温情に感謝なさい。・・・日が暮れる前に荷を纏めて、家から・・・否、国から出ていけ。当面の生活費は侍女に持たせる」
薄く浮かべた笑みは自棄的なもので。シヴェリはそれを気掛かりにしていたがそれ以上何も言えなかった。

11話　迷走

「・・・ねえ、もっとこの国の事を聞かせて欲しいの」
甲斐甲斐しく身の周りの世話をする侍女達に零はそう声を掛ける。
シヴェリからは美しい森が周囲を囲んでいると聞かされた。ウィンドからは美しい湖があると聞かされた。
ホープの花畑までは足を運んだが、零がそこに行くまでに見知った景色は「水と緑が多い国」という事だった。

侍女達・・・マリエ、ルト、ラシェ等3人は初顔合わせの時に零を風呂場に強制連行していった者達であり、シヴェリの寝食の世話をしている者達だった。
零が異世界から迷い込んだ事を知っている数少ない理解者達だ。

零の言葉に宝飾を選んでいたラシェが顔を上げる。
「お着替えが済んだら書庫の方へご案内致しますよ」
「そ、そんな大袈裟なものじゃなくて良いの。・・・こんな場所がある、とか、こんな人が居る、とか・・・貴方達のお奨めの場所とか、あったら・・・そういうのが聞きたいなあ、って思っただけで」
戸惑うように言葉をごもらせた零にマリエとルトもにっこりと笑い。
「そうですね・・・。庶民的な感想で宜しいなら。城下でたまに来るトロストの宝飾売りが良い仕事をしていますね」
「トロスト？」
「トロストは我が国の隣にある小さな国です。砂漠にあるオアシスを中心に栄えた国でして・・・。ああ、ルト。何か描くものはあるかしら」
マリエがそう尋ね。ルトがポケットから小さく畳んだ和紙に似た髪を取り出した。
マリエが受け取り、羽ペンで丸を3つ、横に並べる。一番左には「

ロストレヴェス」、真ん中には「イシュバート」、一番右には「トロスト」の名が書かれた。
驚く事に零はこの世界に来た瞬間、言語だけではなく文字も理解出来るようになっていた。

（火災で死んだばかりで消失する事無く遊離した魂がこの世界に引き寄せられ、悪魔召喚の際の構成式に取り込まれて偶然肉体を得た可能性が高い）

数日前この世界で目覚めたあの日。ウィンドはそう言った。
仮説。だが時間が経てば経つほどその仮説が真実に近いと身体が理解して来る。
再構成されたから、この世界のものとして生まれ変わったから、この世界の最低限の知識を陣から引き込んだ可能性が強いのだと。

「ロストレヴェス・・・」
その名に聞き覚えがある。初めて陣の上に現れた時に聞いた単語だ。あの時はちんぷんかんぷんだったが、今では何となくわかる。イシュバートと敵対している国の名前だ。
「レイさま？」
「あ、ううん・・・。あ、あのね。後・・・あたしはホントのお姫さまじゃないし、その、「レイさま」っていうのはちょっと・・・・・」
「何を仰られるのですか。どんな状況下で国入りをしたとしてもレイさまは最早シヴェリさまの大事な姫君。第2皇子のご側室という位置はこの国においてそれなりの地位にあたるものです。私達庶民にとっては雲の上の方には違いありませんよ」
「偉いのはシヴェリ皇子だけで充分な気がするけどなあ・・・」
皇子の大事な姫君。そう言われると先日の夜の告白を思い出す。シヴェリは自分を愛していると言ってくれた。

あの日の言葉にまだ、まだ何も応えていない。
あの夜以来、シヴェリは変わらずに接してくれているけれど、それでも待っているはずだ。零の、応えを。
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
無意識に表情に出してしまい何処か悲しげに俯いてしまった零を見遣り、3人もまた表情を曇らせてしまった。
「レイさま・・・・・・・」

「・・・・・・どうかしたのか？」
新しい声に3人がはっとして。零もまた顔を上げた。気付けばシヴェリが戸口に立っており。
取り繕うように零が口元に笑みを浮かべてシヴェリを出迎える。
「お、お帰りなさい。・・・皇子？腕・・・包帯？何処か怪我を？」
「ん？ああ、いや。ちょっと引っ掛けただけだ。大した事は無い。・・・・・・また見事に仕上げて貰ったな、レイ。とても綺麗だ」
そ、と耳の装飾に触れられれば零は頬を染めて視線を落とした。
「マ、マリエ達のお化粧とかセンスとかが良いだけです」
「それもある。が、素材が良くなくてはな？」
シヴェリが片手をひらりと振れば3人が頭を下げて部屋を出て行き。
零はそれを何処か心細そうに見送った。
ぱたん、と扉が閉まる音が聞こえ。シヴェリが細く息を吐き出す。
「・・・・・・・レイ」
「・・・はい」
「この前は済まなかったな。お前の気持ちも考えず、私の気持ちを押し付けてしまって」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
ふる、と零が首を横へ振り。シヴェリが伸ばし掛けた手を留めた。
ぎゅ、と握り拳を作る形でそれを下ろし。
「案ずるな、お前の帰り道探しはこれまでと変わらず続ける。・・・先日の事はどうか、忘れてくれ」

こつり、とシヴェリが再び部屋を出て行き。

零はその場に声無く泣き崩れた。

どうしようもならない気持ちがいっぱいで、苦しい。

それは零も、シヴェリも、同じ事だった・・・・・・・・・・・・。

１２話　その指先に在るものは

「あーあ、皇子もレイさまも見ていて苛々するわ。お互い愛し合っているのは誰の目から見ても明らかなのに」
侍女達の控え室でそう愚痴垂れたのはルトだ。それをマリエが眉を顰めながら咎め。
「ルト！・・・レイさまのお立場からしてみればそうも言ってられないでしょう。いつこの国を離れるかわからない。皇子の想いに応える事はレイさまの故郷を棄てる事に繋がるのだから」
「でも帰れるかどうかもわからないのでしょ？」
篭に入ったシーツを折り畳みながらマリエはひっそりと溜息を零した。
「わからなくても、１００％帰れないと決まったわけじゃない以上は・・・お帰りになりたいでしょう。レイさまはお美しくてもまだ幼さが残る方。簡単には割り切れはしないでしょう・・・・・・。・・・・・・お２人方もお辛いのよ。そんな責めるような言い方をしてはダメ」
「はーい」
ルトが肩を竦め、戸棚の壺に手を伸ばした。それまで黙って書を読んでいたラシェが口を開き。
「・・・レイさまが故郷を思って寂しがらないくらいに皇子が積極的にレイさまを愛してあげれば良いんじゃないかしら」
「・・・・・・それはそうだけど、皇子だって今の歳まで側室を持った事が無いくらいに女性の扱いには慣れてないのよ」
積極的にだなんて無理無理、と壺のなかから薬草を取り出しつつルトが首を振る。うーん・・・とラシェが考え込み。
「一服盛る？」
「貴方達、いい加減にその無駄口を閉じなさい」
マリエの一喝に２人はそのまま沈黙した。

「・・・・・・お？シヴェリ？」
廊下で腕組をしながら夕焼け空を眺めていたシヴェリはふと少し離れた所で上がった声に顔を向けた。
そこにはウィンドが数人の男女を連れて歩いて来る所で。シヴェリは壁から背を離してウィンドへと向き直った。
「これは、皇帝陛下」
「はは、堅苦しい呼び方をするなよ。とはいえ公式の場でまで崩されると困るがな。今はそうじゃない、今まで通りウィンドと呼んでくれよ」
先日の祝福事件も何処吹く風で。あっけらかんとした笑いを浮かべるウィンドにシヴェリが苦笑を浮かべる。
少しの沈黙の後、ふう、と息を吐き出し。いつもの口調でウィンドへと口を開いた。
「・・・下の者達に示しがつかないだろう。困った奴だ。・・・それにしても、どうしたんだ？」
「ああ。トロストから医療系魔法を学びに来られているアリシア殿だ」
後ろの男性は護衛だろう。紹介された長い灰髪、灰眼の美女が笑み顔で頭を下げた。
「初にお目に掛かります、シヴェリ皇子。私はトロスト宮廷魔術師が長、アリシア・メル・シープです」
「・・・シヴェリ・クイ・イシュバートです。・・・・・・おい、ウィンド。こういうのは「公式の場」というのだろうが。全く・・・・アリシア殿、お見苦しい所をお見せして申し訳ない」
シヴェリの言葉にアリシアがくすくすと笑った。
「いえ、陛下がシヴェリ皇子と仲が宜しい話は遠くトロストまで伝わっております。噂に違わず仲の良いお姿を見られて感動しますわ。

皇位継承権を持つ兄弟姉妹の場合、仲が悪い方が多いのは事実ですから」
「そういえばトロントの皇と皇弟は仲が良くなかったな」
ウィンドの言葉にアリシアが肩を竦め。シヴェリが眉を上げた。
「・・・・・・そういう事は思っても言わない事だ」
「む、そうか。それより、レイはどうした。こんな所にお前が居るという事は早速けんかでもしたか？」
「嬉しそうに訊くなっ！けんかはしてない、心配するな。・・・・・・それよりもアリシア殿と何処かに行く所だったんだろう？」
「そうだった。医療研究棟の方にな。じゃあな、シヴェリ。レイと不仲になったらすぐ知らせろよ、俺が貰いに行くから」
意地悪い笑みを浮かべながらウィンドがアリシアを促し。あらあらと双方を見遣った後にシヴェリへと頭を下げた。
立ち去っていく2人＋護衛を見送りつつ、シヴェリは再び溜息を零した。

「陛下、レイさまとは一体？」
「ん？ああ。レイはシヴェリが唯一囲ってる側室でな。なかなかの素質がある娘だから俺も狙ってたんだが・・・」
世の中そう上手くいかないものだ、とウィンドが笑い。アリシアも小さくそれに続くように笑った。
「・・・陛下も女性の方にはさほど不自由は無さそうに見えますが・・・。よほどそのレイさま・・・いえ、レイ姫はお美しい方なのでしょうね」
「ははは、シヴェリを出し抜けていれば今頃皇妃に間違い無くなっていた女だな」
それは勿体無い、と。2人は笑いながら医療研究棟のなかへと消えていった。

「・・・・・・お父さん、お母さん・・・・・・。吉岡先輩・・・・・・」
夕焼けが闇に飲まれていき、やがて空には星が瞬き始める。
部屋を出、バルコニーへ出た零は空を見上げて眼を細めた。
この世界に来て数日。この世界で生きて数日。
たった数日前までは家でご飯を食べて、学校で勉強をして。先輩の事を考えていた。
それが、この世界に来て・・・・・・。
「レイ、風邪を引くぞ」
後ろからふわりとマントをかぶせられ、零はシヴェリを見上げた。
「皇子・・・・・・」
「・・・・・・すまんな。私にはこれくらいの事しかお前にしてやれない」
「いえ・・・・・・。ありがとうございます」
ザ・・・と風が吹き。零の横髪を浚って舞い上がる。少し乱れた髪をシヴェリの指先が整え。
「・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・」
その頬に指先が添えられた。

・・・・・・・・・・・・あたしは。
・・・・・・・・・・・・私は。

「・・・・・・・・レイ・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・」

・・・・・・ダメだ。自分の心を偽れない。
あたしは皇子が好き。皇子の傍に在りたい。
元の世界に戻れない事が心細いんじゃない。皇子から離れる事が・・・

・心細いんだ。それに、気付いてしまったから・・・・・・。

零は気付けばシヴェリにしがみ付いていた。思い掛けない行動にシヴェリが眼を丸くし。それから受け止めるように抱き締める。
顎を取られ、重ねられる唇。
それはウィンドの時のような不意打ちでもなんでもない。壊れ物を扱うかのような優しい口付け。
「・・・・・・愛している、レイ」
「・・・・・・皇子・・・・・・」
「・・・・・・愛している・・・・・・」
ぱさり、とマントが零の肩から落ち。それでもシヴェリは構わずに零を抱き締め続けていた・・・・。

13話　染み

「う、ん・・・・・・」
零は肌寒さを感じて薄く眼を見開いた。自分が枕にしていたもの、それが男性の腕という事に気付き、ぎくりと顔を上げる。
すぐ真横で寝息を立てているシヴェリの寝顔を見付ければ、かあっと顔が赤くなった。
元々シヴェリの寝台はキングサイズで、だけれど1つしかないから零は仕方なくシヴェリと共に同じ寝台で寝起きをしていたのだが・・・。
いつもと違うのは零にもわかる。
互いに・・・・・・裸だ。そう、あの後・・・・・・。
「・・・・・・朝、か・・・・・・？」
眼を閉じたままシヴェリの腕が動き。零は赤い顔のまま傍に落ちていた自分の衣類をかき集めた。
「・・・・・・？・・・・・・レイ？」
慌てて着衣を身に着けている零にシヴェリの思考も戻って来て、くすりと笑う。だが敢えて何も言わないままその両眼を閉じた。
このまま着替えている様子を見続けるのも悪くはないが、零が落ち着かないだろう。そう思ったのだ。
「お、皇子・・・・・・」
「・・・・・・うん？」
「太陽の位置が・・・・・・。あ、あたし達、もしかして凄く・・・寝過ごした、とか・・・・・・」
時計が無い生活には大分慣れ始めていた。窓の外の太陽が真上に近い状況に気付けば零が慌てた声を上げ。シヴェリが薄く眼を見開いた。
「・・・・・・ああ、気にする事は無い。「合図」はしておいたからな。侍女達もわかっているだろう」

「合図？」
そこでようやくシヴェリが身体を起こし。ふあ、と猫のような欠伸を1つ漏らした。
そういえば朝一番にいつも身支度を整えに来てくれる侍女達の姿も無い。不思議そうに零がシヴェリを見遣り。
「・・・・・・部屋の扉の金具に赤い布を巻いてある。所謂、「お楽しみ中だから入室禁止」という奴だ」
零がぴしりと固まり。それからわなわなと震え始めた。
つまり部屋の門番兵や侍女、部屋の前を通る皇族等は皆、シヴェリと零が部屋のなかで何をしていたのかわかっているという事だ。
バッと零は部屋の扉を開け、そこに結んである赤い布を外し。再び部屋の扉を閉める。
あまりに恥ずかしそうに赤い布を握り締め、扉の前でへたり込んだ零の後ろ姿にシヴェリがくっくっくと喉を鳴らし。
「そういう事だ。まあ、皇宮のなかではさほど珍しい事ではないから気にするな」
「き、き、気にしますっ」
「お前は私のもの、という事を知らしめる意味では丁度良いだろう？」
複雑な表情で零が唇を尖らせた。
抱かれてる間に「好き」とか「手放さないで」とか色々うわ言を言った記憶が微かにある。
・・・・・・初めての事で余裕が無かったとはいえ・・・・・・零は恥ずかしくて死にそうになった。
「レイ」
まだショックでへたり込んでる零にシヴェリが寝台に横になったまま片手を差し出し。「おいで」と声を掛けた。
立ち上がり、横になっているシヴェリの前に立つ。
「朝の挨拶がまだだが？」
「・・・・・・え？あ・・・・・・お、おはよう・・・ございます

？」
「言葉も悪くは無いが・・・・・」
ぐいっと腕を引かれ。零はシヴェリの上にバランスを崩して凭れ掛かった。
重ねられる唇。零はそのまま両眼を閉じ、それを受け止めた。

「やあ、アリシア殿。調子はどうだい？」
医療研究棟で魔法使い達と会話していたアリシアがウィンドの言葉に顔を上げた。
「これは皇帝陛下。ええ、此方の魔法技術はとても高くて・・・覚え甲斐があります」
にこやかに応じるアリシアにウィンドがうんうんと笑った。
「我が国の数少ない自慢だからな。数代前の皇帝が医療魔法の権威だったくらいだ。何代目かは忘れたがな」
「トロストでは流行病や熱病が多いので医療魔法の技術は大変助かります」
「はは。どんどん学んでいってくれ。そちらからは充分見返りに合うほどの貿易品を入れて貰っているからな。ああ、それと・・・今日レイと会わせてやろうと思ったんだが、ちょいと都合が合わなくなったんでな。折角時間を空けて貰っていた所申し訳無いがまた後日、で構わないだろうか？」
ぽり、と後頭部をかいたウィンドにアリシアが笑顔で頷いた。でもすぐその表情が曇り。
「何処かお加減が？」
「良いや？お楽しみ最中って奴だな」
ふー、と溜息を吐いたウィンドにアリシアがくすりと笑い。
「それは、陛下もおかわいそうに」
「かわいそうと思ってくれるのかい？」

壁に手を突き、じっとウィンドがアリシアを見詰め。アリシアもまた小首を傾げるように瞳を笑ませウィンドを見詰めた。

「うん？・・・・・・トロストから書簡だと？」
一方、皇帝はナンパ、皇子は側室と部屋篭りという胃が痛い状況で1人執務にあたっていた大臣は兵からの知らせに書類から顔を上げた。
受け取った筒を開け、なかの羊皮紙を取り出す。そしてそこに書かれている文面に首を傾げた後、眼を丸くした。
「こ、これは。馬鹿な、こんな事が・・・っ！？・・・・・・・ウィンドさま、いや、皇帝陛下は何処(いずこ)におられるか。・・・陛下！！」
荒げた声に応えるものはなかった。

静かに回り続けていた平穏の歯車。そこに生じた小さなひびは少しずつ少しずつ、大きくなっていった・・・・・・。

１４話　穿たれた刃

皇宮には使われていない施設が幾つかあり、ウィンドとアリシアはその１つである旧神話学研究室に居た。
「すまないなあ、俺の部屋にご招待出来れば良かったんだが」
口煩い連中が居てな、とウィンドは笑いながら着衣を整えていた。未だ半裸なままアリシアがそれを見上げ。少し汗の浮いた額に零れた前髪を手の甲で払った。
「いえ、お気になさらず。・・・・・・たまにはこういう場所も、ね？」
「ふうん？清楚なお嬢さまかと思っていただけにちょっと驚いたな。まあ、そういう女は嫌いじゃない。気が向いたら後宮に来てくれよ。あんたなら歓迎するさ。・・・・・・ん？」
そこまで言った後、ふとウィンドは部屋の外がざわめいている事に気付いた。此処にウィンド達が居る事に気付いているわけではなさそうだが、足音がひっきり暇無し右往左往しており。
怪訝そうに眉を顰めた。
「？・・・・・・何だ？」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
アリシアもまた部屋の外の音に耳を傾け、そして灰色の眼を細めた。
「・・・・・・もう気付かれたか」
ぽつりと零れた言葉はウィンドの耳に言葉としては届かず。不思議そうにウィンドがアリシアを見遣る。すらりとアリシアが立ち上がりウィンドを見詰め。そして片手をその方へと向けた。
「なん・・・・・・」
何かおかしい、そう思った瞬間にはウィンドは指先１本動かせられなかった。まるで蛇に睨まれた蛙のようにじっとアリシアを見詰め。
「アリ・・・シア？」
「もう少し遊べるかと思ったけれど。もう戯れの時間はお仕舞いね、

皇帝陛下。貴方とのじゃれあいは本当に楽しかったわ。もう終わりなのが勿体無いくらい」
ぎりっ。見えない束縛が強くなる。これは、神経魔法だ。それもこんな・・・・・・無詠唱で此処までの硬度を構成するのは。
並大抵の魔法使いに出来る芸当ではない。
「あんた、は・・・・・・っ！！？」
ウィンドの言葉の先でアリシアがにい、と瞳を笑ませた。

「・・・・・・騒々しいな、何かあったのか？」
部屋から出て来たシヴェリと零に大臣が足を止め。騒動を聞き付けたエルリス皇妃とパールもまたその場へ現れる。
「これは一体？」
「・・・・・・つい先刻届いたトロストからの書簡です。これをお読み下さいっ」
焦りを隠そうとしない大臣の手から書簡がエルリス皇妃に渡され、それを横からシヴェリとパールが覗き込む。
それはトロスト皇からのものだった。
派遣予定の宮廷魔術師長であるアリシア・メル・リープ始めの一行が道中何者かの襲撃に遭い、全滅。
その為に派遣日時と人員の変更を求む、というものだった。
「アリシア・・・・・・？」
シヴェリの脳裏に昨日ウィンドが紹介してくれた灰髪の美女が浮かび。エルリス皇妃とパールもまた挨拶を受けていたのだろう。思い出せば眉を顰めた。
「ではあの女性は一体？」
「今の我が国の現状を考えると・・・・・・ロストレヴェスからの

刺客の可能性が高いのです。しかも昼間、陛下が医療研究棟に足を運ばれた後、２人共行方を晦ましている、との・・・・・・」
女好きなウィンドの事だ。彼女を誘った可能性は高い。
だが相手に敵国の刺客の可能性が出て来たのなら・・・・・・話は変わって来る。
「ウィンド・・・・・・っ！！」
「シヴェリ、私も探すのを手伝います。義母(かあ)さまは大臣と共に居て下さい」
パールがシヴェリについて行こうとし。零もまたそれに続こうとする。はっとしてシヴェリが零を留め。
「レイは母上達と共に居ろ」
「え・・・・・で、でも・・・・・・」
「お前は義姉上(あねうえ)のように魔法に長けているわけでも無い。相手の戦力がわからない以上、いざという時に私が護り切れるとは言い切れないからな」
役に立てない。ぎゅっと握り拳を作り項垂れる零にシヴェリが苦笑を浮かべ、そっと抱き寄せた。
「良い子で待ってろ、すぐ戻る。・・・・・・母上、レイの事をお願い致します」
「わかったわ。さ、レイ。此方へ」
エルリス皇妃に手を差し伸べられ。零は小さく頷いてその方へと向かった。走り去るシヴェリとパールを振り返り見る形で見送り。

・・・・・・悔しい。
何か１つでも力があったなら、皇子の力になれたのに・・・・・・。

「大臣。不用意に情報が広まればそれは国の動揺へと繋がります。それこそ、相手の思うつぼでしょう。兵の配置はさりげなく、だけど不安を与えぬよう・・・・・・わかっておりますね？」
「はい」

少々厳しめの声でそう大臣に言った後、エルリス皇妃は零の肩にそっと手を置いた。
「大丈夫ですよ。シヴェリもパールも、剣技魔法共それなりの修行は重ねています。勿論、陛下も。簡単に賊に屈するような事はありませんよ」
「・・・・・・はい。・・・・・・・・でも。・・・・・・・皇妃さま、あたし・・・悔しいんです。シヴェリ皇子からも・・・陛下からも、たくさん色んなものを貰ったのに。いざって時に何もお返し出来ない。何も役立てない、事が・・・・・・」
零の言葉にエルリス皇妃が困った笑みを浮かべ。「そうね」と口を開いた。
「・・・・・・だったらお強くなりなさい。今からだって遅くは無いわ。だって貴方はまだまだ若いんですから。たくさん強くなって皇子と陛下を支えてあげてね。貴方が望むなら私は幾らでも援助しますよ」
「は、はい。・・・・・・・ありがとうございます、皇妃さま」
「私もね、そう思った時期があったの。だから貴方の気持ち、わかりますよ。頑張って」
にこりと笑ったその笑顔に、零は元の世界の母親の顔を重ねてしまい。滲んだ涙そのままに零もまた笑みを浮かべた。

・・・・・・あたし強くなる。だから。
シヴェリ皇子、ウィンド皇帝陛下、パールさま。どうか、どうか。
無事で戻って来て・・・・・・・。

15話　楽園の毒蛇

「さあ、陛下。この喜劇の幕を開けるのは貴方よ」
「・・・・・・っ、何、を・・・・・・」
動けないウィンドの首にすらりとしたアリシアの腕が掛けられた。
耳元に囁き込まれる声。先ほどまでの初々しさを孕んだ声とは違う。
ねっとりと、見えない茨でがんじがらめにするような声色。
ふう、とその吐息がウィンドの耳をくすぐり、ぎり、とウィンドが歯を食い縛る。
「貴方を留めているもの全てを、取り払ってあげる。貴方の欲しいものは、一体なあに？貴方の求めるものは、一体なあに？貴方の求めるもの、欲するもの、全てを与えてあげましょう」
まるで子供をあやすような言葉。ウィンドがはっとする。
甘ったるい声でオブラートをしているが微かに感じるそれ。これは言霊だ。呪で精神を侵そうとしているのだ。
「ふざ、けるなっ」
「あら？ふざけてなんかいないわ。でも、ふふ。・・・その様子では気付いているようね。でも無駄。今の貴方に耳を塞ぐ事は出来ない。私の声は貴方の精神を侵し、脳を犯し、全てを・・・・・・奪う」
ツィ、と細い指先がウィンドの喉に触れた。
「陛下。自分に素直におなりなさい」
「・・・・・・うぐ・・・・・・っ、お、俺は・・・・・・・・っ！」
欲しい。
欲しいもの。
皇位？違う。俺は、俺は・・・・・・っ！！
やめろ、触れるな。俺の心を、暴かないでくれ・・・・・・・・っ！！！

「そう・・・良い子ね、ウィンド」
荒く息を吐き出したウィンドの唇にアリシアが自らの果実のような赤い唇を重ね合わせた。

「皇妃さま、大変です！！宮内に空間転移の陣がっ！！」
血を吐くような兵の叫びに皇間に居た全員の表情が凍て付いた。
「空間転移、ですって？」
「陣を通り次々と兵が皇宮へ入り込んでいます。あの紋はロストレヴェスです！！」
そんな、とエルリス皇妃が呟き。零がその横顔を見遣った。大臣に至っては顔を青ざめて身を震えさせている。
「ありえん！遠距離転移等不可能のはずだっ！！」
「・・・・・・落ち着きなさい大臣。方法はどうあれロストレヴェスが侵攻して来たのは事実。・・・・・・町人の避難を急がせて！」
「はっ！！」
兵が駆け足で皇間を後にし。それを眺めた後、零は落ち着きなさそうに皇妃と大臣を交互に見遣った。
「・・・・・・ウィンドを見付けてシヴェリ達が戻ったら・・・・・・レイ、貴方は彼等と共に国を脱しなさい」
エルリス皇妃の言葉に零が驚いた表情で顔を上げた。
「で、でも・・・・・・」
「皇家の血を絶やしてはなりません。皇家の血が絶えたその時こそ、イシュバートは死ぬのです」
「皇妃さま、は？」
動揺に震える零の言葉にエルリス皇妃が笑った。
「子等を護るのは親の務め、ですよ。レイ。貴方にもいつか、わかる日が来るわ」

ドンッ！！と皇間がまるで地震のように揺れ。体勢を崩したエルリス皇妃を零が支えた。
大臣がよろける形で床に手を突き、口を開き掛ける。次の瞬間飛んで来た火球が大臣を直撃し。
「がああああっ！！！！」
勢い良く燃え上がる大臣の姿に零は両眼を大きく見開き、エルリス皇妃を支えた手に力を込めた。
「きっ・・・・・・！！」
上がり掛けた悲鳴を押し留める。悲鳴を上げたり泣き叫ぶ事なら誰でも出来る。でも今はそんな事している場合じゃない。
皇妃さまはあたしが護る。シヴェリ達が戻るまで、あたしが護るんだ。
「レイ・・・・・・」
そんな零の様子にエルリス皇妃が眼を細め。
零は震える手で大臣が取り落としたまま転がっていた杖を拾い上げ。
噴煙の向こう側へ構えた。

「アリシア！！」
一方その頃・・・・・・夥しい数の兵の死体が折り重なった先。少し開けた通路でシヴェリとパールはアリシアを捕捉した。
コツ、と足を止めてアリシアが振り返る。
「これは・・・シヴェリ皇子とパール皇女」
にこやかに一礼をしたアリシアにシヴェリが剣を抜く。シヴェリの後ろからパールが口を開き。
「アリシア殿。ウィンドは、皇帝陛下は何処に」
「陛下？さあ・・・。あの方はあの方の思うままに動かれているで

しょう。私が知る由はありません。・・・違いますか？」
「とぼけるな！ロストレヴェスの兵を引き込んだのはお前の仕業だろう！アリシア・・・否、アリシアの名を語るロストレヴェスの犬め！！」
シヴェリの言葉にアリシアが眼を丸くし。それからくすくすと笑った。
「警備が甘いのよ、イシュバートの若皇子さま。・・・・・・まあそんな怒りなさらないで。今日でイシュバートは終わるのですから」
挑発的なアリシアの言葉にシヴェリが顔色を変え。剣を握り締めて走り出す。パールがはっとしてその後ろへと声を掛け。
「いけない、シヴェリ！！」
「！？」
突然真横の大柱が倒れて来て。パールがシヴェリの腕を掴んで引き戻す。
轟音が耳を劈き、２人が顔を歪めた。
「あはは。感情に流されれば早死にしますよ、皇子。ではご機嫌よう・・・」
気配が遠ざかる。
後を追おうとするシヴェリの身体をパールが留め。
「シヴェリ！！」
「待て！！！」
「深追いしてはダメっ！！辺りを良く見なさいっ！！」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
動くものは自分達のみ。あれほどたくさん居た兵達も皆倒れ伏せてぴくりとも動かない。
何処かで火事が起きているのか、何かが焦げる臭いと煙。そして血臭。
動きを止めたシヴェリにパールが表情を曇らせて。
「早く義母（かあ）さまのところへ戻りましょう。今は脱出の事だけを考えて」

「・・・・・・っ、ウィンドは・・・・・・・」
「生きる事だけを考えて。シヴェリ、お願い・・・・・・・っ」
身を震わせているパールに気付き、シヴェリは唇を噛み締めた。
父を失い、母を失い。パールにとってウィンドは血を通わせた最後の身内でもある。
大事な弟。案じていないはずがない。
それでも、今ウィンドを探しに行けば・・・・・・自分達の生命すら危ういのだ。
パールはそれを知っていた。義母(ははは)を、義弟(おとうと)を、零を、そしてまだ生き残っているだろう僅かな仲間達を、救う為に。
彼女は選んだのだ。
「・・・・・・お願い・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・。わかった。ウィンドももしかしたら皇間に向かっているかも知れない」
その言葉はパールに言うというより、自らに言い聞かせる言葉でもあった。

16話　落日

零は思考が回らなかった。これは一体、どういう事なのだろうか。
片手に炎を宿らせながら皇間に現れたのはロストレヴェスの兵ではない。
自分もエルリス皇妃も良く知っている人物であり、シヴェリとパールが今探し回っている者、その者だ。
「陛下・・・？」
どうしてウィンドが大臣を焼き殺したのか。
エルリス皇妃も状況を飲み込めていないようで無言で零を引き寄せる。
「陛下、今・・・。ど、どうしてこんな・・・」
「どうした？レイ。何をそんなに怯えているんだ。・・・ああ、義母上(はうえ)もご一緒でしたか」
カツン。
ウィンドが一歩此方へ近付いて来て。零は吐息を震わせた。
ウィンドが無事でわかって安堵すべきだというのに。どうしてこんなに胸がざわつくのだろう。
零の思いを感じたのかエルリス皇妃が半歩前へと踏み出し。その口を開いた。
「止まりなさい、ウィンド」
「・・・おや、義母上。そんな怖い顔をしなくても。もし俺が止まらないと言ったら・・・どうなさるおつもりで？」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「へ、陛下？何を、何を言ってるんです？・・・この惨状を見て・・・何とも思わないんですか！？」
思わず零が声を荒げ。ウィンドが肩を竦めた。
「ああ、これか？・・・・・・・・・どうでもいいだろう、これくらい。口うるさい姉上も邪魔なシヴェリも一度に潰せる、良い花火

だろう？」
零は耳を疑った。
今何て・・・。
「元々皇家のしがらみにうんざりしていたんだ。義母上、あんたもだ。母上と同じ顔をして・・・その顔見る度にむかついてたんだよ」
シャリ、とウィンドが剣を抜き。エルリス皇妃が眼を細めた。
その間に零が割って入る。
「何を言っているんですか、陛下！！皇妃さまに何を・・・！！」
「そこを退け、レイ。心配するな、お前までは殺しはしないさ。お前にはまだやって貰う仕事があるからな」
「レイ・・・後ろへ下がりなさい。ウィンドは私の生命が欲しいのですから」
「でも、皇妃さま・・・っ」
下がりなさい。再度そう言われ。嫌、と零は首を振った。キッとウィンドを睨み付けて。
「陛下、一体どういう事ですかっ！？」
「どういう、って？・・・・・・そうだな、こうしないとわからないか」
剣を立て、ウィンドは短い句を唱え始めた。ゴウ、と空気が震え、風が巻き上がる。零の小柄な身体はあっという間に風に浚われ、そのまま少し離れた壁に叩き付けられた。
「きゃ、あうっ！！」
息が詰まり、零は前のめりになった。胸を押さえるまま顔を上げればそこには信じられない光景が広がっており。
ウィンドの剣がエルリス皇妃の身体を貫いていた。
皇妃を抱き抱えるような形でウィンドがにい、と笑う。
「お、皇、皇妃さまあっ！！」
弾けるように零は走り出し、ウィンドの傍へ向かう。突き刺さった箇所を見せ付けるようにウィンドが身体を動かし。
「これでわかっただろ？俺は冗談を言ってるわけじゃない。・・・・

・・イシュバートは今宵消える。間も無く業火が全てを舐め尽すだろう」
「あ、ああ・・・・・・」
震える零の眼の前でずるりとエルリス皇妃の身体が崩れ落ち、どしゃ、と濡れた音が床へと染みた。
「・・・・・・ロ、ロストレヴェスに手を貸したの？陛下・・・どうして、どうして・・・・・・っ！貴方の国なのよ、貴方の護るべきものなのに、何故・・・・・・っ！！」
どんっ、と零の拳がウィンドの胸を叩く。それをウィンドは冷ややかに見下ろしていた。
「護るべきもの、か。・・・・・・俺の護るべきものはただ１つだけだな」
「！？」
ぐいっと身体を抱き寄せられ、零は眼を瞠った。
「お前は俺と来るんだ、レイ」
「い、嫌！離して、離して、この・・・けだものっ！！」
「・・・・・・シヴェリには渡さない。お前は俺の妻となるんだ」
「ウィンドさま」
掛けられた声に零が涙目を上げる。そこにはイシュバート兵ではなく、ロストレヴェス兵等の姿が有り。呼び掛けにウィンドが片手を上げた。
「今行く。・・・・・・イシュバート兵は皆殺しにしろ。町人は女は奴隷として捕らえ、男は殺せ。子供は赤ん坊だけ確保すれば良い」
「お願い、もうやめて、お願い・・・っ！！」
これは本当にあのウィンドなのか。零はウィンドに掴まれたまま必死に訴えていた。
ちらりとウィンドが零を見下ろし。その手を額に押し当てる。
「あっ・・・・・・」
「眠れ」
短い言葉には言霊が込められており。零は大きく眼を見開いた後に

かくん、とその意識を手放した。
それを見詰めたままウィンドが眼を細める。
「アリスは何処に居る」
「確認しておりませんが、北の丘で待ち合わせると伝言をいただいております」
「・・・・・・わかった。アリスと合流する、ついて来い」
零を抱き抱えたままウィンドが歩き出し、その後ろを数人のロストレヴェス兵がついて行く。
皇間に静寂が訪れる。
ただ、エルリス皇妃の遺体だけを残して・・・・・・・・・・・・・・・。

「・・・・・・母上・・・・・・・」
シヴェリとパールが皇間に戻って来た時。そこにはもう誰も居なかった。
消し炭のような形で倒れている大臣と、胸から夥しい出血を残し絶命しているエルリス皇妃の姿を見付け、シヴェリが呆然とした声を上げた。
ふらついた身体をパールが支え、辺りを見回す。
零の姿が無い。死体も、ない。
「シヴェリ・・・・・・」
「レイ、レイは・・・・・・・？」
無言のままパールが首を横へ振り。滲む涙を手の甲で拭った。
「シヴェリ、外はもうロストレヴェス兵でいっぱいだわ。・・・・・・今は自分の事だけを考えて・・・・・・」
「母上もウィンドもレイも失い、それでも生きろと言うのか！！」
血を吐くような声で叫んだシヴェリの頬をパールの手が張り。はっ

とした表情でシヴェリがパールを見遣った。
「ウィンドの消息が知れぬ以上、私達がイシュバート最後の血となります。それを絶やしてはならないのです。わかりますね？シヴェリ」
「義姉上（あねうえ）・・・・・・・」

「シヴェリ皇子、パール皇女！！」
血まみれのモーラが皇間へ現れ、声を掛けて来る。
「モーラ！・・・・・・・生き残りは！？」
「私を含め兵、侍女十数人です。・・・・・・・早く、此方へ！地下水路から郊外へ脱出します！」
「・・・・・・・・・・・・・」
「シヴェリ」
パールに促され、シヴェリは小さく頷いた。
「さあ、お急ぎ下さい。もう宮の外は火の海です！」
「・・・・・・・。わかった。・・・・・・モーラ、脱出前に私と義姉上ほどの背格好の死体を2つ用意してくれ。・・・義姉上、皇族の証はお持ちですね」
自分達の死体偽装を行うと言えばパールはほっとした表情を浮かべ。皇家の紋の付いた首飾りをそっと外した。
「・・・・・・これで終わりには、させません」
「ええ。・・・・・・いつの日か、必ず・・・・・・我等の下にイシュバートの名を取り戻す。それまでの・・・・・・」

どうか、レイ。
それまで・・・・・・生きていてくれ。

燃え盛る炎を見詰めたままシヴェリは眼を細めた。

17話　籠の鳥

あれから半年。

イシュバートを滅ぼしたロストレヴェスはその後も近隣の小国を飲み込み拡大をし続けていた。

ロストレヴェスの皇である皇帝ジオムントはこの世界・・・アーシアスの皇、とも呼ばれ。全ての国がその傘下に収まるのは時間の問題と言われていた。

「アリスさまも恐ろしい事をなさる。まさかイシュバート皇帝の精神を支配し手駒に変えてしまうとはな。確かに当時の新皇帝だったウィンドは相当の魔法使いとこのロストレヴェス内でも噂はされていたが・・・。引き込むにはあまりにリスクが大き過ぎるだろうに」

「リスクは大きいが同時に成功した際の見返りも大きい。何でも、アリスさまは直々に単独でイシュバートへ乗り込まれたとか」

「はは・・・。行動派のアリスさまらしい事だ。確かにイシュバート陥落にはアリスさまが一番の功績を挙げたからな・・・・・・」

皇宮の廊下を魔術師等が談笑しつつ歩き去っていく。束ねた書類を手にその脇を鳶色の髪と眼を持つ1人の少年が歩いていた。

長い廊下を渡り、一室の前で足を止め、ノックを1つする。此処は皇帝側近である魔術兵団、その指導者であるアリス・マグ・アークストーンの居室である。

「アークストーンさま、リヴです」

「ああ。お入りなさい、鍵は開いているわ」

内側から声が聞こえ。少年リヴは扉を開けてなかへと入った。「失礼します」という小さな声が薄暗い部屋のなかに響く。

ぱたんと扉が閉まるのと部屋の奥からアリシア・・・否、アリスが姿を現すのとほぼ同時であり。

リヴの姿にアリスが眼を細めた。
「どうもありがとう、リヴ。その書類は机の上に置いて」
「はい、アークストーンさま」
かさ、と書類が机の上に置かれる。それからちょっと躊躇うような表情を浮かべた後、リヴがアリスを見上げ。
「陛下からご伝言を預かっております。午前の公開謁見の後に私室へ来るように、と」
「あら・・・・・。陛下もお盛んな事」
空の薬瓶を整理しつつ呟いたアリスの言葉にリヴが驚いた表情を浮かべ。そして頬を染めた。そんなリヴの様子にくすりと笑い。
「冗談よ。陛下だって真っ昼間にそんな理由で呼び出したりはしないわ。・・・・・大方セイルーン侵攻に関してのものか・・・・・あの娘に関してのものでしょうね」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
リヴが何か言いたげにアリスを見遣るがそのまま机から身体を離し。ぺこりと頭を下げた。そのまま部屋を出て行く。
1人、部屋に残ったアリスは天窓から空を見上げた。
私兵に「変えた」ウィンドが連れ帰った娘。
ウィンドの言葉より、娘が異世界から迷い込んだ者とわかった。
この世界に存在しつつ、この世界に本来は無かった存在。
皇帝ジオムントは零に興味を抱き、ウィンドにそれを差し出すよう命じたのだ。
しかしウィンドはそれを拒んだ。一時は反逆罪だ、死罪だ、と騒然したものだが・・・。
「あの娘はどうでもいいけれど。折角手に入れた優秀な人材を簡単に殺すとかやめて欲しいわ」
わざわざ回り道をしてトロストの使者を殺してまでイシュバート皇帝に近付いたあの苦労を思えばアリスは小さく溜息を零した。
ウィンドへ対する処罰はアリスの仲介により免れたのだ。
アリスは魔術兵団の頂点に立つ者。皇帝の傍に有り、皇帝を護る者、

そして同時に。・・・・・・皇帝が最も愛している側室でもあった。
皇妃は形だけの存在。アリスは実質的なロストレヴェスのＮｏ．２
であった。

零は片手を細い鎖で寝台の縁に繋がれたまま、寝台の上に横たわっていた。
着衣等、此処数ヶ月まともに身に付けていない。
イシュバートが終わったあの日、零はウィンドの腕に抱かれる形でロストレヴェス入りをした。
眼を覚ました時には既にこの部屋へ閉じ込められていたのだ。
零はウィンドを責めた。叩いた。暴れた。だがウィンドは顔色１つ変えずに零を見下ろし。残酷にもその身体を蹂躙したのだ。

（お前は今日から俺の妻だ。俺以外の男を見る事は赦さない）

冷ややかに宣告された言葉。そして幽閉生活が始まった。
ウィンドはどうやらロストレヴェスの上位の役職に収まっているらしく昼間はほとんど部屋に戻って来る事は無い。

・・・・・本当にロストレヴェスの人間になってしまったんだ。
彼の心が縛られている事を知らない零は、どうしてウィンドが心変わりをしたのかわからなかった。
このままずっと、此処で暮らすのだろうか。
イシュバートは滅んだ、と聞かされた。
シヴェリ皇子とパール皇女は一体どうなったのか。マリエ達は。・・

・・・・宮の皆も・・・・本当に死んでしまったのか。
「もう、嫌だよ・・・・・・」
枕に顔を埋めたまま零は１人涙を流した。
奇しくもこの日は４月１５日。この日零は人知れず１７歳の誕生日を迎えていた。

「・・・・・・ウィンド、皇帝陛下よりの勅命です。セイルーンへ向かい国を落として来なさい。猶予は１ヶ月・・・・・・貴方なら出来るわね」
アリスの話をじっと聞いていたウィンドが椅子に座ったまま足を組んだ。
「手駒は」
「現地に既に３０００。貴方には追加で１０００を与えるわ」
「そんなに要らん。５００で構わない。・・・・・捕獲する必要は無いんだな？」
ウィンドの確認にアリスが頷いた。にい、とウィンドの口角が釣り上がり。
「ならば半月で事足りる」
「ただし、レイは置いていくようにと陛下は仰っているわ」
ウィンドの両眼が見開かれ。殺気を帯びた表情でアリスを見詰める。予想範囲内の反応にアリスが溜息を零し。
「勘違いしないで。あの娘は貴方のもののままで構わない、というのは陛下との約束でしょう。ただ異世界の娘として調べたい事があるだけ。あの部屋からは絶対に連れ出しはしないわ」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「ウィンド？」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
押し黙ってしまったウィンドにアリスが近付き。そっとそのこめか

みに手を添えた。間近からその若草色の眼を覗き込み。
「言う事を聞きなさい、ウィンド。駄々っ子じゃないのだから」
呪を乗せた声でそう念を押した。瞬間、びくりと少しだけウィンドの身体が揺らぎ。そして頷きを見せ。
「・・・2週間だ。2週間で終わらせる」
吐き出すようにそう言えば荒々しく立ち上がり、そのまま部屋を出ていった。
「連れ出しはしないわ。あの色惚けジジイが手を出さないとは約束出来ないけれどね」
扉の向こうへ消えたウィンドにそうアリスは苦笑いを浮かべながら小さく呟いた。

18話　脱走

セイルーンを落とす為に少し国を離れる。
無情なウィンドの言葉に零はその両眼を見開いた。
「ウィンド、貴方・・・・・・」
「すぐに戻る。それまで良い子で待っていろ。・・・・・・良いな？レイ」
「ウィンド！」
シャラ、と細い鎖を引っ張りながら零が身体を起こし。シーツを手繰り寄せてそれで身体を隠した。
「セイルーンを、滅ぼすの？イシュバートと同じように、その国も・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・」
此方を見ようとしないウィンドに苛立ちを募らせた零がぐいっと腕を引っ張った。驚いた様子でウィンドが零を見下ろす。
「止めて、行かないで。そんな恐ろしい事、もうしないで」
「離せ」
どんっと強く突き飛ばされ、レイは寝台にうつ伏せに倒れ込んだ。
「・・・・・・お前は何も考えなくて良い。ただ俺の言う事だけを聞いていろ」
「ウィ・・・・・・」
「意見する事は赦さん。わかったな、レイ」
ぴしゃりと強い口調で言い。ウィンドは部屋を後にしていった。
1人きりになった後、零は溜息を零し。そして籠のなかに入れたままの自分の衣を手繰り寄せた。片手が戒められたままで着辛いが、何とか着衣を身に纏い。
「・・・・・・馬鹿ウィンド・・・・・・」
セイルーンがどんな国かはわからない。だがイシュバートが滅んだ

あの日の事を思い返せばぞくりと身を震わせて。
止めたい。だけど、自分に何が出来る？この部屋から出る事すらままならないというのに。
万が一出られたとて・・・・・此処半年は閉じ込められたままだ。足腰も弱っていて満足に走る事も叶わないだろう。
一体、どうすれば。
室内を見回しても当然ながら刃物等置いてはいない。
鎖は細いといえど金属だ。女の腕力で引き千切れるほどやわではない。
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
ふと、机の上にウィンドの仕事道具が置いてあるのが見え。零がそれをじっと見詰めた。
いつもは片付けてあるが、今回出征の話が急きょ上がったからか、それは出しっ放しのまま置かれており・・・。
あるのは、羽根ペン、羊皮紙。そして・・・文鎮のような細長い石だ。
はっとして零は立ち上がり鎖が届く限り机に近付いていった。
「・・・・・・っ、んっ・・・・・・」
一生懸命手を伸ばす。その先にあるのは文鎮だ。
「んっ、んっ・・・・・・・うーっ・・・・・・・！！」
かり、と指先に無機質な感触が引っ掛かった。爪の先に文鎮を引っ掛ける形でころりと手元に引き寄せる事に成功する。
ノックの音が聞こえ。零は文鎮を両手に抱えたまま慌てて寝台の上へと戻った。

「失礼致します」
入って来たのは侍女だ。淡々とした様子で室内へ入って来れば机の方へと向かい。ウィンドに頼まれたのだろう、仕事道具を回収して袋に詰め始める。
「・・・・・・レイさま」

声を掛けられぎくりと零が侍女の方を見た。無意識に文鎮を枕の下へと隠し。
「な、何」
「お昼も残されましたが、夜は少し軽めのものを用意致します。きちんと残さずお食べ下さいね」
「・・・・・・。わかったわ・・・・・・」
侍女はさっさと袋の中身を纏めて部屋を出て行った。かちり、という小さな金属音は恐らく施錠だろう。再び1人きりになり、零の緊張が抜ける。
そっと枕の下から文鎮を取り出せば、ずっしりと重たいそれを握り締めて鎖の上に叩き付けた。
がちん！
辺りを見回し、耳を澄ませて。部屋の外に変化が無いのを確認した後に再び文鎮を振り下ろす。
がちん！
地味な作業だったが、零は休む事無く何度も何度も鎖に文鎮を叩き続けた。何度も何度も、何度も・・・・・・。

「・・・・・・ウィンドが発ったか」
遠ざかる馬車群を塔の窓から見下ろす形でロストレヴェスの皇帝であるその男は呟いた。ジオムント・ギル・ロストレヴェス。御歳64歳。白髪とほりの深い顔は老いを隠し切れないがその群青色の眼は獣のように鋭さを湛えていた。
傍に控えていたアリスが腕を組んだまま苦笑を浮かべる。
「説得に苦労はしましたが。まあ、あれの力量は本物ですわ。難航していたセイルーン攻略もこれで終わらせる事が出来るでしょう」
「うむ。・・・・・・アリスよ。レイの部屋へ案内せい」
「あら、早速ですの？」

「イシュバートの美姫と謳われた娘だからな。・・・・・・まあ、それだけはないが。確認したい事もある」
ジオムントの言葉にアリスが片眉を上げ。
「・・・・・・わかりましたわ。では此方へ」
アリスが歩き出し、ジオムントもそれに続いた。
塔の階段を降り掛け、一度だけジオムントが足を止めて窓の方を再度見る。
青空に夕焼けが入り混じり、空が鮮やかな紫色に染まっていた。それはまるで何かの予兆にも思え。ジオムントは眼を細めた。

「大変です、アリスさま、大変でございますっ」
血相を変えた侍女が走って来るのが廊下の向こう側に見え。先を歩いていたアリスはその足を止めた。駆けて来る侍女に眼を細め。
「落ち着きなさい。陛下の御前よ」
「はっ、あっ、し、失礼致しました」
恭しく頭を垂れる侍女にアリスの後ろでジオムントが首を振った。
「構わん。それよりも何をそんなに慌てておる」
「は・・・、その。・・・・・・レイさまが」
「・・・・・・あの娘がどうかしたの？」
また何か無駄な抵抗をしたのだろうか、とアリスは首を傾げた。此処に来て以来、食べ物を拒否したり部屋を荒らしたり、色々な事を仕出かしてくれたからだ。
だが侍女はオロオロした様子で「いえ」と言い。
「部屋にいらっしゃらないのです。・・・配膳の侍女が1人、部屋のなかで倒れていました。花瓶をぶつけられたのか・・・辺りは水浸しで。どうやって鎖を外したかはわからないのですが、鍵を奪って部屋を出たみたいなんです」
「何だと！？」
ジオムントが大声を出し。びくりと侍女が身を竦めた。アリスが腕を組み、重たい息を吐き出す。

「予想外に行動が早かったわね。それで？・・・出入り口は封鎖したの？」
「は、はい、すぐに」
「で、あるならまだ宮内に居るはずだけど。・・・まだ利用価値がある娘よ。早く探し出しなさい」
ぺこりと侍女が頭を下げ。足早に廊下を駆けて行く。ちらりとアリスはジオムントを見上げた。
「・・・・・とりあえずは。仕方ありませんわね」
「馬鹿な娘だ。何処にも逃げ場等あるまいに」
抗えば抗うだけ自分を苦しめる事になる。
そうジオムントは肉食獣のような笑みを浮かべ、嘲笑(わら)った。

19話　外の世界へ

「はあ、はあ、はあ・・・・・・っ」
零は居た。ただし宮の「内」ではない。宮の「外側」だ。
ゆうに3～4階程度の高さだろうか、外壁にしがみつく形で零は息を整えていた。
・・・・・運動神経が良いわけではない。筋の力だってかなり衰えている。それでも出入り口が封鎖されてしまっている以上選択肢はそう多くなかった。
何としてでもロストレヴェスを出るんだ。
今のイシュバートがどうなっているかはわからない。でも、そこに行ければきっと何かわかる。
誰か生存者がいるかも知れないじゃないか。
「う、く・・・・・・」
がり、と壁をひっかく指先に痛みを感じ。零は表情を歪めた。
落ちたら絶対死ぬ。
ぎり、と歯を食い縛り。零は涙目を歪めた。こんなところでは死ねない。帰るんだ、イシュバートの地へ。
「ん、んっ・・・・・・。えい、えい・・・・・・っ」
僅かな出っ張りに手を伸ばす。あそこを掴んで、移動をして。そこから・・・・・・。
不意の強風が身体を揺さぶり、零は大きく眼を見開いた。装飾の僅かな凹凸に引っ掛けていた足が滑り落ちる。
しまった、と思う間も無い。悲鳴を上げる事無く、零の身体は落ちていった。
叩き付けられて、潰れたトマトのようになる。
そう覚悟した零だったが、感じた衝撃はもっとソフトなものだった。
バフンッ！！

皇宮に荷入りをしていた大馬車の幌の上に落ちたのだ。
分厚い獣の皮が幾重にも張られた幌はまるでトランポリンのような弾力を生み、零の身体は息が詰まる思いをしたとはいえ奇跡的に無傷だった。
「はあ、はあ・・・・・・」
それまで停まっていた馬車が仕事を終えたのかゴトゴトと動き出し。
零は幌にしがみついたまま長い息を吐き出した。一先ずは重ね合わせるように張られている幌の継ぎ目に身を隠すように忍ばせ。
馬車の主は気付いていない。宮の警備兵達も気付いていないようだ。
このまま国境までやり過ごせたら、そっと馬車を降りよう。・・・・・・零は此処数ヶ月の緊張の糸がふっつりと切れるように脱力し、そのまま両眼を伏せた。

・・・・・・零は夢を見た。
燃え盛る炎のなかに消えていく後ろ姿。
お父さん、お母さん。エルリス皇妃、パール皇女。そして・・・・・・シヴェリ皇子。
行かないで。
夢のなかで零は手を伸ばした。伸ばした指先に触れるものは何も無く。零は無我夢中で炎のなかへと駆け出し。
行かないで、あたしを1人にしないで。
どうか連れて行って・・・・・・っ！！
「・・・・・・かないで・・・・・・・」
ゴトゴト揺れる馬車はまるで揺りかごのように。零は幌の隙間でそ

っと、涙を零した。

「娘はまだ見付からないのか。捜索隊は一体何をしておる」
やや苛立った様子でジオムントが言い。侍女が怯えた表情で頷いた。
「は、はい。尖塔の屋根の上から水路のなかまで調べたのですが・・・・・」
「・・・・・・。アリスよ、魔法で行方を追えぬのか？」
傍で黙っていたアリスがジオムントの言葉に静かに首を横へ振った。
「陛下。魔法はそこまで万能ではありませんわ」
「うむむ・・・・・・」
「・・・・・・まあ、考えていても仕方ありませんわ。このまま宮内の捜索は続けて。それと・・・念の為城下町の方も、ね。誰かが手引きをして連れ出した可能性も視野に入れなさい」
異界の娘。矢張り留めておく事は一筋縄ではいかなかったか。
アリスは人知れず深く溜息を零した。

その後、アリスの指揮で零の捜索は続けられたが国内で彼女の姿を捉える事は出来なかった。
ウィンドは2週間でセイルーンを滅ぼすと宣言していたが、それも結局長引き。3週間後に帰国。国そのものは滅亡したが一部の皇族には逃げられてしまう、という失態だった。
零が消えた事にウィンドは怒りを露わにしたものの、前者の失態がある以上強くも出れず。ウィンドは再びセイルーンの地へと発った。
逃げたセイルーン皇族を捕らえ根絶やしにする為に。

２０話　皇帝

「・・・・・・1年です。貴方はそれを長く感じますか？それとも短く感じますか・・・・・・？」
寝台に横たわったまま、そう「彼女」は微笑んだ。枕元に椅子を置きじっと聞き入る彼に彼女は続ける。
「機は熟しました。・・・・・・今こそイシュバートの名を取り戻すのです。シヴェリ・・・貴方の名の下に於いて・・・・・・」
「・・・・・・義姉上」
パールが少し苦しげに息を吐き出し。シヴェリがそれを気遣うようにそっと濡れ布で汗を拭って遣った。
「ごめんね、シヴェリ。貴方ばかりに苦労を・・・・・・」
「義姉上は何も心配なさらずご養生下さい。此処ならロストレヴェスの眼が届く事もありません故」

イシュバートが戦火に消えたあの日、シヴェリとパール、そして一部の臣下達は遠いリュート国まで逃げ延びていた。
リュート国はシヴェリとパールの母親であるエルリス、アルテナ皇妃等の故郷であり。イシュバートが落とされた事を知ったリュート国のロマ皇は快く彼等を匿ってくれた。
この1年、己を鍛え、そして仲間を集めた。小国であるリュートの戦力にも全く追い付かないほどのものだったが、それでも貴重な対抗戦力だった。
元皇宮警備近衛隊長であるモーラと皇宮警備近衛隊員であるサーシエスを双部隊長とし、それぞれ１００ずつの兵を抱える。
衛生兵は侍女達だ。侍女長マリエを筆頭にルト、ラシェ、医療魔術師数人を含む非戦闘員等が約３０人。
シヴェリに与えられたカードはこれで全てだった。

「シヴェリ。今をもって貴方に１４代目イシュバート皇帝の名を与えます。どうかイシュバートを・・・・・・。・・・・・・ごほっ、ごほっ・・・」
パールが咳き込めば隣室で待機していたサーシェスが入って来て。
「失礼します」とシヴェリとの間に割って入る形で薬湯をパールへ渡した。それをシヴェリが眼を細めて見遣り。
「・・・・・・サーシェス。私は矢張りお前にはリュートに残って貰いたい」
「・・・・・・・・・・・・」
「義姉上を独り残していくのは・・・」
呼吸を整えたパールがシヴェリの言葉に「いいえ」と遮る形で首を振り。
「私は大丈夫です。・・・伯父皇もいらっしゃるし心配は要りませんよ、シヴェリ」
パールがサーシェスに対して、サーシェスがパールに対して、それぞれが秘めた想いを抱えている事はシヴェリも知っていた。
愛するものを、いざという時、手の届かない所で失ってしまう苦しみを。シヴェリは良くわかっていた。
だから、サーシェスにもパールの警護として残っていて貰いたかったのだ。
「・・・皇子、いえ、陛下。どうかこの地を離れ貴方の力になる事をお赦し下さい。リュートの後ろ盾があるとしても総戦力はまだまだロストレヴェスには追い付かない。戦いが激化するとわかっていながら貴方の傍を離れるわけにはいきません。それでも置いていくというのなら、私はこの場で騎士勲章を叩き割ります」
どんな状況下にあっても変わらない、真っ直ぐで何処か冷ややかさを帯びたサーシェスの黄土色の眼に、シヴェリは溜息を零した。
「・・・・・・すまなかった、サーシェス。どうか私の力になってくれ」
その言葉にサーシェスがにっこりと笑った。

「パール皇女。必ずや陛下をお守りし、ロストレヴェスを打ち破って参ります。イシュバート地方の白ホープの香りを嗅げば、皇女の病もすぐに治りましょう」
サーシェスの言葉にパールが苦笑を浮かべ。少しだけ頬を染めた。
「そうですね、楽しみにしています。・・・この国のホープは赤色をしているからどうも馴染めないの。たくさん摘んで、帰って来てね？」
大きくサーシェスが頷き。パールは安心したようにその両眼を伏せた。
シヴェリが立ち上がりサーシェスを促す。そして2人揃って部屋を出て行き。
そこで待っていたモーラが頭を下げた。
「皇子」
「モーラ隊長。シヴェリ皇子はパール皇女より皇帝の名を与えられました」
サーシェスの言葉に、む、とモーラが唸るような息を漏らし。「おめでとうございます、陛下」と改めて頭を下げた。
「ありがとう、モーラ。だが私の皇帝の位は仮初のものでしかない。真に国を取り戻したその時こそ、私はイシュバートの１４代目皇帝になれるのだから。それより、モーラ。何か伝えたい事があって待っていたのではないのか？」
シヴェリが柔らかくそう言い。モーラが下げていた頭を上げた。
「はい。実は気になる話を聞きまして。・・・・・・ロストレヴェス兵が黒髪の娘を探していた、と」
シヴェリの表情がかたまり。サーシェスもまた顔色を変える。
黒という色はそれほど珍しい色ではない。だがそれでも2人は瞬時に「彼女」を連想した。「まさか」という呟きがサーシェスの唇から零れ。モーラが頷いてみせる。
「・・・・・・可能性がある、という話です。もし探しているのであればその娘はロストレヴェスから離れているという事」

「どの辺りだ」
「は、それが・・・・・・」
「どの辺りの情報だっ！」
モーラに掴み掛かりそうな勢いのシヴェリをサーシェスが留め。
「落ち着いて下さい、陛下っ！！」
「・・・・・・場所は特定出来ておりません。ロストレヴェス近郊を中心に辺境であるこのリュートの近くまで、相手方も手探りな状況が見て取れます」
シヴェリが如何に零を溺愛していたのかわかっている2人にはシヴェリを咎める事も出来ず。モーラもただ静かな声でそう告げ。
がんっ！とシヴェリが壁を叩いた。

生きている。
レイが生きている。

何も知らないこの世界でこの1年どれだけ辛く寂しい思いをしていたのだろう。それを考えるだけでシヴェリは胸の内が熱くなった。

「・・・・・・陛下、今は予定通りセイルーンへ向かいましょう」
「・・・・・・ああ、わかっている」
宥めるサーシェスにシヴェリは苦笑いを浮かべた。
近日ロストレヴェスに落とされたというセイルーン。そこもまたイシュバートと同じように皇族等は脱出出来た「らしい」。
彼女等を助け、彼女等の助力を得よう、そうシヴェリは考えていたのだ。

「セイルーンへ」
その言葉にサーシェスとモーラが大きく頷いた。

２１話　幸告げ鳥

「母さま、母さま・・・・・・」
泣きじゃくる少年少女の声。薄暗い森のなか、その女性は樹に凭れ込む形で動かなかった。
そうしていてどれくらい経っているのか彼女からは異臭・・・否、腐臭がしていた。
背を大きく斬られた形で彼女は既に事切れていた。「えっえっえ」と泣き続ける６歳くらいの薄桃色の巻き毛の少女を促し、１０歳くらいの赤毛の少年が立ち上がる。どちらの瞳も鮮やかな紫色。これは、セイルーン皇家の色でもあった。
「リーゼ、立って。さあ・・・早くしないと追手が・・・・・・」
「やだ、やだあ、母さま、母さまあ。・・・・・・ふぐっ」
少年が少女の口を片手で塞ぎながらそっと抱き上げて。よろよろと歩き出した。
気持ちがわからないわけじゃない。それでも。このまま此処に居れば追手がやって来る。自分達兄妹を殺す為に。

（僕等はセイルーン最後の血なんだ。ましてリーゼロッテは女皇の器・・・・・・。僕が、僕が妹を護らなきゃ。母さまの代わりに）

「兄さまっ！！」
腕のなかでリーゼが叫び。少年ははっとした。漆黒の暗闇から沸いて出たように、すぐ後ろにロストレヴェスの追手が迫りつつあった。

・・・・・・幸告(さち)げ鳥が空を舞う。青と暁の空を舞う。
白々翼をはためかせ。願いし夢に舞い降りる。
与える夢の代償は。悲しみ暮れた涙の雫。
さあ笑え。さあ謳え。約束の地で。
さあ踊れ。さあ謳え。幸告げ鳥は神の鳥。

「・・・・・・綺麗な歌ですね」
ゴトゴトと荷馬車が走る。幌のなか、荷に凭れ込む形で座っていた零は年配の御者の歌に眼を細めた。
幸。幸せ。それを告げる鳥。何ともロマンティックな歌だろう、と。
「はは。これは故イシュバートに伝わっていた歌だよ。人々が苦境に立ち絶望したその時に幸告げ鳥は神の地へ舞い降りる。イシュバートはその地なのだと。・・・・・・そういう歌さ」
「・・・・・・・・・・・・」
歌は歌でしかない。
イシュバートは滅ぼされた。神の眼はイシュバートに向かなかった。
御者の口から零れた溜息に、零もまた小さく溜息を零した。
「あんたも、イシュバートに親類が居たのかい。こんな時期にあの地へ向かいたがるのはそんな連中ばかりだ」
今も遺骸が多く取り残された地。神の地は、呪われた地となった。
「配置されたロストレヴェスの兵もごろつきのような連中ばかりと聞くし。・・・・・・やっぱりやめておいた方が良いんじゃないのかい？」
「お気遣い感謝します。・・・・・・だけど・・・・・・。あの戦火のなかではぐれてしまった大事な人が居たから・・・・・・どうしても彼を探したいんです」
「ふむ・・・・・・。そうだ、近隣に小さいけれどそれなりに栄えている町があるよ。そこで降ろしてあげるから、一先ずは情報を集めてみてはどうだい？女1人であの地へ足を運ぶのは・・・どう考えても危険過ぎる。運ぶわしとしても寝覚めが悪いからの」

御者の言葉に零は眼を細め。小さく頷いた。
「ありがとうございます。・・・・・・本当にすみません。大したお礼も出来ないのに・・・・・・」
「はは、なあに。かわいいお嬢さんの頼みだからな。そうさな、それじゃ肩でも揉んで貰えんか？」
かかか、と笑った御者に零は苦笑し、そっと後ろに回るとその肩を揉み始めた。
「気持ち良い？」
「ああ、ああ。ありがとうよ、お嬢さん。死んだ孫娘が還って来たようだよ」
イシュバートに送って貰う時に聞いた。彼もまた娘夫婦と孫娘をイシュバートの戦火で失ってしまった事を。
ウィンドの事を思い出せばその胸がちくりと痛み。
零は彼の肩を揉みながらそっとその両眼を伏せた。

馬車はゆっくりと荒野を進み、やがて道中の緑も多くなって来た。
そろそろイシュバート領だと思えば零の表情にも緊張が走り。
「・・・・・・ん、あれは・・・・・・」
町の入り口に大きな軍事用馬車が数台停まっているのが見え。御者が声を上げた。零も前方を見遣りそれに気付けば表情を一変させ。
さっと荷台の奥へと隠れる。
「・・・・・・・・・・・・？」
零の様子に御者が首を傾げ。そうこうしている内に馬車にロストレヴェスの紋を付けた兵士が近付いて来た。
「停まれ」
「へえ。これはこれはお疲れさまです。・・・何かあったんですかい？」
「人を探している。黒い髪に象牙の肌をした娘だ」
「はあ・・・。町中ならともかく、荒野を歩く女子は流石におらんですなあ」

御者は考え込む素振りを見せた。事情はわからないが零がロストレヴェスのお尋ね者だという事を瞬時に悟り。
「まあ、確かにそうだな。お前は何処から来て何処へ行く」
「へえ。ロストレヴェスからの塩漬け野菜を届けるところです。その後はセトの方へ」
「セト・・・、セイルーン地方か。あっちの方はまだ戦火が消えていない。気を付けて進む事だ」
へい、と御者が頭を下げた。「隊長、荷を改めますか？」そんな声が聞こえ、零が荷の影で身をかたくし。御者もまた僅かに眉を寄せる。
しかし。
「いや、いい。塩漬け野菜は臭いからな。触りたくない」
兵隊長の言葉に零はほっと息を吐き出した。
ゴトリ、と馬車が再び動き出し。
「・・・・・・どうするね、お嬢さん」
こんなところで検問を張られていれば身動きが取れないだろう、と前を向いたまま御者が呟き。
「わしはお前さんが何者かは聞かん。戦火にはぐれた人を探したい気持ちもわからないではないが・・・」
「・・・・・・荷を降ろす時に、あたしも降ります」
「お嬢さん？」
「大丈夫です。それにあたしと一緒に居る事がばれたら・・・貴方も危険ですから」
卸し先の建物の裏に馬車を停め。御者が零を見遣った。にこりと零が微笑んで。
「本当に・・・色々ありがとうございました」
「達者でな。道中、幸告げ鳥の加護があらん事を」
こく、と零が頷き。馬車を降りれば御者の手をぎゅっと握り締めた。灰のローブを目深にかぶり、足早にその場を走り去る。その小さな背を見送りながら御者が眼を細め。そのまま藍色の空を見上げた。

22話　セイルーンの皇女

少女の名はリーゼロッテと言った。
セイルーンが落ちたあの日、セイルーン女皇であるパミトラと兄皇子であるメイヴェス、それと数人の供と共に逃げ出した。
道中でパミトラ女皇と供等が殺され、幼い兄妹等にもまた追手が迫りつつあった。
か細い救いの声を聞いたのは、蒼い風。
メイヴェス皇子が斬り倒され、その刃がリーゼロッテに迫ったその瞬間。彼女を救ったのは偶然周囲を見回りに出ていたサーシェスだった。
（これは・・・・・・）
血の海に沈む兄に泣き縋るリーゼロッテにサーシェスは声を失った。
急ぎ止血を、と試みるが幼い身体に残る生命の流れはあまりに短く。
（兄さま、兄さまあ）
（・・・・・・騎士の方・・・・・・お願いです、リーゼを・・・・・・妹を・・・安全なところ、へ・・・・・・）
そう言い残しメイヴェスは息を引き取った。
騒ぎを聞き付けて集まって来たシヴェリや仲間達にサーシェスが顔を上げ。
（・・・・・・リーゼ・・・。もしやパミトラ女皇のご息女であるリーゼロッテ皇女、か？）
そうシヴェリが呟いた。と、あればこの少年はリーゼロッテ皇女の兄であるメイヴェス皇子の可能性が高い。
（・・・・・・・・・・・・リーゼロッテ。私達と一緒に行こう。此処に居れば君も奴等に殺される）
（・・・・・・ひっく、・・・ひぐ・・・。兄さまのとこに居る。もう何処にも行きたくないよぅ・・・・・・っ）
（陛下。巡回の兵に気付かれます。女皇と皇子のご遺体をそのまま

にしておくのは酷ですが、今はご離脱を・・・・・・）
モーラの言葉にシヴェリが頷き。そっとリーゼロッテに片手を翳した。ぐすぐすと泣いていたリーゼロッテが急に静かになり、体勢を崩してシヴェリの腕のなかへと倒れ込む。
眠りの魔法を使ったのはその場に居た誰もがわかった事だった。

そして、現在に至る。
「・・・・・・ねえ陛下。陛下は結婚しないの？」
セイルーン近郊の地図を見ていたシヴェリはリーゼロッテの言葉に飲んでいた茶を噴出し掛けた。

リーゼロッテは目覚めた後、もう母や兄の死に泣く事は無かった。幼くとも皇族。現状を見据え、シヴェリ達と共に行動する事を決めたようだ。
だが子供は所詮子供。軍事情勢がわかるわけでもない。
シヴェリを兄のように、そして父のように、慕い、まるで雛の刷り込みのように付いて歩く様は一行のなかでも笑みを誘う光景であった。

「結婚か。・・・・・・そうだな、リーゼロッテは結婚したい相手は居るのかい？」
「質問してるのはあたしだもん。ねー、陛下。結婚したい人いないならあたしなったげてもいいよぅ？」
リーゼロッテの言葉にシヴェリがごほごほと咳き込み。近くに居たラシェがぶっと吹き出した。じろりとシヴェリが彼女を見れば「何も聞いてませーん」というように視線を外し。
それからじっと見上げて来るリーゼロッテの柔らかい桃色の髪にそっと触れた。

「・・・・・・・・・・・・・・・。したい人なら、居るよ」
「えーっ、誰、誰？ラシェ？マリエ？それともルト？」
「はは。この陣営のなかにはいないよ。遠い、遠い、この世界の何処かに居る。・・・イシュバートが滅んだあの日はぐれてしまった彼女を、早く見付けてやりたい」
「・・・・・・・・・・・・・・・ふうん」
ちょっと残念そうに。またちょっと興味深そうにリーゼロッテは唸り。それから頬を少し膨らませた。
そんなリーゼロッテの表情にシヴェリは苦情を浮かべ。わしわしと髪を撫でてやった。

「陛下！」
パミトラ女皇とメイヴェス皇子の埋葬をしていたサーシェスが泥だらけの格好のままテントに飛び込んで来て。
シヴェリがその慌てように眉を寄せる。
「何かあったのか、サーシェス」
「は・・・・・・。セトの町に買い出しに向かわせた部下から・・・・・・」
告げられた情報にシヴェリは眼を瞠り。その膝に肘を突いていたリーゼロッテが首を傾げた。

たまたまセトに野菜を降ろしていた老商人がその部下の知人だった為に色々話を聞いたのだ。
ロストレヴェスの方はこうだった、イシュバートの方はこんな状態だった。
そしてイシュバートの方でも件の黒髪の娘の噂が流れていたのかその部下が尋ねたところ、彼は言葉を濁し。
その様子のおかしさから更に追求したところ、何と娘を馬車に乗せたという。
イシュバート近隣の小さな町で降ろしたが、そこもロストレヴェス

兵が多数常駐しており、彼は今も大層心配しているそうだ。

「レイがイシュバートへ？」

「・・・どうなさいますか、陛下」

「・・・・・・・・・・・・」

難しい表情をしたシヴェリにサーシェスが眼を細めた。

パミトラ女皇と皇子を仕留めた際、何者かが割って入り皇女を何処かへ連れ去った事は既にロストレヴェス兵の間にも広まっており、その警備と捜索は強まっている。

今大移動をすれば襲撃を食らう恐れは充分にある。

考え込んでしまったシヴェリの前でサーシェスが息を吐き出し。

「単独でなら、さほどのリスクは無いでしょう」

「・・・・・・サーシェス？」

「私がレイさまをお迎えに行って来ます。隊はモーラ隊長が居るのでさほどの支障は無いと思います」

本来なら自身で向かいたいだろう事はサーシェスにも良くわかっていた。

だが将が早々に陣を離れるわけにもいかない。

だから、自分が立った。

サーシェスの思いがわかったのか、少しの間の後シヴェリが眼を伏せて。

「・・・・・・わかった。お前にレイの事は任せる」

「あたしも行くっ！！」

すかさずリーゼロッテが挙手するがシヴェリがそれをたしなめて。

「だめだ、リーゼロッテ。君はただでさえロストレヴェスに追われている身なんだよ。幾ら腕利きとはいえサーシェス1人に2人を護らせるのは酷だ」

「・・・・・・うー」

くす、とサーシェスが笑い。リーゼロッテの前で膝を突いた。

「すぐ帰って来ますから、陛下と一緒にお待ちになっていて下さい」

「・・・・・・わかったよぅ」
いってらっしゃい、とリーゼロッテがサーシェスの頬に口付けし。
サーシェスが眼を丸くした。それを見、シヴェリがくつくつと笑い。
「もてもてだな？サーシェス副隊長殿」
「陛下っ！」
その日、夕暮れを迎える前にサーシェスは馬を駆り陣営を離れた。
足の速い馬を使うとはいえイシュバートへは数日掛かる。どうかそれまで零が無事で在るように。
そう祈りながら、サーシェスは強く手綱を握り締めた。

23話　蜘蛛の糸

シヴェリ皇子、シヴェリ皇子。
一体何処に居るの？見張りの兵達は、ウィンドは、皇子が死んだと言っていた。
でもあたしは・・・信じないっ。そんなの、信じないっ・・・！！
絶対生きている。あたしが生きているんだもの。皇子だって、きっと・・・・・。

ロストレヴェス兵が徘徊している町中で零は動けずに居た。
1人で何とかなる自信があったわけではないけれど、こうするしか自分には出来なかった。
あの優しい老御者を巻き込むわけにもいかなかったから。
「此処からが・・・大変だよね。前哨戦は終わり・・・此処からが、本番・・・・・・」
夜闇に紛れてイシュバートへ向かう。だが暗闇に身を預けたとてリスクが高い行動には違いない。もしロストレヴェス兵に捕まったら・・・。
今度ロストレヴェスに連れ戻されたら、脱走出来る機会はきっと無いに等しい。
おまけにウィンドが鬼のような表情で待っている事だろう。
入り込んだ民家の庭先。大瓶が並んだ倉庫の片隅にひっそり隠れた形で膝を抱えた形で零は項垂れた。
「・・・そんなところで何をしているんですの」
聞こえた声にぎくりと零が顔を上げる。
夕暮れの逆光で相手の顔は良く見えないが、兵・・・ではない。寧ろ男性ですらない。女性だ。

「あ・・・」
とっさに返事が出来ずにかたまっていれば、返ってきたのは小さな溜息であり。
「・・・・・・・・・・貴方は何処に居ても・・・騒ぎを起こすのね」
「その、声・・・」
まさか、と零は薄暗い倉庫のなかで立ち上がった。両眼に涙を浮かべ、彼女へと駆け寄り。
「エリザベートさま！！」
生きてた。生きていてくれた。
良かった、と泣き崩れる零にエリザベートは調子を崩したように眉を下げた。
「顔をお上げになって、レイ姫。私はあの惨事の前に国を離れておりましたから。難は逃れたんですの」
「そう、だったんですか。・・・良かった、本当・・・。誰も生きていないと思った、から・・・」
まさか「貴方の所為で国を離れる羽目になった」とは言えず。エリザベートは唇に微かに力を込め。それから小さく首を横へ振った。
「・・・まさか死んだと思っていた貴方とこんなところで再会するなんて思ってもいませんでした。もしや他の方々も？・・・シヴェリ皇子もこの町に・・・？」
そういえばエリザベートはシヴェリの事を想っていたのだった。イシュバートが陥落した今、相当に案じているに違いない。そう気付いた零は苦しげにその両眼を伏せた。
「・・・・・・・・・他の方々は、わかりません。あたしは・・・ロストレヴェスから、ずっと1人で・・・・・・やっと此処まで逃げて来て・・・。・・・・・・・・・イシュバートに行けば何か手掛かりがあるかと思ったんですけど・・・。兵が多くて動きが取れなくて」
零の言葉にそれまで微かな期待を込めていた眼差しが一気に再び光を失い。エリザベートは心が冷えていくのを感じていた。「そう・・・

・」と零れた声も何処か震え気味で。
「此処まで辿り着くのに相当苦労なさったみたいですけれど、でもきっとイシュバートへ向かったところで何も得られはしないと思いますわよ。・・・私がこの町で暮らし、今もなお誰1人生存者の行方を知らない、それが全てを物語っておりますわ」
「・・・・・・・・・ですよね」
完全に手詰まりだ。此処まで、此処まで帰って来たのに。滲んだ涙を拭う零の横姿を眺めながらエリザベートは微かに眼を細めた。
「・・・でも、レイ姫が生き残って下さって本当に良かったですわ。幸いにもこの倉庫は我が家のものです。ロストレヴェス兵が此処に来る事はまずありませんし・・・・・・。今後どうなさるか決まるまで、好きなだけ居れば良いでしょう」
「・・・・・・あ。あ、ありがとうございます・・・」
深々と零が頭を下げ。ふる、とエリザベートが首を振った。
「気になさらないで。・・・後で食事と毛布を運ばせます。寛げる場所ではないけれど、ゆっくりお休みなさいませ」

倉庫を離れ、屋敷へ続く扉の所で様子を伺っていた侍女のところへエリザベートは向かった。
ひそ、と侍女の耳元に顔を寄せて。
「駐在所へお伝えなさい。イシュバートの生き残りらしい娘が入り込んでいると」
「・・・・・・姫さま・・・・・・。本当に宜しいので？」
おず、と口を開いた侍女にエリザベートが眉を寄せた。
「口答えすると？」
「あ、いえ・・・・・・。ではすぐに・・・・・・」
エリザベートの威圧感に圧される形で侍女が屋敷のなかへ戻ろうとし。それをエリザベートが片手で留めた。
「ああ、後。薬入りの食事を用意するのも忘れずに。引き渡す前に逃げられたら意味が無いわ。準備は念入りに、ね？」

零が生かされようが殺されようが、どうでも良い。
ロストレヴェスに連行されればもう2度とイシュバートの地を踏む事も無いだろう。
悲しむが良い。苦しむが良い。
こんな形で・・・・・・復讐が出来るなんて。
そういえばいつの日か、彼女がロストレヴェスに行ってしまえば良い、そう考えた事をエリザベートは思い出した。
「・・・・・全てを失った後、こんな形で叶うなんてね」
もう此処にはシヴェリ皇子もいない。
誰も彼女を守りはしない。
今度こそ・・・・・・。
閉ざされた倉庫を見遣り。エリザベートは自嘲気味に微笑んだ。

２４話　エリザベート

あたたかいパンとスープを貰ってすぐ零は毛布に身を預けて横になった。

・・・・・・これからどうしよう。

何処に行けば手掛かりが掴めるの？あの人の行方が知れるの？

ロストレヴェス？・・・嫌だ、あの場へは近付きたくない。ウィンドの顔も・・・もう見たくない。

ぎゅっと毛布の端を握り締めて零はかたく眼を瞑った。

気が高ぶっているのかなかなか寝付けない。少しでも睡眠を摂らないと。そう考えていればざり、と玉砂利を踏み締める音が倉庫の外で聞こえ。零は眼を見開いた。

「・・・・・・このなかですわ」

「うむ。その話からすると件の娘の可能性が高いな。良く知らせてくれた、女」

「いえ・・・・・・。早く、早く連れて行って下さいな。食事に薬を仕込ませましたから・・・抵抗は無いと思います」

何。

何の話？

エリザベートと男の人の声。・・・・・・ただの男の人じゃない。

ロストレヴェス兵！？

エリザベートが通報したのか。青ざめながら零は倉庫のなかで立ち上がった。

食事を薬を入れた、と言っていたが・・・別に何でも無い。通達が不十分だったのか、それとも。だがそれ以前にエリザベートは最初から自分を匿うつもりは無かったのか。

ショックで微かに身を震わせたまま、それでも零は倉庫の入り口の

すぐ横まで移動をした。

ゴ・・・、と倉庫の扉が動き。月明かりが倉庫内部を照らす。

居ない。

そう2人が知覚した瞬間。零は兵の頭に毛布をぶつけ、怯んだ隙に倉庫から飛び出した。

「！？・・・・・・そこかっ！！」

「薬が効いていない・・・・・・！？」

戸惑った声を上げたエリザベートを零は横目で見遣り。そして眉を顰めた。

糾弾する余裕は無い。零はそのまま塀の僅かな継ぎ目に潜り込み、屋敷の外へと逃げ出した。

「追え！逃がすな！！」

暗闇に怒声が響き。零は必死に夜の町を駆け抜けた。数人の兵から伝令が回ったのだろう。あっという間に追手は１０人近くになり。零は出来るだけ狭い路地を潜り抜け、必死に町の外への出口を探していた。

「はあ、はあ、はあ・・・・・・」

あれからどれだけの時間が経ったのか、どれだけ走ったのかはもうわからない。全身が心臓になってしまったかのように脈打つのを感じながら、零はよろよろと暗闇の路地を彷徨い歩いていた。

やがて視界が開かれ。月明かりにぼんやりと大広場が浮かび上がる。昼間ならきっと大勢の町人が集い楽しげに過ごすのだろうその場所もこんな深夜半には誰も居るはずもなく。零はその先の石橋の方へ

と向かった。
石橋から見下ろした先にあるのは闇を飲み込んだように大きく深い河。ごく、と息を飲んでいれば後ろから声が掛かり。
「・・・・・・そこにいましたの」
見ればエリザベートの姿があった。ロストレヴェス兵の姿は・・・無い。
「・・・・・・。エリザベートさま・・・・・・」
「何故？という顔をしてますわね、レイ姫。・・・本当におめでたい子。私が貴方を匿うなんて事、ありえないでしょう？」
「どう、して？」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
腕を組んだままエリザベートが眼を細め。
「無条件にシヴェリ皇子の寵愛を一身に受ける貴方を苦しめたかった。滅茶苦茶にしたかった。・・・・・・イシュバートでは失敗したけれど、此処なら、誰も貴方を助けはしない。ごろつきに身体を暴かせるのも悪くは無いけれど、敵国で永遠に望まぬ監禁生活を送らせるのも・・・悪くは無いでしょう？」
くすりと笑ったエリザベートに零は全身に水を浴びせ掛けられたようなショックを覚え、呆然とした。
忘れもしない、あの陵辱未遂事件。あれも・・・エリザベートの？
「・・・・・・そんな、そんなの・・・・・・」
「だけどレイ姫。折角だから機会を与えてあげましょうか」
すい、と指先が石橋の方へと向き。零ははっとして後方を振り返った。
「まだロストレヴェス兵は貴方が此処に居る事を知らない。・・・選択なさい、レイ姫。ロストレヴェスへ連行されて薄汚い連中の慰め者となるか、それとも・・・そこから飛び降りて自害するか。貴方が自分で、選びなさい」
「・・・・・・っ！！」
エリザベートは笑っていたが、その眼は笑っていなかった。

彼女は本気だ。
そう思うだけで零は息が詰まるのを感じ。
「い、嫌。どっちも嫌ですっ」
「・・・・・・ならば此処で私を殺して町を出る？」
すい、とエリザベートが自分の胸に手を当てて見せ。零が両眼を見開く。
「それも嫌っ。・・・・・・エリザベートさま、あたしはシヴェリ皇子が生きていると信じてます。・・・死んでなんかいない。あたしは、皇子に再会するまでロストレヴェスに戻るわけにもいかないし、死ぬわけにもいかないんです。それに・・・・・・」
こく、と息を飲み込んだ後、零が涙目を歪める。
「皇子はきっと、貴方が生きている事を知って喜んでくれるはず。・・・・・・エリザベートさま。貴方のお怒りはご尤もとは思います。だけど貴方はこの町に居ちゃいけない。・・・・・・・　一緒に行きませんか？一緒に・・・皇子を探しましょう」
「！？な。・・・・・・何を・・・・・・」
「・・・・・・ずっとシヴェリ皇子を想っていたエリザベートさまの気持ち、わからなくもないです。あたしも逆の立場だったら、きっと。・・・・・・だけどこんな、こんなのは・・・絶対間違ってるっ。こんなの、誰も幸せになれないっ。それはエリザベートさま、貴方もです」
真剣な眼差しで訴えて来る零にエリザベートは怯んだ。
これは命乞いなんかじゃない。この娘は、本当に・・・・・・。
「・・・・・・・・・・・・」
「エリザベートさま・・・・・・」

「・・・・・・こっちから声が聞こえるぞ！！」
暗がりのなかから大勢の兵の足音が近付いて来るのが聞こえ。怒声

に似た声が闇を切り裂いた。
瞬間、２人の表情が強張り。
「・・・・・・っ！！」
「エリザベートさま、早く・・・・・・・っ」
今エリザベートを置いて逃げ出せば逃げ切れる可能性は僅かでもあった。だが零はエリザベートに未だ訴え。きゅ、と唇を噛み締めた後、エリザベートが強気に零の方を見返した。
「・・・・・・冗談じゃありませんわ。誰が貴方となんか一緒に」
「エリ・・・・・・・」
「これ以上私の心を惑わせないで」
どんっと強く胸を押され、零は眼を歪めた。そのままエリザベートを見上げ。エリザベートは苦笑を浮かべたまま自身を見下ろしていた。
「・・・・・・・・・・・・・・。早くお行きなさい」
「・・・・・・・・っ」
「早く！！」
鋭い声に零はびくりと身を震わせて。伸ばし掛けた手をぎゅっと握り締めた。唇を噛み締め、そのまま息を飲み。
「必ず・・・必ず！皇子と一緒に迎えに来ますから、どうかそれまで・・・」
タッと零が走り出し。エリザベートがそれを見送った。程なくバタバタと足音が近付いて来て、エリザベートは兵達の方へと向き直った。
「お前はあの家の。娘を見付けたのか？」
「・・・・・・いいえ」
静かに首を横へ振るエリザベートに兵達が顔を見合わせ。別の場所を探しに行こうと移動を始める。・・・・・・と、その内の１人が「おい」と裏門近くの道を走っている小さな影に気付き。エリザベートが僅かに双眼を見開いた。
「あれは。・・・・・・女！娘を逃したのか！！」

怒声がエリザベートに集まり。薄くエリザベートが笑みを浮かべた。
「我が名はエリザベート・ラエル・アリエスダヌス。アリエスダヌスの血に連なるイシュバートの剣の一振りでございます」
「！！」
イシュバートの生き残り。しかもアリエスダヌスは皇家側近の宮警備近衛隊長の姓ではないか。
殺せ。いや、生かして捕らえろ。複数の声が上がるなか、エリザベートは片手をふわりと上げ。
「さて、貴方がたに出来るかしら？」
わっ！と一斉に襲って来た兵にエリザベートは護身用の短剣を引き抜き。

本当に馬鹿な娘。
見付けられるものなら見付け出せば良い。
その細い腕で、細い足で、必死にもがいて、足掻いて。真実を見付けると良い。
私は一緒に行けない。
私にはその資格は無い。
貴方と一緒に行く事も。・・・・・・皇子を愛する事も。もう何も、赦されない。

・・・・・・もし皇子の事が無かったら。私は貴方と・・・友達になれたのかしら。
ねえ、レイ姫。

25話　糸の端

町を出てからずっと歩き通しで足が痛い。喉もからからで、空っぽの胃の奥がズンと重い。
荒れた砂地を零はふらふらと歩いていた。
エリザベートはどうなったのか。姫は賢い方だからきっと上手く言い逃れたと信じたい。
今は自分の事だけを考えよう。

・・・・・・遠くで馬の走る音が聞こえ、零は顔を上げる。
追手？ダメだ・・・もう逃げ切れない。ふらついた足が砂利に取られ、零はその場に膝を突いた。
馬が近くで止まり、誰かが駆けて来る。
折角エリザベートが逃がしてくれたというのに、此処までなのか。
零は無念さを噛み締めながらその両眼を閉じた。

・・・・・・さま・・・・・・・。

遠くで声が聞こえる。
岩場に倒れ込む身体を誰かの腕が支え。口に何か押し当てられた。
ぬるい水が唇を濡らし、喉を落ちていく。

「レイさま！」
さっきまで不鮮明だった声は今度はちゃんと零の耳に届いた。薄く眼を開けばそこに映ったのは・・・空の青に似た青色の髪。そして心配げに見下ろしている黄土色の眼であり。
「レイさま、確りして下さい。さあ、ちゃんと飲んで・・・・・・っ」
「・・・・・・・・・・・・・。・・・・・・・・サーシェ・・・・・・・

けほっけほっ・・・・・・」
「・・・・・・落ち着いて、深く息を吸って・・・・・・。さあ、もう一口お飲み下さい」
サーシェスがもう一度零の口元に革水筒を寄せ。零はそれをごくごくと飲んだ。その様子にサーシェスがほっと息を吐き出し。
「良かった・・・・・・本当に間に合って良かった。レイさま・・・・・・」
「サーシェス、さん？・・・・・・本当にサーシェスさん、なんですか・・・・・・？」
もしかしたら此処はあの世で。自分はついに行き倒れて死んでしまったのではないかとも思ったが。掠れ気味の声で零が尋ねればサーシェスはほこりまみれではあるものの変わらぬ小奇麗な顔でにこりと微笑んだ。
「はい、サーシェスでございます。・・・・・・っと」
ぎゅっとしがみ付かれ。サーシェスは両眼を見開いた。微かな嗚咽を零しながら泣き出した少女の小さな背をぽんぽんと軽く叩き、その眼を閉じた。
1年。その間、どれだけ心細い思いをしたのだろう。知った顔も誰もいない世界のなかで、独りきりで。
「大丈夫ですよ、大丈夫。・・・頑張りましたね、レイさま・・・・・・」
「ひっく、ひっく。・・・・・・い、生きてて・・・良かった。生きてて・・・・・・」
「さ、レイさま。涙を拭いて。・・・・・・もう一踏ん張り、もう少しだけ・・・もう少しだけ、頑張りましょう」
そっと抱き上げられ、馬の上へと上げられる。すぐ後ろにサーシェスも乗り。日除けの意味も込めて厚手のローブに包まれた。
「何処に・・・・・・？」
「セイルーンですよ。此処から2～3日、もう少し走らないとなりません」

走り出した馬上で零がサーシェスを見詰め。その視線に頷いた。
「・・・・・・陛下も貴方さまの到着を首を長くしてお待ちになっております」
「陛下・・・・・・」
「シヴェリさまです。あの方はパール皇女の名の下、１４代目皇帝の位を継承なさいました」
生きてる。

・・・・・・生きている。
皇子が、否、陛下が。・・・・・・あの人が、生きている。
馬上で再び泣き出した零にサーシェスは笑みを深めた。そして真顔に戻ると前方を見据え。
ようやく途切れた糸の端を掴む事が出来た。後はこの糸を結ぶだけ。
必ず、必ず、陛下の所へ連れて行く。もう二度と悲しい涙が流れないように。
そうサーシェスは手綱を握り締めたまま深く思っていた。

「イシュバートの近くの町・・・・・・だと？」
セイルーンで皇族捜索を行っていたウィンドの耳にその報が入ったのは騒動から半日ほど経ってからだった。
物理的移動をするのなら2～3日は掛かる道程。だが連絡だけなら話は別だ。鉱石を使った魔術通信で音だけはやり取りが出来るからだ。
現代でいうのなら「電話」のようなものだろう。ただしその通信網構築には細かい魔術構成式が必要なので使える国も限られている。

「・・・・・・レイ」
立ち上がるウィンドに兵が慌てて声を掛け。
「なりません、ウィンド隊長。アリスさまからはセイルーン皇族の根絶やしを命じられております故・・・っ」
「ならばお前達だけで事を為せば良かろう。レイが見付かったと聞いて放置しておけん」
「隊長！！」
制止の声を掛けた兵達を振り返る形でウィンドが不敵に微笑んだ。
「あれは俺の女だ。俺だけの女だ。・・・・・・誰の手にも渡さん。それがたとえ冥界の神であろうともな。邪魔をするならお前達とて斬り捨てる」
その言葉に兵達が半歩下がり。ふん、と鼻を鳴らしウィンドは軍馬の方へと近付いていった。
馬体にまたがりウィンドは走り出す。それを止める事も出来ず、兵達が見送り。

やがてぽつりと誰かが口にした。
「操心術の実験体とはいえ、最近ではアリスさまも持て余し気味という。矢張り人心を完全掌握するのは難しいものなのか」
「元よりウィンドは意思が強く気性の荒い男だった聞く。ましてアリスさまが操心術を施されたのはもう1年もの前の話だ。歪みや乱れが生じたところで誰も驚くまい」
「・・・・・・うっかり術の拘束が外れアリスさまの居ない所で正気付かれてもまずいからな。・・・・・・とりあえずは意見を仰ぐか」
兵達が頷き。そしてウィンドが去った方を眺めた。その空は青と紫が入り混じり、不可思議な色彩を作り上げていた・・・・・・。

26話　ふしぎなちから

ひどく胸騒ぎがする。
サーシェスが居るのに。後は馬の力を借りてシヴェリに会いに行くだけだというのに。
どうしてこんなに胸がどきどきするのだろう。

いつロストレヴェスの追手が迫って来るか知れず、2人は近隣の小村に立ち寄れなかった。
水も食糧もぎりぎりで、サーシェスに至っては往復分計3日、一睡もしていなかった。
それでも確りしているところは流石現役騎士と言えるのだろう。
「・・・・・・サーシェスさん・・・・・・」
小さな零の声に気付いたサーシェスが抱いている少女を見下ろし。
零はどう伝えていいものか迷った後、思うままに自分の今感じているものを伝えた。
追手に対する不安なのか、ともサーシェスは思ったが。同時に「この方は本来この世界に生まれるはずのない生命だった」とイレギュラー的なものも思い出し。
「・・・・・・そうですか」
「何か嫌な予感がして・・・・・・。気の所為なら良いんですが・・・・・・」
もう少しで見晴らしの良い平地へと出る。少し考えた後、サーシェスは馬の速度を落とし。方向を岩場の方へと向けた。そしてその物陰で馬を止める。
「・・・・・・・・・・・・・・サーシェスさん？」
「しっ」
確かに馬を止めるとわかる。風の流れが何処か・・・おかしい。・・・・・・何かが近付いて来る？

じっと息を殺していれば零の耳にもその違和が伝わって来た。砂塵に紛れるように聞こえて来るのは蹄の音だ。これは、馬だ。誰かが馬を駆っている。
大きな馬体が2人がいる窪地の近くを大きな音を立て走り抜けていき。零が思わず両眼を見開いた。サーシェスも「まさか」という言葉を飲み込み唇に力を込める。
乗っていたのは明らかにウィンドだった。
真っ直ぐに前を向き、何かを追い求めているような表情でたった今零達が来た方向へ向かって走っていった。

・・・・・町での騒動が知られたんだ。エリザベートさまは大丈夫だろうか。
ウィンドはエリザベートの顔を知っている。もし彼女がアリエスダヌスの家の者と知れたら・・・・・・。

零は背筋が冷えるのを感じ。無意識にぎゅっとローブを強く握り締めた。やがてかたまっていたサーシェスが思い出したかのように深く息を吐き出し。
「あれは」
「・・・・・・ウィンド、です」
「レイさま?」
呼び捨てで。しかも死んだはずの者の名を呼ぶ零にサーシェスが訝しげに視線を落とした。
「・・・・・・皇子、いえ・・・・・・。陛下の所に帰り着いたら。全部、全部お話します。あたしが今まで何処に居たのか。・・・・・・ウィンドの事も、全部・・・・・・」
何事か口を開き掛け。サーシェスはそのまま口を閉じた。少しの間の後吐き出された言葉は「わかりました」というものだけで。
零がそういうのなら、それ以上は何も聞かない。
聞きたい事は山ほどあった。レイが囚われていた先の事。死んだと

思われていたウィンドが生きていた事。
だが、何よりも。

・・・・・・何故、ウィンドさまの馬にロストレヴェスの紋が・・・・・・。

嫌な思いが胸を過ぎる。サーシェスはそれを払拭するように小さく首を横へと振り。零の身体を再び馬体へ押し上げた。
「・・・・・・まだ不安な気持ちはありますか？」
「え？・・・・・・う、ううん・・・。さっきほどじゃ」
尋ねられた質問にサーシェスが眼を細めた。
「レイさまにはもしかしたら、危険を感知する能力が芽生えつつあるのかも知れませんね」
まさか、と苦笑を浮かべ掛けた零ではあったが、思い当たるものは幾つかあった。
あの小さな町のなかでロストレヴェス兵から見付からず移動出来た事。
倉庫で休んだ時だって、寝入ってしまっていれば容易く捕らえられてしまっていただろう。
薬の件は・・・本当に入れ忘れだったのかも知れないし、零の特殊な体質的に効かなかっただけかも知れないが・・・。
そして今回の件である。
「・・・・・・だったら、良いですね。そしたらもうサーシェスさんや・・・陛下の手を煩わせる事も無くなりますもの」
魔法とは無縁の世界で生まれ育ったけれど。この世界に「生まれなおして」からそれに近いものに目覚めたのなら。
自衛は勿論の事、大切な人達を守ったり出来るかも知れない。
祈るように願うように零は眼を閉じ、仄かに笑みを浮かべた。
「さあ、セイルーンはもう眼と鼻の先です。飛ばしますよ、レイさま。確り掴まっていて下さい」

サーシェスが強く手綱を振るい。馬が勢い良く走り出した。

27話　望んだもの選んだもの

・・・・・・サーシェスがイシュバートへ発ってから今日で一週間になる。
ロストレヴェスの討伐隊にも何か動きがあったようで巡回の回数が激減した。その為にシヴェリ達は兵を派遣し、セイルーンの生存兵達を探し出す事が叶ったのだ。
その数は１００に満たないものであったが、それでもリーゼロッテ皇女が生きているのならば、と、再び立ち上がってくれた。
更にその兵達の情報からトロストの宮廷魔術師団も決起したという。アリシア師長が殺された事、そしてイシュバート、セイルーンが立て続けに落とされた事に、流石のトロスト皇も傍観を決め込んでいられなくなったというわけだ。中立を宣言しているからと火の粉が飛んで来ないと断言は出来ない。
「私がトロストへ参りましょう。陛下はサーシェスが戻り次第、一度リュートへお下がり下さい」
そう言ったのはモーラ。
「いよいよ正念場ですな、陛下。トロストの助力を得られれば全ての準備が整います。不可視結界に頼りこそこそとした生活はもう終わり・・・・・・イシュバートの名を立てロストレヴェスへ侵攻し、ジオムント皇の首を取るのです！」
「くれぐれも逸り過ぎて無理だけはするな。本来なら私が赴くべきではあるが・・・・・・」
シヴェリの言葉にモーラが首を横へ振り。
「それはリスクが高すぎます。臣下から不満が上がる事はあるかも知れませんが、それは私めで我慢して貰うしかありません。ちゃんと話せばわかって下さるでしょう。トロスト皇もそこまで愚かな方ではございませぬ」
「・・・・・・ああ」

巡回が緩んでいる今が好機。そしてモーラは単身馬を駆り、漆黒の森のなかへ消えていった。
それが今から数時間前の話だ。

「陛下、あまり離れると結界の外に出てしまいます」
「わかっている。境界は心得ているからそう心配するな」
兵にそう声を掛けつつ、シヴェリは漆黒の森をじっと見詰めていた。
予定としては昨日今日には戻って来れるはずだ。
何かあったのか？サーシェス・・・・・・。
「何か来るわ！」
それまで馬に餌を上げていたリーゼロッテが音に気付き顔を上げる。
シヴェリもまたその方を見。
夜闇を切るように飛び込んで来た馬にテントの外に居た面々からどよめきが上がり。
馬上のサーシェスが息も絶え絶えにシヴェリへと頭を下げた。
「ただいま、戻りました・・・・・・。陛下」
そしてそっとローブに包む形で大事に抱きかかえていたものを剥がし。眠る零の顔が見えればシヴェリが眼を見開きそれに駆け寄った。
「レ・・・」
「ご安心を、疲れ切って眠ってしまっているだけです。目立った外傷は見受けられませんでしたし、道中も水と食糧を口になさっておりました」
無言のままシヴェリが零を抱き締め。ふ、とサーシェスが笑った。
そのまま倒れそうになるのを兵が支える。
「サーシェス隊長っ！！」
「サーシェス、・・・・・本当に、本当によくやってくれた。誰か、サーシェスをテントのなかへ。ゆっくり休ませてやってくれ。馬にもたっぷりの飼い葉と水を」
そう指示した後、シヴェリは零を抱いたまま自分のテントへ戻って

いった。
そっと、未だローブに包まれたままの零を寝台へ下ろし、そしてその顔を見詰める。
生きていて良かった。無事でいてくれて良かった。
何度この手からすり抜け消えてしまう悪夢を見ただろうか。
不安に押し潰されそうになり、悲鳴を上げ掛けた事か。
「・・・・・・あたたかい」
そっと零の指先に触れつつ、ぽつりとシヴェリは呟いた。これは、生命が通っているあたたかさだ。
母を失くし、義兄を失くし、多くの民を失った。
だが一番大切なものを取り戻せた。
思えば、多くの消えていった生命達が・・・・・・・零を守ってくれていたのかも知れない。
感謝します。
「・・・・・・・・・・・・・・っ・・・・・・・・」
感謝します。
零の手を握る形でシヴェリは俯き、涙を零した。声を殺して泣いていれば、ぴく、とその指先が動き。
はっとしてシヴェリが零の顔を見遣る。
薄く眼を見開き、零がシヴェリを見詰めており。
「・・・・・・・陛下」
「レイ・・・・・・・・」
「・・・・・・・会いたかった、です」
「ああ・・・・・・・。私もだ。・・・・・・・お帰り、レイ」
「・・・・・・・・・・・・・・。ただいま」
そっと重ねられる唇に零は眼を閉じた。
此処まで本当に色んな事があった。
ひょんな事から異世界に飛んでしまった事。
自分が死んでしまったかも知れない事。
でももしかしたら元の世界に戻れるかも知れないという願い。

・・・・・・・吉岡先輩。お父さん、お母さん。

だけど。

・・・・・・あたしはもうこの人の傍を離れたくない。
陛下と同じものを見て、生きていきたい。
たとえそれが赦されない事であっても。誰かを傷付ける事になったとしても。

「もう離さない。何処にもやらない」
シヴェリの言葉に零もまた両眼に涙をいっぱい浮かべ。そのままポロポロと涙を零した。
「陛下・・・・・・・、あたし・・・・・・・あたし・・・・・・・っ」
「レイ・・・・・・・・・・・・」
あたしはもう迷わない。この世界で生きていく。
それがたとえ、世界の理に反した事であっても・・・・・・。

眼を閉じ掛け、零ははっとした表情でシヴェリを見上げた。
「陛下・・・・・・。エリザベートさまが・・・・・・。エリザベートさまを助けて・・・・・・」
「エリザベート？エリザベート・ラエル・アリエスダヌスの事か？」
「ウィンドが・・・・・・」
出された名にシヴェリの双眼が見開かれ。そのまま零の肩に手を掛ける。
「レイ、それは・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・お願い、早く・・・・・・助けてあげて」
再び力を失うように意識を落としてしまった零にシヴェリが息を飲み。諦めの息を吐き出す形でそっと彼女の身体を横たえた。
ウィンド？

何故今更その名が零の口から・・・・・・。
ぞくりと得体の知れない悪寒が駆け上がり。シヴェリは無意識に握り拳に力を込めた。

28話　葛藤

「幸告げ鳥が空を舞う。青と暁の空を舞う。白々翼をはためかせ。願いし夢に舞い降りる・・・・・・」
零とシヴェリが再会して間も無く、一行はリュートへ移動を開始した。
大きな荷馬車のなか、ぽつぽつと歌声を零した零に眼を閉じていたシヴェリが薄く眼を開き。
「その歌は」
開いた唇に零が視線を向けた。
「・・・・・・彷徨っていた時に馬車に乗せてくれたお爺さんがいて・・・教えてくださったんです。イシュバートの歌、なんでしょ？」
「ああ。古い歌だが・・・・・・懐かしいな。良く母上が聞かせてくれた」
シヴェリの表情も何処か元気が無く。零もまた表情を曇らせた。

目覚めた後、零はシヴェリとサーシェスだけに1つの事実を伝えた。ウィンドがイシュバートを裏切りロストレヴェスについた事。エルリス皇妃はウィンドの凶刃に掛かり殺され、自分は彼の手でロストレヴェスへ連れ去られ、幽閉生活を強いられていた事。セイルーンを滅ぼしたのは恐らくウィンドだろうという事・・・・・・。つまり今、この地に居るロストレヴェス兵等の隊長は・・・・・・。
（馬鹿な！！有り得ん！！）
シヴェリが怒声を上げ、その声に零が肩を竦ませた。そんなシヴェリをサーシェスが制し。

（落ち着いて下さい、陛下！・・・・・・我等がセイルーンへ向かう途中、イシュバート方面へ駆け去る馬上のウィンドさまの姿を目撃しています。・・・・・確りとロストレヴェスの紋・・・確認しております）
（・・・・・・・・・・・・・・・・・・・）
（信じたくない気持ちは理解ります。しかし・・・レイさまがそのような不必要な嘘を吐くとお思いですか？戯れに陛下を苦しめるような方だと）
シヴェリが零を見。零もまたおずおずとシヴェリを見上げた。
（くそっ・・・・・・）
（気になる話があります。ロストレヴェスの魔術兵団長は精神魔法の研究をしていたと）
サーシェスの言葉に2人がはっとして。しかし慌ててサーシェスが再び口を開いた。
（確かな情報ではありません。現時点ではまだ噂の域での話です。ただ・・・・・・）
（もしそれが本当であるなら・・・・・・）
震える声で零がシヴェリを見上げ。シヴェリが視線を落とした。
口には出せない。
確証のないまま口に出せば、感情がそれを何処までも押し出していってしまう。
だけど、3人には1つの希望があった。
もしも、もしもウィンドが操られているなら。その術を解けはしないのか。永遠というものはどんなものにも存在しない。どんな高位の魔法使いが唱えた魔法とて、いつか限りはある。綻びは出来るものなのだ。
だが・・・・・・。
国を滅ぼし、皇妃を殺し、多くの民を犠牲にし、零を苦しめたウィンドを万が一にでも救い出せたとて。・・・・・・自分は皇帝として、息子として、そして1人の男として、それを赦す事が出来るの

か。
シヴェリは何も言えず、ただ膝の上でかたく拳を握り締めていた。

そしてどうしても言えなかった事。
ウィンドが自分を閉じ込めた後、無理矢理に身体を奪った事。それはつまり、強姦だ。
シヴェリは何も聞かなかった。だが侵攻される前からもウィンドは自分に固執していた。
連れ去った後、その精神に欲望への抑制が失われたのなら。そのような事があってもおかしくはない。賢しいシヴェリなら察しただろう。
だけど何も聞かなかった。シヴェリは零を真綿で包むように優しく抱き締め、ただ再会を心から喜んでくれた。
そんな彼の優しさに、零は痛いほど心が苦しかった。
「与える夢の代償は。悲しみ暮れた涙の雫」
シヴェリの口から零れた続きの歌に零は眼を細めた。
幸告げ鳥は悲しみの涙を持っていってくれるのだろうか。そして未来という名の希望の夢を与えてくれるのだろうか。
もし居るのなら、どうか。どうか。
この優しい人の心の内に流れる涙を持ち去り、望むままの平穏を返してあげて欲しい。
「さあ笑え。さあ謳え。約束の地で」
零が続きを歌い。シヴェリの口元に微かな笑みが戻った。そして最後のワンフレーズをシヴェリが歌い。
「さあ踊れ。さあ謳え。幸告げ鳥は神の鳥」
くすり、と2人が笑いあう。だがふとシヴェリの眼が細められ。
「・・・・・・・レイ。エリザベート姫の事なのだが」
「・・・・・・・・・・・・・・」

「現状、今彼女の為に戦力を割く事は難しい。だが数日前にトロストへ発ったモーラ宛に今朝方姫の件を記した伝書精霊を飛ばした。騒動になっていなければそれで良し。なっていたとしても・・・モーラの剣の腕はイシュバートでも最強に近い。タイムロスは最低限に抑えられるだろう」
「陛下・・・・・・。ありがとうございます・・・・・・」
零の感謝の言葉にシヴェリが微笑んだ。
「助けるのは当然の話だ。それに・・・モーラにとっても大事な1人娘。誰よりも彼女の事を気に掛けていただろう」
そっとシヴェリの手が零の肩に伸び、そのまま零の身体を抱き寄せた。・・・・・・と、その時、幌内部で区切られているカーテンが開き。
リーゼロッテが2人の所に入って来た。慌てて零がシヴェリを押し返し。
「リ、リーゼロッテさま」
「あーあー、やらしーの、やらしーの」
にやにやと笑う少女の表情に零が顔を赤らめた。こほん、と咳払いをした後、シヴェリがリーゼロッテを見遣り。
「どうしたんだい？」
「サーシェスが、そろそろリュートの領内に入るから結界を解きます、だって」
「あ、ああ。そうか・・・・・・。レイ、リュートには義姉上が居る。ずっとお前の事を案じていたんだ」
「・・・・・・パールさまが？」
「リーゼロッテ、教えてくれてどうもありがとう」
シヴェリの感謝の言葉にリーゼロッテが照れるように頬を染めた。
「べ、別に。・・・・・・暇だったから・・・・・・」
もじもじとするリーゼロッテに零が微笑み。そっと片手を伸ばした。
「リーゼロッテさま、此方に。隙間風が冷えるでしょう？3人くっ付いていたら暖かいです」

その言葉にパッとリーゼロッテが笑い。零の腕のなかへと飛び込んだ。
失われた母性を零に求めていたのだろうか。そんなリーゼロッテの姿にシヴェリも眼を細め。そっと2人の身体を抱き込んでやった。

29話　戦いの予兆

「良く無事で・・・・・・。きっと生きていると信じていましたよ、レイ」
約1年ぶりに再会したパールは一回りほど小さくなった気がして。
零は伸ばされた細い指を確りを握り締めた。
「けほっ・・・・・。ごめんなさいね、こんな形で・・・・・」
「いえ、無理をなさらないで下さい」
道中シヴェリから聞いた。シヴェリと共に逃げ延びたパールは胸の病を患い、寝たきりを余儀なくされているのだと。
胸の病と聞いて零は表情を曇らせた。
肺か心臓か。現代なら病院に入院をして化学療法や手術や・・・色々出来るのだろうが、この世界での病とはどのような位置付けなのだろう。
心優しいシヴェリが大切な義姉をいつまでも病床で苦しませるはずもない。と、あれば魔法で病は治療出来ないという事だ。
（パールさまのご病気を・・・治す方法は無いんですか？）
そう馬車のなかで尋ねたが、シヴェリは表情を曇らせたまま言葉を探すように無言になっただけだった。
つまりは、そういう事だ。
「パールさま・・・・・・」
「シヴェリから話は聞きました」
枕に沈んだまま、それでも意思の強い眼差しに見詰められ、零は身をかたくした。
「何を・・・・・・」
「ウィンドの話です。・・・・・・ああ、そんな顔をしないで。あの子が私にその事を伝えるのはとても辛い事であったでしょう・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「レイ、どうか・・・どうか。シヴェリを支えてあげて下さい。あの子は本来皇帝になるべきものではなく第2皇子として政治から離れ心穏やかに生きるはずでした。あの子は賢い子ではありますが一国を背負うには心が優しすぎるのです。・・・ウィンドの事でも相当に心を痛めているはずでしょう・・・・・・」
「パールさま・・・・・・」
きゅっと強く指を握られ。零はパールを見下ろした。
あの頃と変わらない聡明な眼差しを少しだけ緩ませて、パールが微笑む。
「シヴェリを、宜しくお願いします・・・・・・。私はあの子を支えてあげられない。幼馴染とはいえサーシェスでもあの子の胸の内を埋めてあげる事は出来ない。それが出来るのは、レイ・・・。あの子が誰よりも何よりも愛した貴方だけなのですから。どうか、あの子を・・・・・・」
「パールさまっ」
ぎゅっと零は強く握り返し。少し強めの声でパールの名を呼んだ。
「どうか気弱にならないで下さい。あ、あたしの生まれた国では・・・病は気から、って言うくらいで・・・。強い気持ちで、そ、その、病なんてへっちゃらだーっ！って思っていれば・・・・きっと、きっと、病は治ります。だから・・・・・・」
こくっと息を飲んだ後、零は瞳を笑ませ。大きく頷いた。
「あたしに何が出来るかはわかりませんが、陛下の傍で力の限りあの方をお手伝いします。・・・・・・約束します」
少し驚いた表情を浮かべていたパールだったが、零が深く息を吐き出したタイミングでくすくすと笑い始め。指先で自身の眦の涙を拭った。
「そうね、病なんてへっちゃら、ね。・・・・・・本当に私・・・気弱になっていたのね。元気が病を跳ね飛ばす・・・病は気から。とても良い言葉だと思うわ。・・・・・・教えてくれてありがとう、レイ。本当に、ありがとう」

こんな綺麗なお皇女さまの口からへっちゃらなんて単語が出れば零はとても罪深い気持ちになり、あわあわと慌てた表情を浮かべ。
それでも先ほどより明らかに表情が明るくなったパールに良かった、と笑みを浮かべた。

一方その頃・・・シヴェリはリュートの皇であり伯父であるロマと話していた。
「そうか、いよいよ開戦か。・・・シヴェリよ、戦力的に劣る我等にとって長期戦は戦力差を広げるだけに過ぎん。勝利への道は如何に早く皇の首を取るかに掛かって来る」
「・・・・・・はい」
「ゼオムントは用心深い男だ。それに常に魔術兵団を手元に置いている」
「ロストレヴェスに忍ばせている兵に魔術封印の結界を展開させます。賭けではありますが・・・結界を展開する事が出来たなら魔術兵団を無力化させる事が叶うでしょう」
「勝敗の境はそこにあるか」
グラスのワインを飲み干し。ロマはシヴェリを見遣った。
「水面下では動き続けて来たが、表立っては最初であり最後である戦いだ。・・・シヴェリ、否、イシュバート皇帝よ。リュートは全ての兵をそなたへ預ける。必ずやゼオムントの首、取ってみせよ」
驚いた表情を浮かべたシヴェリの肩をバンバンと強くロマが叩き。そして何処か母の面影を持つ笑みを浮かべた。
「しくじるなよ、シヴェリ。男なら女の為に、死に物狂いであがいてみせろ」
「・・・・・・はっ！」
シヴェリが皇間から出れば廊下を歩いて来る零が見え。零もまたシ

ヴェリを見付ければ少し早足で近付いていった。
「陛下・・・・・・」
「義姉上はどうしていた？」
「・・・・・・お加減は良かったみたいですが・・・少し疲れたようで。大事を取ってお休みしていただきました。部屋を出る時にサーシェスさんがお薬を持って入られましたので・・・・・・」
零の頭をくしゃりとシヴェリが撫で。そのまま抱き寄せた。
「そうか。サーシェスがついていてくれているなら問題は無い」
「陛下の方は・・・・・・」
「・・・・・・伯父皇から予想外のプレゼントをいただいたよ」
「・・・・・・プレゼント・・・・・・？」
ゆっくり歩き出したシヴェリに続いて零も歩き出し。
「・・・・・・近い内にロストレヴェスとの全面対決となる。その為のプレゼントだ」
俯き加減に表情を曇らせた零を見下ろし。それからシヴェリは再び前を向いた。
「驚かないのだな」
「だってその為に、陛下は、サーシェスさんは、皆は・・・頑張って来たのでしょう？・・・・・・それがやっと実ったのですから・・・・・・」
「・・・・・・トロストからモーラが戻れば出陣だ。短期決戦を望むが・・・数ヶ月、或いは1年・・・・・・。リュートへは戻れないだろう」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
きゅっと袖を握られ、シヴェリは零を見下ろした。
「あたしは、置いてけぼり、でしょうか・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・義姉上の傍についていてくれ。それにウィンドがまたお前に危害を加えないとは言い切れん」
「・・・・・・あたしは」
「レイ」

「・・・・・・お願いです、連れて行って下さい。後方で構いません、包帯くらいなら巻けます」
真剣な零の表情にシヴェリが面食らい。だが眉を顰めて首を横へ振った。
「駄目だ。さっきも言っただろう。ウィンドがお前を諦めたと決まったわけじゃない」
「陛下！」
「駄目と言ったら駄目だ！」
鋭い声が廊下に響き渡り。びくりと零はその足を止めた。怒鳴ってしまった後悔を胸にシヴェリもまた足を止めて零から視線を外す。
「わかってくれ。もうお前を失いたくないんだ・・・・・・」
「・・・・・・それはあたしも同じです」
ぽたり、と零れた涙が長絨毯に染みを作り。シヴェリは零を見遣った。大粒の涙を零しながら、それでも零は真っ直ぐにシヴェリを見詰めていて。
「あたしも陛下を失いたくはありません。・・・・・・もう貴方の居ない所で涙を流すのは嫌です」
かたり。
通路の向こう側の一室から人が出て来るのが見え。零は涙を拭いながら踵を返した。そのまま小走りに走っていく背にシヴェリは声を掛けられず。
「くそっ・・・・・・！！」
吐き捨てるように、壁に拳を打ち当てた。

30話　潜入

「・・・・・本当に宜しいんですか？」
背に掛かった声にシヴェリが顔を上げ。水差しと薬皿を手にしたサーシェスの姿がそこにあった。
あれだけ騒いだのだ。サーシェスの耳にも事の次第が入ったのだろう。
彼の言葉にシヴェリが気まずそうに視線を落とし。
「・・・・・・レイは剣を握った事も魔法を習った事も無い。それはお前も充分に知っているだろう」
「それは、そうですが・・・・・・」
少しの沈黙の後、サーシェスが口を開き。
「陛下・・・・・・。リュートを離れる日の事を憶えておりますか？」
「・・・・・・・・・・・・・・ああ」
「あの日、陛下は私にパール皇女の傍に居て欲しいと仰いました。それは長い旅路で私が敵の刃に倒れるか、それともパール皇女の病状が悪化するか、どちらにせよ遠い地で死に別れてしまう事を案じてのものでしょう」
かつり、とサーシェスが一歩前に出。やや睨み付けるようにシヴェリを見詰めた。
「貴方が察している通り、確かに私はパール皇女を愛しております。この想いが身分差のある愚なるものと重々わかっております。・・・・・・・・それでも私はあの方の下を離れ、貴方に着く事を選んだ。・・・・・・・それは私が騎士であり、貴方を守る事で皇女を守る事に繋がるからです。だけれど、レイさまは違う。レイさまは騎士ではない。剣となる必要が無いのですから。レイさまはたとえるなら盾です。盾と言っても凶刃から身を守る為の盾ではない。陛下の御心を守る為の支えという名の盾です」

「・・・・・・・・・・・・・」
「それに。・・・・・・我等が決起しリュートを離れた後、リュートがロストレヴェスの標的にならないと誰が言い切れるのです？」
シヴェリがはっとし。サーシェスが眼を細める。
「ロマ皇もパール皇女も、その覚悟は出来ております。兵を割くという事はそれだけリスクが跳ね上がる事。だがそうでもしなければ勝ち取るのは難しい戦いである事を、あの方々は知っておられます」
「・・・・・・・・・・・・・サーシェス」
「大切ならばどうか手元に置いて下さい。２度と手の届かぬ場所で失いたくなければ。・・・・・・陛下。私はもうこれ以上、レイさまの悲しい涙を見たくはないのです・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
無言で歩き出したシヴェリをサーシェスが見送り。そして溜息を零した。

・・・・・・場は一転し。イシュバート近郊。
モーラは馬を駆り、この地まで辿り着いていた。
昨夜遅くに届いた伝書精霊。あの内容が正しいのであれば。・・・
否、陛下が確証の無い情報を送って来るはずもない。
娘エリザベートが生きている。そしてその身に危険が迫っていると。
あの日、エリザベートがシヴェリを刺したあの日。
（・・・・・・出ていけ！！）
アリエスダヌスの家の名に泥を塗った彼女を。モーラは怒りのままに家から、そしてイシュバートから追い出した。
近隣の町に身を置き、心穏やかに暮らしている事は侍女からの連絡で聞いてはいたが・・・。

イシュバートが戦火に消えた時、近隣の小さな町村は戦火を逃れたという話もちらほらあった。
娘の安否は気に掛かっていた。アリエスダヌスの血族と知れれば凶刃が彼女へ剥くだろう事は容易に察せられる。
だが彼女に手を差し伸べる余裕はモーラに無かったのだ。あの時は、シヴェリ皇子とパール皇女を少しでも遠い場所へ逃すのが最大の使命であったから。
娘より主君を選んだ。後悔に涙した事もあった。しかし・・・・・・。
「エリィ・・・・・・」
眼の前に広がった町並みにモーラは呟き。馬の足を止めた。
・・・・・・町は閑散としており、思ったよりもロストレヴェス兵の数は少なかった。
「兵隊さん？ああ、任期を終えたとか、新しい任命が下りたとか、色々言いながら町を出て行ったよ。ま、出て行ったとは言っても所詮は入れ替えみたいなものだから、あまり変わった感じはしないけどね」
酒場に居た者はそう言う。
新しい任命。よもやリュートにシヴェリが居る事に気付き挙兵したのか。内心焦りを感じながらもモーラは目深なフードの下でそうか、と一言呟き。
「前の隊長さんはおかたくなくてやりやすかったんだけどねえ。新しい隊長さんはトゲトゲしくてやってられないよ」
「・・・・・・新しい隊長？」
前任の部隊が引き上げられた後、後任の部隊が町入りしたのか。
数は少ないが兵が町を歩いているのが何よりの証だろう。
「ああ、ウィンド隊長の事だよ。何でも女に逃げられたとかで凄い自棄になってて・・・・・・。おっと」
ウィンド！？

モーラがその名にはっとするのと男が何かに気付いて口を押さえるのとほぼ同時だった。

「邪魔するぞ」

聞き覚えのある声にモーラの鼓動が一気に跳ね上がる。目深なフードの向こう側に見えたのは・・・銀色。

ウィンドだ。

死んだはずのウィンド皇帝陛下が、ロストレヴェスの隊長だと！？

ショックで動けずかたまっていればウィンドはモーラの前を通り過ぎ、スツールへ腰を下ろした。

「一杯くれ」

「は・・・・・・」

どうしてこんな事に。これは何かの策略か？それとも。

逸る気持ちを抑えるようにモーラは荒い呼吸を噛み締めた。声を掛けたい。だがそうすれば。

迷いに迷っていればまた新しい声が聞こえ。

「ウィンド隊長！アリスさまよりご命令です。アリエスダヌスの件を終えたならただちにロストレヴェスまで戻るようにと・・・・・・っ」

アリス？アリエスダヌスの件、だと・・・・・・！？

モーラが考え込めば小さな舌打ちが聞こえて来て。荒々しくウィンドが立ち上がった。

「ったくあの女狐が・・・・・・」

そしてモーラの前を歩き、荒々しくウィンドが酒場を出て行く。ギィ、と跳ね扉が重い音を立てた瞬間、モーラは呼吸をする事を思い出したように深く息を吐き出した。

汗が手の内にじんわりと滲む。

・・・・・・陛下が娘を案じて伝書精霊を飛ばした理由、とは。まさか・・・・・・。

「それにしても勿体無かったな」

「ああ」
聞こえて来た声にモーラが顔を少しだけ向け。
「凄い美女だったんだろう？アリエスダヌスの娘とやらは。折角生け捕りに出来たんだし、ウィンド隊長も逃げられた女の代わりに愛でてやれば良かったのに」
「言うな。あの方は例の娘以外に興味を示さないよ。半狂いだからな」
「くそっ。要らないならおれが欲しかったなあ・・・」
兵達の声を聞きながらモーラは酒場を出た。
エリィ。
エリィ。
生きているのか、それとも。
（折角生け捕りに出来たんだし・・・・・・）
囚われているだけと、言ってくれ。頼む、あの娘はただの娘だ。ただの娘なんだ・・・・・・っ！！

「・・・・・・モーラさま？」
ふと、声を掛けられ。モーラは早足で歩いていた足を止めた。そこに驚いた表情の老女が座り込み、果物を売っていた。
憶えている、エリザベートが国を出る時一緒に出した侍女の1人だ。
「・・・・・・やっぱり・・・・・・っ！」
「しっ。・・・・・・家はどうなっている。エリィは・・・・エリザベートはどうしている」
果物を買う素振りを見せながらそっとモーラが声を掛け。老女が涙ぐみながら俯いた。
「姫さまは・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「あの日、レイ姫を逃がす為に・・・ロストレヴェス兵にお捕まりに。その後、広場で公開処刑が・・・・・・。家も抑えられ、家に残っていた者達も何人かは連行されました。私を含め数人は何とか

逃げ延びる事が叶いましたが・・・散り散りに・・・・・・。私のように警備が厳しくなかなか町の外へ出られない者が多数いるかと・・・・・・」
「・・・・・・そう、か・・・・・・」
果実を握ったまま呟いたモーラの手を老女がぎゅっと握り締めた。
「モーラさま、すぐに町を出て下さい。この町には・・・・・・」
「・・・・・・ウィンド皇帝陛下、か？」
「・・・・・・お会いになったのですね。あの方はもう皇帝陛下ではございませぬ。姫さまを手に掛けたのは彼奴です・・・っ」
「！！」
「・・・・・・早くお逃げになって下さい・・・・・・。姫さまは、姫さまは。貴方さまも同じ命運を辿る事を望まれてはおりません」
どん、と強く押され。モーラは立ち上がった。俯いたままの老女をじっと見下ろし。ぎり、と握り拳に力を込める。
食い込んだ爪が皮膚を貫き。ぱたた、と血が地面に滴った。
ウィンド皇帝陛下が娘を殺しただと。
怒りに、憎悪に、全身の血が沸騰し掛ける。だが同時に自身に課せられた使命もまた思い出され。
今此処で怒りに任せて暴れたら。トロストへ辿り着けなくなる。
そうなれば、敗戦は必至・・・・・・。此処まで築いて来たものが、全て・・・・・・。
「・・・・・・っ！！」
モーラは無言で走り出し。老女はその背を見送り仄かに微笑んだ。

これで良いのですね、エリザベート姫さま。
レイ姫を助けたのだと聞いた瞬間に悟った。
エリザベート姫は心穏やかに逝けたのだという事を。
だからこそ、残されたものに真実を与えてこそ、憎悪を与えてはならない。
生きて下さい、モーラさま。

姫さまの分まで。
そしていつの日か、イシュバートを取り戻す事で真の平安を・・・・・・。

31話　たからもの

あんなわがままを言ったって、困らせるだけ。軍事の事は詳しくないけれど、それでもわかってる。
自分の言った事がどれだけ無謀な事なのか・・・・・・。
人工池をあしらえた宮廷の庭。石階段に座りながら零は零れる涙もそのままにぼんやりと中空を見ていた。
（駄目と言ったら駄目だ！）
どんな思いで怒鳴ったのかと思えば零は自分の膝に顔を押し当てた。別れたくない。もう独りになりたくない。もう一度握り返したシヴェリの手を離したくは無かった。
でも、わがままだ。
これは、わがままでしかないのだ。
（・・・・・・だったらお強くなりなさい。今からだって遅くは無いわ。だって貴方はまだまだ若いんですから）
・・・・・・エルリス皇妃。
1年、あたしは何をして来たの。
閉ざされた室内で泣いて、出来た事と言えば走って逃げ出したくらい。
あたしは強くなれなかった。
馬鹿だ・・・・・・あたし・・・・・・。
ぽたぽたと零れ落ちた涙が石畳に染みを作り。零は声を殺すままに泣き続けた。

「・・・・・・レイ」
聞こえた声に零の肩が震え。だがその顔を上げる事は無かった。そっとシヴェリがその隣に腰を下ろし。
「・・・・・・さっきは。・・・怒鳴って悪かった」
言葉を選ぶように静かな声でそう言うシヴェリに零は膝に顔を埋め

たままふるふると首を横へと振り。そんな仕草を見せる零にシヴェリが眼を細めた。
「だがこれだけはわかってくれ。私は、お前が死ぬのを見たくは無い。あの日、燃え盛る城のなかで・・・母上の遺体を見付けた時の光景がまだ眼に焼き付いているのだ。・・・あの光景が時折・・・お前の姿と重なる。心のままにお前を連れていけば・・・・・・お前も失ってしまうのではないかと・・・・・・」
「・・・・・・陛下」
ようやく零が顔を上げ。その涙で濡れた頬をシヴェリの指先が拭ってやる。
「・・・・・・サーシェスに怒られたよ。大切なら手放すな、とな」
「え・・・・・・。サーシェスさんに・・・？」
そっと零はその身体を抱き込まれ。シヴェリの腕のなかでその身を竦ませた。
「大切なものを箱に仕舞っておく事は容易い。だがその箱を守る事が出来なければ・・・仕舞う意味は皆無だ。私はただ・・・自分が臆病な事を認めたくないと、逃げていただけなのかも知れないな」
「陛下・・・・・・」
「・・・・・・レイ。・・・こんな私と共にロストレヴェスへ発ってくれるか。私はイシュバート皇帝としてではなくシヴェリ・クイ・イシュバートとして・・・1人の男として、お前を守る事を誓おう」
真っ直ぐな夜明けのオッドアイに見詰められ、零は息を詰まらせた。そのまま再び、双眼からポロポロと涙を零し。
「陛・・・」
「シヴェリだ。・・・レイ。2人の時は名で呼んでくれ」
「・・・・・・っ。シヴェリ・・・・・・」
ぎゅっとその首に抱き付いて。零は身を震わせて泣いた。その背をシヴェリが優しく包み込み。そっとその眼を伏せ。
「必ず守ってみせる。戦いからも、ウィンドからも。だからどうか、私の傍に居てくれ。・・・レイ・・・・・・」

「はい・・・、・・・はい・・・・・・っ・・・・・・」
泣きじゃくりながらも笑顔で頷いたレイの顎をシヴェリの指がそっと捉え。そのまま唇を重ね合わせた。

そんな2人の様子を物陰からサーシェスが伺っていた。どうやら話が纏まったようでほっとしたように視線を外し。少し離れた通路の所にロマを見付け、はっと姿勢を正す。
「皇・・・・・・」
「そのままで良い。それよりも・・・ようやくシヴェリは重い腰を上げたようだな」
ロマの言葉にサーシェスが彼を見遣り。ふ、と吐息を零すように小さくロマが口元を笑ませた。
「確かに戦場に女を連れて行く事は愚行ではある。だが・・・今のシヴェリに何より必要なのは平静心を保つという事。その為にはたとえ危険な地といえども彼女が必要であろう。それに・・・・・・」
「ええ。レイさまには不思議な力があります。微弱ではありますが確かなもの。・・・きっと陛下を守って下さるでしょう」
たとえ小さなものであっても。弱弱しいものであっても。時に思いというものは魔力をも凌駕するというもの。
「・・・・・・パールの事は任せておけ。どんな事があっても彼女だけは守り切ろう」
「・・・・・・・・・・・・宜しくお願い致します」
深々と頭を下げたサーシェスに、ロマは優しく微笑んだ。

32話　動き出す刻

まるで蛍火のような小さな光の精霊が、まるで舞い落ちる一粒の雪のように夜闇に浮かび上がる。
リュート外壁で見張りをしていた兵はそれを見付けるや否や近くに居た仲間へ声を掛け。その兵もまた、慌しい足取りで外壁を下っていった。
程なく現れたのはリュートの宮廷魔術師と、そしてシヴェリ。やや遅れ気味に零とサーシェスもまたその場へ辿り着き。
「間違い無い。あれは私がモーラの下へ送った伝書精霊だ」
短い呪を唱えればまるで風が吹いたようにくるくると精霊は回り出し、そのまま差し出したシヴェリの手の内へ収まる。
駆け付けた零がそれを覗き込んだ。
「これが・・・伝書精霊？」
以前説明を聞いた限りでは伝書鳩のようなイメージがあったが、こんな小さな光・・・今にも消えてしまいそうなのに。
零の言葉にシヴェリが頷き。先ほどと違う呪を唱える。
「レイさま。伝書精霊の開放は魔力を要しません。必要な呪を覚えればレイさまも伝書精霊を受け取れるようになりますよ」
そっと囁いたサーシェスの言葉に零が見上げ。そしてまたシヴェリの手の内の光の粒を見詰める。
「え、え。そうなんだ、凄い・・・・・・」
ゆらりと光が揺らめき。光の内からモーラの声が響き始めた。

『・・・・・・・・・・・・。・・・・ふむ。これだから伝書精霊は・・・馴染まん・・・・・・。・・・・・・あーあー、これで良いか・・・。・・・・・・こほん。・・・・・・陛下。私は今トロスト宮廷に身を預けております。つい先刻・・・トロスト皇とも謁見が叶い、事の次第を伝えました。今こそ好機と考えて下さり、我等に助

力してくれると、誓って下さいました。現在、出兵数や進行ルート、戦略を調整中で、この通信の後、私も作戦会議に合流致します・・・・・・』

わ、と兵達が喜びの声を上げ。シヴェリが眼を細めた。
零もまた手放しに喜べなかった。エリザベート姫の事は伝わっていたはず。その事に関してモーラが何も報告しないはずがないと思ったからだ。彼女も共にトロスト入りしたのだろうか。
そう考えていれば少しの間の後、モーラが言葉を続け。

『・・・・・・。会議の後、４日で我等はトロストを発ちます。陛下は明朝に兵を発てロストレヴェスへ向かって下さい。ロストレヴェス領手前のドーリア湖で合流出来る算段です』
「・・・・・・・モーラさん・・・・・・・？」
『・・・・・・・・・・・・報告は以上でございます。早急にロマ皇にも事の次第をお伝え下さい』
ふつり、と声が途切れ。光は沈黙した。小さな光を見下ろしたままシヴェリは眼を伏せ。零はシヴェリの衣の袖をそっと握った。
「陛下・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・」
「陛下っ！」
揺さぶろうとする零の手を優しくサーシェスが留め。そして静かに首を振った。
「モーラ隊長が戻るのを待ちましょう。それまでは陛下とて・・・わからない話なのですから」
「あ・・・・・・・。そう、ですよね。ごめんなさい、陛下・・・・・・」
「いや。・・・・・・さて、それよりも忙しくなるぞ。サーシェス。兵舎へ向かいイシュバートとリュート、双方の兵に号令を掛けろ。モーラと合流するまでは両全軍をお前に任せる」

「はっ」
「私はこれから本件をロマ皇に伝えて来る。レイは・・・義姉上にこの事を。気丈な方だが少なからず不安な気持ちはあるだろう。私が迎えに行くまで、姉上の傍に居て欲しい」
「・・・・・・わかりました」
「残りの者達はサーシェスに従い行動してくれ。夜明けと共に出立する事になる」
周囲の兵等にもそう声を掛け、シヴェリはマントを翻した。そのまま歩き出す背を零が見送り。
その肩をサーシェスがそっと叩いた。
「さあ、頑張りましょう」
「はい・・・・・・っ！」
零は大きく頷いた。
全ては回りだした。後はひたすらに走り続けるのみ。・・・・・・たとえるならそれは巨大な馬車。止まる事の無い大きな馬車。その先にあるのは未来という道と死という道だ。
途中下車は赦されない。
泣いても笑っても、これが最初で最後なのだ。やり直しは効かない。頑張ろう。
・・・・・・・・・・・・・・頑張るんだ。

「ご報告致します、アリスさま。トロスト近郊の砂漠でモーラらしい男を見掛けたという情報が」
「・・・・・・モーラ？」
魔術書を手にしていたアリスが兵からの言葉に視線を上げ。
「モーラ・ジ・アリエスダヌスの事？旧イシュバートの皇宮警備近衛隊長の・・・・・・・」
「はっ・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・。そう・・・。トロストに助力を求めたのね。・・・あの子達の死体。確証が無かったから生きていると
は思ってはいたけれど・・・・・・」
暗躍する者達。
その先頭に立つのはきっとシヴェリの坊や。ウィンドの腹違いの弟・
・・。
セイルーン皇女の死体も見付からなかった事を考えれば彼女を保護
しセイルーンの生存兵を引き込んだ可能性は高い。
後は・・・・・・。
少し考えた後、アリスは魔術書を置き、兵に1歩近付いた。
「来るわね」
「・・・・・・は？」
「私はこれから陛下の所へ行くわ。・・・・・・そうね、ウィンド
にも陛下の部屋へ来るよう伝えてちょうだい」
「はっ！」
深く兵が頭を下げ、そして部屋を後にして行く。
それを見送った後、アリスは腕を組み。窓の外を見遣った。
じっと息を潜め、足取りすら掴ませなかったイシュバートの残党達。
此処に来て足取りは掴めたが・・・・・・もう出る杭を打つには遅
すぎる時期なのだろう。
だとしたら。
「全て叩き潰すだけよ」
杭が飛び出して来るなら、叩き折るだけだ。
カツリ。小さな足音を残し、アリスは自室を後にしていった。

33話　姫と騎士

コツ、コツ・・・・・・。
皆早朝の出立を目前に早めの就寝を取り、静まりかえった皇宮。
パールの居室を叩く小さなノック音に、眠る事無く上体を起こしていたパールが視線を向けた。そう、「来るのがわかっていた」ように。
コツ、コツ・・・・・・。
再度続くノック音。そして最後に。
コ、コ、コ。
ゆっくり2度のノック。そして3度目は短く3つ。これは、イシュバート時代に2人で決めた合言葉でもあった。
「・・・・・・どうぞ」
パールの言葉にギ、と扉が開き。現れた人物にパールが微笑んだ。
そんなパールの笑顔を見遣りつつサーシェスもまた面食らったように苦笑を浮かべ。
「・・・いけない方ね。こんな時に夜更かしなんかして。早めに休まないと身体が辛いでしょう、サーシェス」
「・・・・・・そう言わないで下さい。此処に行くか行かないか、かなりの間迷ったのですから・・・・・・」
「ふふ」
意地悪いな、そうサーシェスは少し離れた椅子へ腰を下ろした。
「何卒、お赦し下さい。出立前に、どうしても貴方の顔を見ておきたくて」
「・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・パールさま？・・・・・・パール・・・」
俯いた後、何処か泣きそうな表情で見返して来たパールにサーシェスは抱き締めたい衝動に駆られ。だが伸ばし掛けた手はパールに触れる事無く、握り拳へと変えた。

「・・・・・・っ。大丈夫ですよ、パールさま。・・・イシュバートのホープを持ち帰る約束、未だ果たしておりません。サーシェスは必ずやこの国へ戻って参ります」
「・・・・・・ええ。ええ、そうね。白ホープの花束を。貴方は約束を破らない方ですから。・・・・・・貴方は戦地で戦って来る。そして私は・・・病と闘いましょう。・・・・・・レイに言われたの。強い気持ちを持てば病を治す事が出来ると。レイの国では「病は気から」と言うそうです」
「・・・・・・良い言葉です。・・・・・・っと」
けほけほと咳き込み始めたパールの背をサーシェスが優しく摩り。そっとその顔を見下ろした。パールもまた顔を上げる。
「・・・大丈夫ですか？」
「ええ・・・ごめんなさいね。・・・・・・伯父上の計らいで良い新薬をいただけているので・・・、これでも大分良くはなって来ているのですよ」
「それは良かった。リュートは魔法学的には発展途上ではありますが代わりに薬学が発展していますからね。・・・・・・でもどうか、どうか無理をなさらず。こんな夜更けに訪問をして申し訳ございませんでした。私はもう下がります。・・・・・・パールさまも今宵はもうお休み下さい」
寝台から離れようとしたサーシェスの服をパールの手が咄嗟に掴み。驚いたサーシェスがパールを見下ろした。
「待って・・・お願い。行かないで・・・・・・」
「パールさま・・・・・・？」
「・・・・・・行かないで。もう少し。もう少しだけ・・・・・・此処に。お願い・・・・・・」
ポロ、と涙を零したパールの表情にサーシェスは雷に打たれたような気持ちになり。そっと椅子に座りなおした。服を掴んでいた手を取り、その手を握りなおして。
「わかりました。傍におりますよ。・・・だけれどパールさまはど

うか横になって下さい」
「・・・・・・・・・・・・・」
まだ不安な表情を浮かべるパールにサーシェスは笑みを1つ浮かべ。自分の首に掛けていた護符のネックレスを服の下から引き摺りだした。
細い革紐に幾つも繋がれたお護り石。そのうち一番大きい青い石を取り外し。そっとパールの手に握らせて。
「・・・・・・これは？」
「この護符は亡きアルバ陛下より騎士になった日に賜った、私の半身と呼べる存在です。・・・パールさま、どうかこの石を預かっていただけませんか」
「・・・・・・。綺麗な石・・・・・・。サーシェス、貴方の髪の色みたいですね。わかりました、大切に・・・大切に保管しておきます」
にこり、とサーシェスが笑い。そしてまたパールの手を握り締めた。
「遠く離れていても、いつも・・・貴方の身を案じております。パールさま」
「・・・・・・・・・・・・・。ありがとう、サーシェス」
抱き締められた事も無い、キスをされた事も無い、それでもサーシェスがどれだけ自分を愛してくれているのかはパールにもわかっていた。
愛を伝えるのに言葉は要らない。
それを、2人共知っていたから。
「さあ、そろそろ本当にお休み下さい。私はパールさまがお眠りになっても、ずっと此処にいますよ」
「・・・・・・でも貴方も身体を休めなければ」
「大丈夫です。騎士たるもの、数日は不眠で動けるよう鍛えられておりますから。・・・私の事は心配なさらず、お休み下さい。せめて夜明けまでの短い時間だけでも、病魔からも悪夢からも、貴方をお護りさせて下さい・・・・・・」

縋るように指を絡ませて来るパールにサーシェスは笑顔で頷き。少しの間の後、パールが頬を赤らめながら口を開く。
「1つだけ・・・1つだけお願いしても良いですか・・・・・・・？」
「？・・・・・・・はい」
「・・・・・・・・・・・・1度。1度だけで良い。・・・・・・・私に・・・キスをして欲しいの」
「！」
震えながら小さな声で呟くように言ったパールにサーシェスが驚き。暫しの無言の後、頬を赤らめて顔を背けた。
「サーシェス・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・」
こんな願い。心優しいサーシェスとて軽蔑しただろうか。涙ぐみながらパールが視線を外した瞬間。ぎし、と寝台が軋み。パールは咄嗟に顔を上げた。
サーシェスの方を見た瞬間、大きな影が落ちて来て。パールは額に柔らかくあたたかい感触が落ちて来るのを感じた。
そっと、サーシェスが顔を離す。
「おっ・・・お赦し下さい、パールさま。今の私にはこれが精一杯です・・・」
頬を赤らめたままサーシェスが呟き。パールもまた頬を赤くしたままサーシェスを見遣った。
「・・・・・・・サーシェ・・・・・・・」
「ですが。ですが・・・・・・もしこの戦いで生き延びたその時は・・・・・・。もう1度機会を与えていただけませんか」
一瞬きょとんした後、パールは吹き出すように笑い出し。サーシェスもまた眼を丸くした後笑い出した。
「ひどいですよ、笑うなんて」
「あは、は・・・。ごめんなさい・・・・・・・。でも可笑しくて・・・」
本当に不器用な人。生真面目で不器用で、でもとてもとても愛しい

人。
この人を残して死ねない。生きて信じて待ち続ける事が、私にとっての戦いだ。
零れた涙を指で拭いながらパールは決心していた。
「・・・・・・愛しているわ、サーシェス」
パールの言葉にサーシェスは一瞬かたまり。そして両手で手を握り締めながら。
「愛しております、パールさま。初めてお会いした時から、ずっと・・・・・・」
そう震える声で、言った。
「誰よりも、貴方だけを」
その言葉にパールは微笑み。サーシェスもまた微笑んだ。
死に別れる為ではない。帰って来る為に。その強い決意の為に。
必ず生きて帰る。サーシェスもまた強い思いを胸に遥か未来を見据えていた。

34話　出立

「マリエ、ルト、ラシェ。パールさまとリーゼロッテさまの事、宜しくお願いね」
就寝の前の湯浴みの際、零はそう3人に告げた。はい、とすぐに返事は戻って来るが、それでも3人の表情は晴れず。そんな3人に零もまた苦笑を浮かべた。
「貴方達に任せたら一番安心するから」
「レイさま・・・・・・」
「・・・・・・レイさま、どうしてレイさまが戦地へ赴かねばならないのです？レイさまも一緒に此処でお待ちになった方が・・・・・・」
マリエの言葉にルトとラシェもまた彼女の方を見。零は真っ直ぐにマリエを見返した。
「陛下は、強要していないよ。これはあたしが望んだ事。あたしのわがまま。あたしが、無理に同行を願い出たの」
「どうして・・・・・・」
「・・・・・・あたしが、陛下を愛しているから」
静かだが確りと強い眼差しで答えた零に3人は言葉を失った。突如放り出された見知らぬ国で戸惑い、怯え、常に不安な表情を浮かべていた少女のそれと違う。
たった1年。されど1年。彼女の心は大きく成長した。
「ただの側室であるあたしが陛下に何をしてあげられるか。・・・あたしは戦う術（すべ）を知らない。だけどあの優しい人の心が戦争で傷付くなら、あたしはそれを護ってあげたい」
「レイさま・・・・・・」
「心配しないで。どれくらい長引くかはわからないけれど、あたしは必ず帰って来る。ううん、あたしだけじゃない。陛下もサーシェスさんもモーラさんも・・・・・・兵士の皆も。絶対皆で帰るから」

涙ぐみ項垂れたルトに気付き、零は彼女に近付いていった。そしてそっと抱き締めて遣る。
「泣かないで、お願いだから」
「はい・・・・・・はい。ごめ、ごめんなさ、い・・・・・・」

「レイ」
気付けば薄布1枚向こう側でシヴェリが待っているようで、湯浴みを終え雑談している事を察したのだろう。流石に覗き込むような無粋な真似はしなかったが、声を投げ掛けて来た。
ルトから身を離せば「はい」と返事を1つ。そして畳んでおいてあった衣を纏いなおした。
「今、行きます。お待たせしてすみません」
「いや、良い。・・・・・・それとも部屋で待っている方が良いか？」
ルトのすすり泣きがシヴェリの耳に届いたのだろう。案じる声が聞こえ。マリエがルトを抱き込んだまま苦笑を浮かべて首を横へ振った。様子に零も苦笑を浮かべ。無言で頭を下げた。
「いえ、もう少しだけ待っていて貰えますか。すぐに着替えも終わりますから」
「・・・・・・わかった」

程無くして薄布が開かれ。侍女3人と零が出て来る。戸口で腕を組み、壁に背を預ける形で待っていたシヴェリはボロ泣きのルトに気付き。ちょっと気まずそうに片眉を跳ね上げた。
「・・・・・・矢張り先に戻ってるべきだったか」
「大丈夫です、マリエ達も居ますから。・・・じゃあマリエ、後の事は・・・・・・」
「はい。レイさまも陛下も、ごゆっくりお休み下さい」
深く頭を下げた2人に反射的に零も頭を下げたりしつつ、ようやく零とシヴェリは居室へと戻った。

部屋に戻ると零は真っ直ぐに寝室へ向かい、シヴェリの寝台を整え始める。
「陛下、もう遅いですからお休みに・・・・・・」
言い掛けた言葉は、後ろから抱き締められる事で止まった。頬を赤らめ、零がシヴェリを見上げ。
「陛下・・・・・・・」
「・・・・・・2人きりの時は名で呼べ、と言っているだろう？」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「ん？」
「・・・・・・。シヴェリ」
「良い子だ」
そのまま顎を取られ口付けられる。後ろへ下がろうとするが後ろは寝台だ。柔らかく絡め取られていても、シヴェリと零の体格差を考えると大した力を込めていなくともなかなか腕のなかから逃れる事は難しい。
「ふ・・・・・・あ、シ、シヴェリ。ダメ・・・ダメ。もう寝ないと・・・明日の進軍に響・・・・・・」
「心配するな、サーシェスが・・・・・・。ああ、あいつも徹夜組かも知れんな」
「え？」
サーシェスとパールの仲を良く知らない零は不思議そうな声を上げ。そんな零の様子にシヴェリがくすくすと笑った。
「大丈夫だ。辛ければお前は明日馬車のなかで寝ていれば良い。交戦危険区域へ入るまで1日は確実に掛かるからな」
「そ、そんな悠長な・・・・・・っ。あ、あ・・・・・・」
痩せっぽっちな身体はあっという間に攫われて。そのまま寝台へ下ろされてしまった。シヴェリが指を鳴らせば部屋の4隅に置かれている灯りが全て消え。
暗がりのなか、零の上へとかぶさった。

「シヴェ・・・・・・・」
「レイ。・・・・・・ありがとう」
「え？」
闇のなか聞こえたシヴェリの感謝の言葉に零は驚いた表情を浮かべた。だが2度の言葉は無く、そのまま弄ばれ。零は考える余裕すら瞬く間に失った。

そして、出立の朝・・・・・・・・・・・・・。
大掛かりな出立は避け、裏門からの出立となった。十数台の馬車と数多の騎馬隊。その成りはまさに戦というものであり。
その規模の大きさに零も驚きを隠せなかった。
「凄い数・・・・・・」
「ああ。だがこれでもロストレヴェスを相手にするには・・・・。ああ・・・・・伯父皇！」
「シヴェリ。天候に恵まれたな。幸先が良い事だ」
現れたロマにシヴェリと零は頭を下げた。
「リュートの国境を抜ければいつ交戦が起きてもおかしくはない。気を引き締めて行きなさい」
「はい」
「・・・・・・レイ。シヴェリを頼むぞ」
一国の皇に頭を下げられ、零は面食らった。慌てて両手を振り。
「あ、あたしなんか・・・っ。・・・・・・・・・・・・・。・・・はい、陛下の助けになれるよう尽力致します」
零の言葉にロマがにこりと笑った。その笑みは何処かエルリス皇妃を思い起こし。
ロマがエルリスの兄だという事を思い出していた。

深々と、零が頭を下げ。その肩にシヴェリが手を置く。
そこにサーシェスが現れ。地面に片膝を突いた。
「陛下、全部隊の準備整いました」
その言葉にシヴェリが頷き。零が双方を見遣った後、ロマへ視線を移した。零の視線を受け止め、ロマが頷いてみせる。
「此処の事は心配しないで、行って来なさい。後ろを振り返る必要は無い。前だけ向いて、行きなさい。大丈夫、結果は必ず付いて来るというものだ」
「・・・・・・はい」
「・・・・・・行って参ります、伯父皇。義姉上とリーゼロッテ皇女の事を宜しくお願いします。・・・・・・サーシェス、伝令を出せ。出立だ」
「はっ！」
シヴェリに促され、馬車に乗り込む。程なく馬車が動き始め。

「レイーっ！！」
聞こえた声に零は驚いて外へと身を乗り出した。何処から上がったのか、城壁に登り、兵に肩車される形でリーゼロッテが手を振っていて。零もまた笑顔で手を振り返した。

必ずまた此処へ帰って来るんだ。
そして皆で一緒にイシュバートの地を踏もう。

幸告げ鳥よ、どうか見ていて欲しい。
あたし達の戦いを。全ての涙を力に替えて、約束の地を取り戻す。
その時こそ、真実の夢を手に入れるのだ。

35話　綻び

「俺が行く！俺に行かせてくれ！」
怒鳴るように叫ぶウィンドの前でアリスが腕を組み。
「貴方に与える命は皇都の警備強化よ、ウィンド。・・・・・・落ち着きなさいな、あの娘が居るとは限らないでしょう？」
「あれが生きている以上、可能性が無いわけじゃないだろう。それに俺なら奴等を潰せる。・・・俺に行かせてくれ、アリス！」
「駄目よ」
ぴしゃりとアリスが言い切り。冷たい視線をウィンドへ向けた。ぎり、とウィンドが歯を食い縛り。
「貴方の能力が高い事は認めるわ。でもこれは戦略でもあるの。貴方を現地へ赴かせるわけにはいかない」
「だが・・・・・・っ！！・・・・・・っ」
アリスは指先に魔力を込めてウィンドの前へと翳し。瞬間、びくりとウィンドの身体が揺らいだ。
「駄々を捏ねないでちょうだい。さあ、ウィンド。今貴方のすべき事は何？言ってごらんなさい」
「お・・・・・・。俺は・・・俺は・・・・・・っ！」
何も考える必要はない。
ただ言われる事だけをこなしていれば良い。
精神操作の呪が仄かな光となってウィンドの額に溶けてゆく。大きく両眼を見開いたウィンドが動きを止め。だが次の瞬間アリスを強く突き飛ばした。
ウィンドの思い掛けない行動にアリスも反応出来ずその場に転倒し。少し離れた所に居たリヴが駆け寄って来る。
「アークストーンさま！？」
ウィンドは呆然とそれを眺めた後、踵を返して走り出し。そのままアリスの部屋を飛び出していく。

「ウィンド！！」
その背へリヴが怒鳴り。上体を起こしつつアリスが溜息混じりに額に手を当てた。
「・・・アークストーンさま、お怪我は」
「ええ、大丈夫よ。・・・・・・だけどあんな行動を取るなんて。もう本当に限界なのね・・・・・・。あの【玩具】は」
「・・・・・・・・・・・・・」
押し黙るリヴにアリスが小さく笑い。
「リヴ。貴方ならどうすれば良いと思う？」
「・・・・・・生かしておいても得は無いように思えます。これからイシュバートの残党等と衝突する事を考えれば、逆に足を引っ張るだけになるだけでなく我等を窮地へ追い遣る可能性も・・・・・・」
まだ幼さを残しつつも淡々と口にするリヴにアリスは満足そうに頷いた。
「そうね、私もそう思うわ。【玩具】は遊ぶ為のもの。遊べなくなったら・・・ちゃんと処分しないとね？」
「・・・・・・その通りです。新しい精神魔法の被検体が必要であればご用意しますが」
「ええ。イシュバートの件を終える頃には研究の再開をしたいわ。リヴ、・・・貴方は本当に賢い子。私の後継にふさわしい人材よ」
この手で育てた最高の後継者。
褒められ、リヴは嬉しそうに、そして恥ずかしそうにはにかんだ。
そんなリヴの様子を微笑ましく見詰めた後、アリスは窓の外を見。
「リヴ、伝令をお願い。・・・・・・あれの始末時期が来た、とね。隙を見付け・・・ウィンドを始末なさい。イシュバートに確保される前に、ね」
「畏まりました、アークストーンさま」
アリスの言葉に顔色１つ変える事無くリヴは頷き。そのまま部屋を後にしていった。

試作品。不安定な状態が続いたけれど、使えないなら処分しなくてはならない。ウィンドの記憶のなかには皇宮の機密も含まれているのだ。
高い魔力を有していたし良い男だったけど・・・・・・これぱかりは仕方ないわね。
眼を細めたアリスではあったが、その表情はお気に入りの玩具を手放すくらいの思いしかなかった。

俺は何をした。アリスは俺に何をしていた。
わからない。頭が痛い。ただわかるのは・・・あの男、シヴェリが生きているという事。
レイはシヴェリを好いていた。あの男を殺しその首を取れば、レイも諦めがつくというもの。
待っていろ、シヴェリ。待っていろ、レイ。必ずこの手に取り戻してやる・・・っ！！

ウィンドは混乱した思考を抱えたまま馬房から馬を出し、兵の制止を振り切り走り出した。
何だこれは。
頭に靄が掛かっているかのようだ。どうしてこんなにはっきりしない。
（・・・・・・ふうん、この生贄ちゃんが異世界から、ねえ・・・・・・？）
ふと脳裏に響いた声にウィンドは咄嗟に手綱を強く引き上げてしまった。驚いた馬が嘶き、その動きを止め。片手で手綱を握ったまま、ウィンドがこめかみに手を当てる。
何だ、今のは。
ずきん。と、まるで針を刺したように小さく鋭く、だが深さのある

痛みが脳を貫き。ウィンドは顔を顰めた。
「うっ・・・・・・・・・・・・・・・！？」
（オヤジが馬鹿な事をしなければ巻き込まれる事も無かっただろう。だとしたら俺達（むすこ）の責任でもあるだろ？じゃなきゃ・・・・・・誰があの子を護ってやるんだよ）
（・・・・・・泣くなって。ほっぽりだしたりしないから心配するな）
なんだ、これは。
これは、誰の記憶だ。
（シヴェリ、俺は国を護る。だからお前は俺を支えてくれ。・・・身勝手？上等だ。だがお前だってまんざらじゃないって表情（かお）してるだろ？）
国を護る・・・・・・・。国？ロストレヴェス？
いや・・・・・・・違う、これは・・・・・・。

「ぐっ！！」
馬上でウィンドの身体が傾げ、そのまま落ちる。乗り手が落ちた事に驚いた馬もまた止まり。枯れた干草のような草地に転がったまま、ウィンドは空を仰いだ。
「俺は・・・・・・俺は。・・・くそっ、何でこんなに苛々するんだっ！！」
ガッと起き上がれば馬の所へ戻り。再びその背に跨った。手綱を握り、馬を走らせ始める。
きっと零が此処に居ないからだ。
零を取り戻せばこのもやもやも消え失せる。
ウィンドは得体の知れない強い不安を抱いたまま、ただ我武者羅に馬を走らせ続けた。

36話　不可侵の戦い

赤い夢。
燃え盛る炎。静かだが膨れ上がる恐怖と、不安。
炎のなかには白眼を剥き、絶叫しつつ死にゆく男の姿。そして刃に貫かれる女性の・・・・・・。

「嫌あ・・・・・・っ！！」
馬車のなかに小さく短い悲鳴が響き渡った。だが驚く者は誰も居ない。
サーシェスに保護され、合流された日から。零は夜な夜な悪夢に苛まれた。
独りで彷徨っていた時は生き延びる事に必死だったからだろう。そのような夢に侵される事も無かったが。シヴェリの所に来てからはまるで忘れていた悪夢を開封してしまったかのように過去を夢見て苦しんでいた。
傍らで眠っていたシヴェリが眼を開き。そっと零の身体を抱き込んでやる。
「レイ・・・レイ」
身を震わせて泣いている零に眉を寄せ、ぎゅっと抱き締める腕に力を込め。
「落ち着け・・・レイ。大丈夫、大丈夫だ・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・」

「お休み中申し上げます、陛下」
馬車の外から声が聞こえ。シヴェリが馬車の窓を開いた。漆黒の闇のなか、併走して来た馬上のサーシェスがそこにあり。零もまた涙を拭いながらサーシェスを見遣った。
「そろそろドーリア湖に差し掛かるのですが・・・」

「どうかしたのか？」
「はい」
サーシェスが湖の方へ視線を移し。シヴェリ等もまた視線を上げた。時は深夜だ。だが森に囲まれた湖がある方は茜色の靄に包まれていた。
あれは炎か。
「山火事・・・？」
零の呟きにシヴェリが否定の声を上げ。
「あれは魔力の炎だ。モーラの隊が待っているはずの場に炎・・・。と、あれば交戦状態の可能性が高い。ロストレヴェスに勘付かれたか」
「現在第1部隊から3部隊まで臨戦状態へ整えております。現地で確認次第交戦に入ります」
「わかった。私達もすぐに支度をしよう。・・・・・・レイ、外套を取ってくれ」
「はい」

第1部隊に合流する形でシヴェリと零は馬に乗り、3隊と共に現地へ急行した。
そこで響くのは剣の音と、炎の炸裂音。敵の部隊は見えない。よほど少数での衝突なのか。ふと眼の前へ何かが飛び出して来てシヴェリは馬の足を止め。零が驚いた表情を浮かべる。そこに居たのは軽度の火傷を負ったモーラの姿だった。
「ちいっ！くそっ！！」
「モーラさん！！」
零の声にモーラが驚いた表情を浮かべ、馬上の2人を見上げた。
「お、おお。陛下、それにレイさまっ！！」
「敵は？」
短く尋ねるシヴェリにモーラが短く唸り。
「て、敵は・・・・・・」

「・・・・・・やっと着いたか。此処で待っていれば必ず来ると踏んでいたぜ。・・・苦労したぞ、流石はモーラ隊長。殺さずに弄ぶのはなかなか骨が折れる」
聞こえた声に零の身体がかたくなった。シヴェリもすぐに敵の正体を察し、息を飲む。
「久しぶりだなあ、シヴェリ」
燃え盛る炎を背ににやりと笑ったウィンドにシヴェリが息を飲み。零が身を震わせた。そんな零を見止めればシヴェリがぺろりと唇を舐め。
「やっぱりそいつのところに居たか、レイ」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「まあ、いい。シヴェリをくびり殺せばお前の諦めも着くというもの」
モーラとサーシェスが剣を構えウィンドを睨み付ける。だがそれをシヴェリが片手で制し。
「お前達は下がれ。あれの目的は私だけのようだ」
「陛下」
剣を抜いたシヴェリにウィンドもまた笑みを深め。だがシヴェリはウィンドを見据えたまま、静かな表情で。
「ウィンド。・・・・・・それは本当にお前の望みなのか？」
一言、告げた。
瞬間ウィンドの表情が変わり。その場に居た全員がはっとする。ずきん！と鋭い頭痛がウィンドを襲い、ウィンドがこめかみに片手を当て、顔を顰める。
「ウィンド！！」
「煩い、黙れ！！」
ウィンドは吼えながらシヴェリに向かい駆け出し。思わず兵が動いた。しかし。
「誰も手を出すな！これは私達の戦いだ！！」

シヴェリが叫ぶのと、シヴェリが剣で受け止めるのと、ほぼ同時だった。
「我願うは焔の射手！！」
「我願うは水乙女の加護！！」
剣を交えながら2つの詠唱がウィンドとシヴェリの口から零れ。ウィンドの放つ炎がシヴェリの水の膜に瞬時に封殺される。
どちらもかなりの集中力を要する高位精霊術だ。それを短い句に纏め一瞬で発動出来るのは2人が高位の魔法使いである証でもあり。
ギィン！！と鋭い音を立て、シヴェリがウィンドの剣を横薙ぎに払った。
「陛下・・・・・・っ！！」
祈る仕草をしつつ零は表情を歪めた。何て事。今のウィンドが嘗てのウィンドでないにしろ。それでも。
あれだけ仲の良かった2人がこうして剣を交わらせ戦うなんて。
身を震わせる零を横目にウィンドがふん、と笑った。
「なあシヴェリ。レイはお前に話したのか？」
「・・・・・・・・・・・・。何をだ」
「俺はレイを抱いた。妻としてな。お前はそれを承知でレイを傍に置いているのか？」
シヴェリとレイの表情が一変し。ウィンドがくっと喉を震わせた。そのまま高らかと笑い出し。
「何だ、知らないのか。レイの奴も意地悪い奴だ。何も知らせていなかったとはな！」
「いや、やめて・・・・・・。やめてえっ！！」
「レイさまっ！」
耳を塞ぎ、その場に膝を突いた零にサーシェスが手を伸ばし。剣を握り締めたままシヴェリがぎり、と歯を食い縛った。
「・・・・・・がどうした」
「うん？」
「それがどうした、と言っている！！」

舞い上がる風。それは瞬く間に無数の不可視の刃となり。ウィンドへ向けて殺到した。
1つ1つの刃は細かく、殺傷力には乏しいがまるで暴風のようであり。ウィンドは無数の細かい傷を受けながら大きく弾け飛んだ。
無詠唱、だと・・・・・・っ。
倒れ伏し、すぐに動けないウィンドにシヴェリが1歩近付いていき。
それに気付いた零が涙目を上げた。
「だ、め。・・・・・・陛下、だめ・・・っ、殺しちゃだめえっ！！」
殺気にのまれていたシヴェリが零の声にはっと正気付き。ウィンドもまた驚いた表情で零を見た。・・・・・・その瞬間。
「がっ・・・・・・！！！」
激しい頭痛がウィンドを襲い。ウィンドがこめかみを抑えながらその場でもがき始め。
全員がはっとする。
「な・・・・・・っ」
「ぐ、あ・・・・・・っ！！あ、頭が・・・っ・・・・・・がああああっ！！」
苦しみ出すウィンドに全員が呆然とかたまっていたが、一番最初に動いたのは零だった。
「ウィンド！頑張って！本当の貴方を取り戻して、お願い・・・・・・っ！！」
本当の自分？
何を言っている。
言っている意味がわからない。

（私の声は貴方の精神を侵し、脳を犯し、全てを・・・・・・奪う）

（ウィンド、良い子ね。貴方はもう私に逆らえない）

（・・・・・・それは本当にお前の望みなのか？）

（さあ、ウィンド。今貴方のすべき事は何？）

（・・・・・・・・・・・・・・殺しちゃだめえっ！！）

誰だ。
誰だ。
誰だ、誰だ、誰だっ！！
この声は誰だ、この記憶は誰のものだ、此処に居るのは誰だ。
「あああああ！！」
「・・・・・・！レイ！！」
シヴェリの制止を振り切り、零がウィンドへ駆け寄りその身体を抱き締めた。
だが零の行動に意識を向けるだけの余裕は無く、ウィンドは全身で悲鳴を上げ。
「俺は、誰だ！！」
その叫んだ瞬間。闇を切り裂くように銀の光が放たれた。
「！！！」
誰もが息を飲んだ。鋭い矢が1本。ウィンドの胸を貫いたのだ。

37話　道標

「ウィンド！？」
「サーシェス！！モーラ！！」
零が驚いた声を上げるのとシヴェリが鋭い声を上げたのはほぼ同時だった。
瞬時にサーシェスとモーラが剣を抜き、辺りを伺う。最初に走り出したのはモーラだった。暗がりでじっと息を殺していた気配を捉えたのだ。慌てて走り出したそれを追い掛け。・・・・・・まるで肉食獣が短期決戦で獲物に迫るような、そんな速度で相手に飛び付けば、そのまま抑え付けた。
「動くでないっ！！」
「モーラ隊長！！」
そこにサーシェスもまた部下と共に駆け付けていく。

「陛下・・・陛下！ウィンドの血が・・・血が、止まらない・・・・・・っ！！」
零が必死に訴え。シヴェリが舌打ちをし辺りを見回す。助けるべきか否か、未だ戸惑いの渦中で動けない兵等を一瞥すれば。
「何をぼさっとしている！医療魔術師は前へ！応急処置の道具は未だか！！」
シヴェリの一喝でざわりと兵が動く。慌てて数人の兵が倒れているウィンドへ駆け寄り、治療を始め。
零はシヴェリに肩を抱かれ立ち上がった。
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・レイ」
「ありがとう・・・、陛下。助けてくれて・・・ありがとう・・・・・・」
自分だってどれほど惨い目に遭わされたか。それなのに零はウィン

ドを助けたシヴェリを心から感謝していた。
そんな零の様子にシヴェリが眼を伏せ。その時、少し離れた所からモーラが声を掛けて来た。
「陛下！！」
「・・・・・・っ」
賊の事を思い出し、シヴェリがモーラを見遣る。だが傍に居たサーシェスが静かに首を横へ振り。
「隙を突かれ舌を噛まれました」
「・・・・・・教育が徹底されているな。ウィンドを切り捨てたか。・・・ロストレヴェスの者には違い無いだろうが・・・・・・」
「洗脳が解ける事で機密が漏れる事を恐れたのかも知れませんね。だとすればあの方には死んで貰っては困ります」
ウィンドが運ばれたテントの方をサーシェスが見据えた。複雑な表情で俯き座り込んでいるモーラに零がそっと近付き、煤けた頬をハンカチで拭ってやった。
驚いてモーラが零を見遣る。
「レイさま、なりません。汚れてしまいます」
「・・・・・・大丈夫です、あたしは。それより・・・エリザベートさまは？モーラさんとご一緒じゃ・・・」
零の言葉にモーラが両眼を見開き。そして、閉じた。
「母親の所に行っております」
「お母さまの？」
そっとシヴェリが零の肩に手を置き。モーラが立ち上がった。そのまま歩き出す背を見送り。
「陛下？」
「・・・・・・モーラの妻は何年も昔に病で亡くなっている」
「・・・・・・！！」
つまりは、そういう事だ。
エリザベートは。
「・・・・・・エリザベートさま・・・・・・」

一目シヴェリに会わせてあげたかった。泣き崩れた零の身体をシヴェリが支え。そのまま天を仰いだ。

・・・・・シヴェリと零が搬送用テントに入ればそこは静まりかえっていて。一瞬最悪の事態を想像した零が表情を青ざめさせた。だが医療魔術師はシヴェリへ近付けば。

「幸い急所は外れておりました。失血が多いので安静は必要ですが、現状で生命の別状はありません」

「・・・・・・・・・・・・そうか」

シヴェリが片手を上げればテント内に居た兵達が外へ出ていき。内部にはシヴェリ、零、ウィンドの3人だけが残された。

意識が戻ったばかりなのか未だ朦朧とした表情で。それでもシヴェリを見付ければウィンドは不思議そうに2人を見遣った。

「・・・・・・シヴェリ？・・・・痛っ・・・・・・」

どう声を掛けて良いのかわからずシヴェリは無言のままウィンドを見下ろしており。零が代わりに口を開く。

「ウィンド・・・・・・。何があったのか憶えている？」

「レイ・・・？何かあったのか・・・？何の、話だ・・・・・・？」

洗脳されていた時の記憶が無いのか。一瞬息を飲んだ2人だったがウィンドは未だ頭痛の余韻が残るのか額に手を当て、眼を閉じた。

「・・・・・・・・・・・・・・。いや。俺は・・・・憶えている。・・・・・・・憶えているよ・・・・レイ。俺は・・・・・・・とんでもない、事を・・・・・・・・・・・・・・」

「確かに、とんでもない事だ」

シヴェリが口を開き。零がはっとしてシヴェリを見上げる。

「陛下！！」

「・・・・・・・お前がした事は・・・・・・・」

「言うなシヴェリ。・・・・・・言いたい事はわかるさ。謝罪1つ

で済む話じゃない・・・。俺はお前の母を手に掛け、国を・・・・・・・そして、レイを・・・・・・・・・・・・」
零が自分の衣の裾を握り締めたまま唇を噛み締め。ふるふると首を横へ振った。
「ウィンド・・・・・・」
「・・・・・・シヴェリ、俺を殺してくれ」
ウィンドの放った言葉にシヴェリが両眼を見開いた。
「・・・・・・俺は、生きている資格の無い人間だ・・・・・・」
パンッ！！
乾いた音が響き。ウィンドは驚いた表情のままかたまった。零がウィンドの頬を張ったのだ。そしてポロポロと両眼から涙を零し。
「・・・・・・陛下が・・・シヴェリが、どんな思いで貴方を生かしたのかわかっているの？・・・死んで終わりにするなんて、卑怯よ。そんなのただ逃げている事と変わりない。すまないと思っているなら・・・思ってくれているなら！生きて・・・生き延びて償う事が一番じゃないの？シヴェリだってそう思ったから、ウィンドを助けてくれたのでしょ？」
「レイ・・・・・・」
押し黙っていたシヴェリが口を開き。
「お前を赦せない人達は数多く存在するだろう。殺したいと願う者すらも。だがそれでもお前は生きねばならん。それが・・・お前に与える罰だ。・・・・・・ウィンド」
「シヴェリ・・・・・・」
テントの外で話を聞いていたのか兵達の間でも動揺が広がり。ざわめきを聞き付けたシヴェリがテントの幕を開く。
「ウィンドを私達の馬車へ移す。数人残り、後は出立の準備を整えろ」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「聞こえなかったのか！！予定通り夜明けと共にロストレヴェスへの侵攻を開始する！！もたもたするな！！」

「は・・・、は！！」
戸惑いながらもウィンドの移送を開始するのを眺めつつ、零は両眼にたまった涙を指先で拭った。
そんな零をシヴェリが後ろから抱き締めて遣り。
「・・・・・・陛下」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・勝手な事を言ってごめんなさい。だけど、あたし・・・・・・」
「わかっているよ」
溜息混じりにシヴェリが呟き。そのまま白々と明らんで来ている空を見遣った。
「お前は何も間違っていない。寧ろ、お前のおかげで道を外さないで済んだ。・・・・・・・感謝しているよ、レイ」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「ありがとう、レイ」
そっとシヴェリの指先が零の顎を捉え。そのまま唇を重ね合わせた。

された事を考えれば、怒りを消すのは難しい。
だけれど血で血を洗うような事をして一体誰が喜ぶのか。
憎悪は憎悪でしかない。憎悪に憎悪を幾重重ねようとも、それは決して消える事は無いのだ。
私は、赦せるのだろうか。ウィンドを。
シヴェリは未だ苦悩を抱えつつ。それでも零と共になら、いつか赦せる日が来るかも知れないと。そう願っていた。

38話　立案

「そう・・・・・・。失敗した、と・・・・・・」
「は・・・・・・」
部下からの報告に、アリスは前面の大きな窓を見据えたまま静かにそう呟いた。
表情こそ変わらないが、ぎり、と杖を握り締め。その音に部下が身震いをする。
「わかりました。そうなってしまった以上どうする事も出来ません。国境警備からの連絡で進軍を確認しています。残党軍がウィンドの持つ情報を使って来るならば、内容を予測し個別に対処するしかありません」
「は、はい・・・・・・」
くるりとアリスが向き直る。そのまま杖を差し向けて。
「奴等の狙いは皇都レヴァスであり皇宮。そしてゼオムント皇の首。皇都に到達する前に・・・全力で潰しなさい！唯1人とてこの地を踏ませてはなりません！」
「はいっ！」
ちら、とアリスの視線が動き。傍らに控えていたリヴを見遣った。そこには小間使いではなくきちんとした軍服に身を包んだリヴの姿があり。
それでも13～14歳ほどの少年であるリヴに兵が戸惑いの色を露わにする。
「リヴ。今より貴方に魔術兵団の兵団長代理の地位を与えます。兵を動かしイシュバート残党を始末なさい」
「畏まりました」
「え？え・・・・・・」
こんな子供に？そう言葉には出さないがアリスとリヴを相互に見遣る兵に、リヴがくすりと嘲笑った。

「若輩者ではありますが、どうぞ宜しくお願い致します」
「は、は・・・・・・はい」
「リヴを侮らない方が良いわよ？・・・・・・さあ、私も忙しくなるわ。悪いけれど先に行かせて貰うわね」
長い灰色の髪がぱさりと動きに揺れ。アリスは部屋を立ち去っていった。
この子供の事は良く知っている。アリスが常に傍らに置いていた小間使いだ。宮に居る誰もが、リヴをそれ以上の眼で見た事は無いだろう。
軍事にも関わっていなかったはず。それなのにどうして・・・・・・。
ちらりと兵がリヴを見下ろせばリヴも彼を見上げ。にこりと天使・・・もとい、小悪魔か。無邪気な笑顔で笑み返した。
「さあ、アークストーンさまも仰いましたし。僕達も参りましょうか。愚図愚図している暇はありませんからね」
ただの子供のはずなのに。それなのに、リヴの内に得体の知れないものを感じ。
「はっ・・・・・・」
頭を下げた兵の頬を汗が伝い零れ落ちた。

ゴトゴトと揺れる馬車。その動きが止まる。
馬車の内部にはシヴェリと零。そして簡易寝台に横たわる形でウィンドが居た。シヴェリが零を促し、零がウィンドを見遣る。
「あたし達・・・食べ物と飲み物、貰って来るね。ウィンドの分も貰って来るから・・・・・・」
「ああ・・・・・・」
一度戦場に来てしまえば皇族も兵もあまり大差は無い。ところどころの休息地点ではシヴェリも零も部下達と共に飲食を共にしていた。

そうすれば、毒見は1度だけで済む。提案したのはシヴェリ本人だった。
「あ・・・・・・。モーラさん・・・・・・・？」
薄いスープを受け取っていた零は自分達の馬車にモーラが近付いていくのに気付き。シヴェリもまたパンを齧りながらその方を見た。
「放っておいてやれ」
「え、でも・・・・・・・。・・・・・・・はい」
「レイさま、これを。花の蜜を糖で煮てかためたものです」
傍に居たサーシェスが小さな飴玉を差し出して来て。零が驚きながらもそれを受け取った。
「でも、これ・・・・・・」
「ご安心を。兵等にも分け与えております。これはパールさまが事前に用意しておいてくれたもので、甘いものは疲れた思考を整えるのに良いと」
「そう・・・・・・。良かった。一番大変な人達は兵の皆さんだから。どうか食べ物とか・・・優先してあげて下さいね」
スープの器を飲み干し、シヴェリが零の肩を抱き寄せる。わ、と少し驚いた声を上げ。零がシヴェリを見上げた。
「レイ。その気持ちは嬉しいが、長年訓練された兵とお前じゃ体力に数倍の差がある。心配せずとも兵糧は充分にあるし、お前が遠慮する必要は無い。・・・お前はお前の事だけを案じていろ」
「・・・・・・・・・・・・」
「わかったか？レイ」
「・・・・・・はい、わかりました」
零の言葉にシヴェリが頷き。そして小さく微笑んだ。

「・・・・・・俺はお前の娘を殺めてしまった」
馬車内部。入って来たモーラにぽつりとウィンドが呟き。モーラも

また視線を落としたままに「存じております」と言葉を返した。
そんなモーラをウィンドが横たわったまま見遣り。
「・・・・・・そうか。なあ、モーラ。こんな俺でも、シヴェリは生きていろ、という。・・・・・・お前はどう思う？俺は・・・生きていて良いと思うか？」
「・・・・・・・・・・・・・・陛下の御心のままに」
「シヴェリの事はどうでも良い。お前の気持ちが知りたいんだ、モーラ」
軽口ではなく、何処か力無く。それでもウィンドは眼にその全てを込めたように力強く、モーラを見詰めた。
「・・・・・・・・・・・・私は・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「私も、貴方に生きて償っていただきたく思います」
モーラの言葉にウィンドは眼を細め。そのまま視線を伏せた。
「・・・・・・そうか」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・すまん。こんな言葉を何十何百、繰り返そうが・・・何も変わらないがな。たとえ無駄であっても・・・謝らせてくれ・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
ウィンドが身じろぐ音が聞こえ、モーラがはっとした。
急所を外れているとはいっても矢で射抜かれたとあっては絶対安静だ。それでも起き上がるウィンドに慌て、モーラが手を出す。
「ウィンドさま！？何を・・・・・・」
「騒ぐな、大丈夫だ。・・・おい、シヴェリ。そこに居るんだろう？立ち聞きしてないで入って来い」
ウィンドの言葉にシヴェリが零を連れて馬車に入って来て。いつから聞いていたのかとモーラが驚いた表情で2人を見遣った。
「ウィンド」
少し身体がおっくうなのか深く息を吐き出し、それでもウィンドは

胸の包帯の上から自分の手を重ねた。
「何もせずにじっとしてるのは性に合わないからな。道中ずっと・・・自分の魔力を生命力転換させて傷口の治癒に回していた」
「・・・・・・。医療魔術か。そういえば忘れていたな、お前が手掛けていたもの、召喚術だけではなかったか」
「・・・・・・それなりに齧っていたからな。・・・・・・それよりも、だ。・・・・・・レイ、この馬車には地図はあるか？」
突然に名を呼ばれ、零が驚いた表情を浮かべた。そのまま荷のなかから1枚の大判の地図を広げ。ウィンドの前に広げる。片手で促し、シヴェリとモーラもまたウィンドの方へ近付いていき。
「モーラ、今どの辺りに居るか教えてくれ」
「・・・・・・ドーリアから西方へ1日半。・・・・・・丁度この辺りです」
モーラが指先で示した場所にウィンドが頷いた。それからシヴェリを見遣り。
「シヴェリ。地図の此処の位置を見てくれ。でかい森があるだろう？・・・・此処に皇宮への非常用連絡口がある」
「・・・・・・ずいぶんと大きい森だな」
「馬車が入れないほど木々が入り組んでいる上、底無し沼も至る所にある。現地民も近付かない場所だ。・・・・・・俺なら沼を避けて連絡口へ辿り着ける」
じ、とシヴェリがウィンドを見詰め。ウィンドもまたシヴェリを見詰めた。
「・・・・・・陛下」
ぽつりと零が呟くがシヴェリは零を見ず。
「お前を信じろというのか？」
押し黙ったウィンドに零が眉を寄せて。
「陛下、そんな言い方・・・・・・っ！！」
「いや、レイ。シヴェリの言ってる事は正しい。多くの兵を抱える将にとって一番必要なもの、それは・・・疑うという事だ。綺麗事

だけじゃ何も成功はしない」
どうする、と視線で訴えるウィンドにシヴェリは黙したまま、じっと地図を見下ろしていた。
しかし。
「陛下！敵襲です！！」
馬車の外から聞こえた声に全員がはっと顔を上げ。場は一瞬で緊張に包まれた。

39話　敵襲

兵から受けた報告ではとても巡回の兵団と鉢合わせたというレベルではなかった。
明らかに数が多い。ウィンドを暗殺しようとした兵の存在を思えば、イシュバート軍を潰しに掛かっているのは誰でもわかる。
「状況を纏めろ！接触までどれくらいだっ！！」
動揺を隠し切れない兵等に喝を入れるかの如くサーシェスが声を荒げ、その声に後押しされた兵等が連絡に走り回る。それを眺めつつ、シヴェリがウィンドを見遣った。
「・・・・・・此処で戦力を割く事は出来ん」
「それは承知の上だ。元より大人数での移動では意味が無い。・・・・・・・時間が掛かれば掛かるほど勝ち目が薄くなる戦いだ。・・・・短期決戦が望ましい。その為に必要なもの。それは大将の首・・・・皇の首だ。それはお前もわかっているんだろう？シヴェリ」
腕を組んだままシヴェリは眼を伏せ思案していた。その横顔を零が心配げに見詰める。
「しかし・・・・・・お前が此方側に居る事を把握されているなら、連絡口を使う事も相手側へ知れているのではないか？」
「まあ、普通はそう思うだろうな。だが俺が連絡口を知っているという事は、あの女は知らないだろうさ。あれは俺が1人で調べたものだ。全くの別件だったが皇都周辺を調査する命を受けた事があってな。あの時は無駄なものと思っていたが思わぬ所で役立つものだ」
「・・・・・・・・・・・・・だが何れは気付かれる」
「当然。・・・アリス・マグ・アークストーンは小賢しい女だ。くるくると頭が回る。あの女がその可能性を捨て置くはずがない。だからこそ気付かれる前に、連絡口へ踏み込まねば意味が無いのさ」
時間が無いのだ。少人数での行動、連絡口に辿り着く前に襲撃されれば一たまりもない。

ウィンドの視線にシヴェリが眼を開き。小さく溜息を零した。
「わかった。・・・・・・お前の案に乗ろう。私がお前と共に行く」
「陛下！？」
驚いた声を上げたのはモーラであり。戸惑った表情でウィンドを見遣った。
「陛下、なりません！行くのは私が・・・・・・っ！！」
「いや。モーラはサーシェスと共に敵と応戦しつつ皇都へ向かい前進してくれ。此方側の戦力を疎かにするわけにはいかない」
「ですが・・・・・・っ！！」
「気持ちはありがたいが迷っている暇は無い。・・・モーラ、我等が今身を置いているのは戦場だ。その意味を良く考えろ。・・・お前達は此処を死守しつつ皇都を目指せ。私の替え玉を用意する事も忘れるな。居ない事に気付かれると厄介だ」
「・・・・・・はっ・・・・・・」
深く頭を下げ。それからモーラがウィンドを見遣った。モーラの視線を受け止め、ウィンドが苦笑を浮かべて。
「俺は・・・・・・信じてくれ、とか言えん」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
すい、と視線を外しウィンドが馬の方へ向かいかけ。その背にモーラの声が掛かった。
「陛下を・・・宜しくお願い致します。そして決してご自身を粗末になさらぬよう・・・・・・っ！！」
モーラの言葉にウィンドが驚いた表情を浮かべ、見返した。そのまま無言で頭を下げる。モーラもまたウィンドに向かい頭を下げた。

「陛下、あたしも連れていって下さい」
零は懸命にシヴェリに食い下がっていた。シヴェリも困った表情を浮かべ。どちらも危険なのは違い無い。サーシェス等に預けていくか、それとも連れていくか、どちらが零にとって最善か、と考え込み。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
（大切ならばどうか手元に置いて下さい。２度と手の届かぬ場所で失いたくなければ）
ふと、出立前にサーシェスが言った事を思い出し。シヴェリが零を見遣る。
「陛下・・・・・・」
こく、と息を飲んだ後、零が続け。
「あ、あたしにも不思議な力があるって・・・サーシェスさんが言ってくれました。危険を感知する力があるって・・・、だから、だから。どうかお手伝いさせて下さい！」
「・・・・・・レイ。私はお前に力があろうと無かろうと全力でお前を守る。だが私の力もは万能ではない。私もお前も・・・死ぬかも知れん。それでも・・・共に来ると？」
「・・・・・・陛下と一緒なら何も怖くありません」
苦笑を浮かべた零にシヴェリが眉を寄せ、その身体を強く抱き締めた。
そこにウィンドの声が掛かり。
「おおい、レイも一緒に来るのか？馬はどうするんだ」
慌てて零がシヴェリの腕のなかで顔を上げ。シヴェリがウィンドを見遣る。
「馬は必要ない。お前と私の分だけで充分だ」
「はいはいっと」

そっとシヴェリが零の身体を開放し、そして馬の調達に忙しく動いているウィンドを見遣った。
「・・・・・・これで良かったのかも知れないな」
「え？」
「ウィンドは術から開放された後、ずっと死ぬ事だけを考えていたようだった。今は・・・イシュバートに勝利を与えようと・・・必死になっている。死ぬという事以外に思考を使っている」

「陛下・・・・・・」
「私は、薄情な男だろうか。母を殺した相手を、民を殺した相手を、・・・・・・ウィンドを、もう一度義兄として義弟として、やり直せないか考えている。その思いは果たして・・・皇帝として、ふさわしいと言えるものなのか」
そっと零がシヴェリの手に自分の手を重ね合わせ。少し驚いた表情でシヴェリが零を見下ろした。
「陛下。・・・正直に言えばウィンドの事を良く思っていない兵は多い事でしょう。反感は少なからず出て来るとは思います。ですがあなたのその気持ちは決して間違っていない。だって、陛下とウィンドとパールさまは・・・この世でたった3人の姉弟なんですよ？家族なんですよ？全世界がウィンドを敵に回しても・・・家族だけは味方であっても、良いではありませんか。貴方が赦したいと思うなら、貴方の思うままに。・・・・・・どうかウィンドを、信じてあげて下さい・・・・・・」
「レイ・・・・・・」
馬に跨る形でウィンドがもう1頭を引いて来る。それを見付け、零は走り出した。そのままウィンドに話し掛けている。
そうだ、迷っていても仕方ない。
今は信じるしかない。そしてレイを、ウィンドを、自分が守らねば。
そう思いつつ、シヴェリもまた2人の方へ向かい歩き出した。

角笛が吹かれた。
いよいよ、ロストレヴェスとイシュバート残党軍の全面対決が始まったのだ。

40話　隠密

「隊の殲滅は望まなくて構いません。狙うのは隊を率いている者、そして大将。その2つです」
リヴの言葉に兵が声を上げ。馬上でリヴが小さく笑った。
「恐らく前面に出て来るのはモーラ・ジ・アリエスダヌス。恐らくはもう1人、ダブルリーダーで来るでしょう。最初に潰すのはこの両名・・・・・・。・・・・・・見えて来ました。皆さん、戦闘準備をお願いします」
リヴが見据える先、そこにはイシュバートの馬群が見えた。
「ジオムント・ギル・ロストレヴェス皇帝に勝利を！！」
片手を上げたリヴの声におおおおっ、と力強い声が上がった。

始まった・・・・・・。
馬を操るシヴェリの腕のなか、彼にしがみ付きながら零は戦いの音を聞いていた。
モーラもサーシェスも強いのはわかっている。それでも戦力差のあるこの戦いではどうなるか。
不安げに身をかたくする零に気付き、シヴェリがそれを見下ろした。
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
何も言えない。零が抱いている思いは自分が抱いているものとさほど変わらないだろう。視線を戻せば併走しているウィンドの方へ視線を動かし。
「ウィンド・・・・・・、連絡口まではどれくらい掛かる？」
「直線距離だと1時間弱ほどだが沼を避けての移動だ、軍馬で飛ばしたとしても、2時間の壁を切れるかぎりぎりだな」
「・・・・・・そうか」

ふと零の身体が震え、驚いたように顔を上げた。「レイ？」と訝しげにシヴェリが尋ね。様子にウィンドも気付いたのか零を見遣った。
「どうした？」
「・・・・・・な、何か・・・来ます。何か・・・・・・っ」
2人が驚き、馬を止めた。耳を澄ませるが何も聞こえない。零もまたきょろきょろ視線を彷徨わせるが何も見えない。だが・・・何か来る。
それだけは「わかって」。
「・・・・・・気のせい、じゃないのか？」
ウィンドが一瞬詰まらせた息を吐き出しながらそう言うが、シヴェリは以前サーシェスから聞いていた事を思い出していた。
（・・・・・・レイさまは微弱な探知能力に芽生えつつあるかも知れません。魔力、と呼ぶには弱々しいものではありますが・・・・・・）
（あ、あたしにも不思議な力があるって・・・サーシェスさんが言ってくれました。危険を感知する力があるって・・・）
まさか。
シヴェリが馬を脇道に向けるのを見、ウィンドが「おい」と声を掛けて来る。
「ウィンド、物陰に身を隠せ」
「おい待てよ、時間はあまり・・・・・・」
シヴェリの真面目な表情にウィンドが溜息を零し。わかったよ、とそのままシヴェリと反対側の傾斜となっている大藪に馬ごと入っていった。
サワ・・・・・・。
風が森の木々を揺らす音が響いている。
人の声も、気配も、馬の駆ける音も聞こえない。ちらりとシヴェリが零を見遣るが零は不安げに俯いたままだった。
1分・・・2分。そろそろ5分。矢張り気のせいだったのか？シヴェリが零に声を掛けようとした、その瞬間。

馬の走る音が聞こえ、３人は身をかたくした。
ロストレヴェスの紋を付けた騎馬隊がまるで風のように駆け抜けていき。あっという間にその姿は見えなくなる。暫くそのままかたまっていた３人だったが、先にウィンドが藪から出て来て。ヒュウ、と口笛を鳴らした。
「こいつは・・・驚いたな。近道とはいえこんなところまでルートにしていたとは。・・・・・・レイが気付いてくれなかったらまともにぶつかっていたな。音を聞いてから隠れても見付かっていたかも知れん・・・・・・」
ウィンドとシヴェリが感心したように零を見。恥ずかしそうに零が顔を染めた。
「あ、あたし・・・役立てた、でしょうか・・・・・・」
そんな零にくすりとシヴェリが笑い、零の髪をくしゃりと撫でた。
「助かったよ、ありがとう」
「は、はい・・・・・・っ」
嬉しげな零の横顔を眺めつつ、ウィンドは眼を細めた。自分が「憶えている」零は・・・寝台の上で無理矢理身体を暴かれて泣き叫んでいる姿だった。
（やめて・・・、嫌っ・・・・・・・・！！・・・触らないで、けだもの・・・っ！！）
悲痛な叫びがまるで昨日の事のように思い出され。ぎり、とウィンドが歯を食い縛る。
「・・・・・・行くぞ、これ以上タイムロスを重ねるわけにはいかない」
「ああ」
その後は騎馬隊とぶつかる事も無く、沼地を避け、倒木を飛び越え。目的である連絡口へ。ウィンドが予測していた２時間より大きく短縮された１時間半で辿り着く事が出来。

辺りに兵の姿も、魔力の残留も見られない・・・・・・。馬を下りたウィンドがそっと連絡口へと近付いた。
見た目は折り重なった倒木の下の空洞、にしか見えないが・・・。
そっと、片手を翳す。そして何かに気付けば眉を寄せ、眼を細めた。
「・・・・・予想してた通り、結界が強化されているな」
「恐らくは「向こう側からは簡単に出れる」が「此方側からは入れない」類のものだろう。・・・それでどうする？ウィンド」
シヴェリと零もまた馬を下り、ウィンドの方へと歩いていく。
「当然解除するさ。しなきゃ入れん。俺1人なら無理だが、お前と一緒なら話は別だろう？シヴェリ」
「同感だ。・・・・・レイ、少し後ろへ下がっていてくれ」
結界を解除するのか。2人掛かりで。
「シヴェリ。ちょっとこっちへ来て、これを見てくれ。この魔力の質は・・・・・」
術式がどうとか詠唱形式が、とか、難しい話を何事か相談している2人を見、零は胸が熱くなるのを感じていた。
1年。ほんの1年前には普通に見られていた光景・・・・・。
あの頃のように、戻れるのだろうか。
戻れたら良い。全く同じではなくとも、少しでもあの頃のように・・・・・。
新しいイシュバートで、あの頃のように暮らせられれば。滲む涙を指先で拭い。零はそう願っていた。

一方・・・・・ロストレヴェス皇宮。
ゼオムントと話をしていたアリスは何かに気付いたように顔を上げ。様子にゼオムントがワインから視線を離す。
「・・・・・動いたのか」
「ええ。・・・・・では私もそろそろ行きますわ。客人等をお出

迎えせねば、ね？」
くすりと笑い。アリスが外套を羽織った。それを眺めた後ゼオムントが大窓の傍に立った。
その背をちらりと一瞥した後、アリスは何も言わずに皇間を後にしていき。
ゴゥン、と扉が閉まる音と共にゼオムントが溜息を１つ吐いた。
見上げる先は傍らに掛けられた大きな肖像画。そこに１人の女性が描かれており。まるでゼオムントを見守るかのような優しい微笑を浮かべている。
「来るか・・・・・・」
じっと絵を見詰め、そう短く呟いた後、ゼオムントは何事か思案するように項垂れた。

４１話　地下迷宮

「何か・・・・・・嫌な感じがします。あ、あっちの・・・・あっちの道の方です」
連絡口に入ってから数十分。シヴェリとウィンドは閉口せざるを得ない現実に直面していた。
連絡口を利用する時は大抵、皇宮から急に脱せねばならない時だ。つまりそれは敵襲にあたる。
敵襲を受けた時、如何に入り組んだ道へ敵を誘い、罠に掛けるか。それはとてもとても重要な事だ。それはロストレヴェスでもイシュバートでも変わらない。
連絡口を抜ける、という策を使うにあたって一番の障害は罠の数々だ。ウィンドは「大方」の罠の配置を記憶していたが全てではない。いざという時は身体を張ってでも２人を皇宮へ行かせるつもりだった。

しかし・・・・。

「また分かれ道だ」
「・・・・・・こ、こっちの道です。多分・・・・・・・」
微々たる不思議な力がある、では済まされない。零の罠回避率は連絡口に入ってから１００％を保っていた。
ウィンドがこっちだろう、と思っていたものも、零が選んだ方が合っていた事もあった。つまり、零が居なかったら早々に罠を発動させていた危険性があったわけであり。
「予知魔法とも質が違うな、これは」
呟いたウィンドにシヴェリが苦笑を浮かべた。
「異世界から召喚された・・・副産物なのかも知れないな。だが、レイにばかり頼ってはいられん」

「・・・・・・ああ」
ウィンドが小さく笑い、まだ続く道の先を見た。
まだ接触には遠い、が・・・・・・強い圧迫感と魔力を感じる。この奥で何者かが待ち受けているのは間違い無さそうだ。

「・・・・・・陛下？ウィンド？・・・・・・・きゃっ」
数歩歩いてから零が2人へ振り返り。瞬間、頭上がまるで地震のように揺れた。思わず頭を抱えて小さな悲鳴を上げた零にシヴェリが駆け寄り。
「大丈夫です」そう零が苦笑を浮かべる。そして高い天井を見上げ・・・。
「・・・・・・戦いが此処まで来ているのでしょうか」
「流石に悪路でしかないこの森の上で戦う馬鹿はどっちの隊にも居ないだろうが・・・。さっきの音は恐らくは魔砲の音だな」
「まほう？」
ウィンドの言葉に零が首を傾げた。魔法、だろうか。でも何か違うような・・・。
「魔砲は魔力を詰めて放つ大砲の事だ。物理的な砲弾は使わず、使うのは攻撃性のある魔力。魔力が続く限り無尽蔵に攻撃を放てる兵器だ」
「・・・・・・そんなものが・・・・・・」
さっきの衝動。かなり大きなものだった。サーシェス達は大丈夫だろうか、と零が青ざめ。その顔をウィンドが覗き込んだ。
「びびってる暇はないぞ、レイ。俺達のすべき事は何だ？」
「・・・・・・。一刻も早く皇宮へ辿り着いてゼオムント皇を倒す事・・・・・・」
ぽん、とウィンドの手がレイの頭の上に乗せられる。良し、とウィンドが声を上げ。そのままシヴェリを視線で促す。
そしてウィンドを先頭にする形で3人は再び歩き出した。

どれだけ歩いたか。少しだけ息を弾ませる零を気遣うようにシヴェリが見下ろし。何事か口にしようとする。
次の瞬間、ドン、と鈍く重たい衝動が通路を揺るがせ、零が壁に肩をぶつけた。流石のシヴェリとウィンドも壁や床に手を突き。
「・・・・・・っ、でかいな」
「さっきより大きい・・・・・・。もしかしたら、この通路にも・・・兵が入って来て・・・・・・？」
「結界が解かれている以上可能性は高い、が・・・・・・」
体勢を崩した零に手を貸しながらもシヴェリは通路の奥を見詰めていた。ウィンドも同じだ。そしてウィンドが1歩前に出。
苦笑いを1つする。
「まだ兵の方がかわいいもんだったな。もっと物騒なのが来たぜ？レイ」
零を庇うようにシヴェリが片手で後ろへ押し遣り。そして剣を抜く。

カツリ。

小さくも鋭い靴音を響かせて現れたのは、アリス・マグ・アークストーンその者だ。
真っ直ぐにウィンドを見据え、アリスが溜息を零す。
「・・・・・・お久しぶり、ウィンド。全く・・・・一体何処でこの道の事を知ったのかしら。本当に悪い子ね」
「悪い子？良い子の間違いだろ。俺は勤勉でね？あんたが知らない所でも勉学に明け暮れていたのさ」
ちらりとアリスが零を見。零がシヴェリの後ろで僅かに眉を寄せる。
「・・・・・・本当に・・・馬鹿な子達。黙って隠れ続けていれば、少しは長生き出来たかも知れないのに。此処の事がばれないと思っていたの？結界の術式に感知の術式を組み込んでおいたの。貴方達みたいな小鼠が入り込んだらすぐわかるように、ね」
「そりゃまた高度な技術を・・・・・・」

「術の発展は国の発展よ。まあ、憶えておく必要はないでしょうけれど・・・・・・」
ぶわ、とアリスの周りに熱風が生じ、ウィンドが顔を顰める。
「・・・・・・シヴェリ、来るぜ！」
「・・・・・・レイ、伏せていろっ！！」
ウィンドが叫ぶのと、シヴェリが零に向かって叫ぶのと、アリスが魔力を開放するのと、ほぼ同時だった。
石畳の通路がびりびりと震え、灼熱の熱風が3人の方へと殺到する。
「我願うは風獣の舞！！」
「我願うは水乙女の加護！！」
ウィンドの風魔法が熱風を阻み、シヴェリの水魔法が防壁を張った。
3つの大きな魔力のぶつかりあいに零がぎゅっと眼を閉じ。
びしっ！！と天井に亀裂が生じる音に、はっと顔を上げた。
爆ぜる魔力が大きすぎるのだ。このままでは通路が持たない。
「陛下・・・・・・っ！」
零がシヴェリに声を掛け、シヴェリが小さく頷いた。右手で水魔法を展開しつつ、左手で違う術式を組み替える。
「ウィンド！」
「おう！！」
ウィンドが風魔法を強め。アリスを圧倒するだけではなく天井の崩壊も軋み上げていく。そしてシヴェリは水の防壁の一部を・・・・・・氷に変えた。
びしびしと青く澄んだ魔法の氷が通路を包み込み。がちがちに固める事で通路の崩壊を防ぐ。
「展開術式を中途変換するなんて、小細工が得意のようね。シヴェリ皇帝陛下」
「・・・・・・何らかの切っ掛けで不得意が得意になる事もある」
ひゅっと指先の魔力を吹っ切るようにシヴェリが指を払い。そのままアリスを見据えた。
「でもまだまだ。この程度じゃ・・・・・・、ね？貴方達2人で私

の魔力をぎりぎり抑える事は出来たとしても・・・そこから攻撃に転じる事は出来るのかしら？」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
1人が攻撃に回れば防御が弱くなる。とはいえずっと防御をしていても何も進展はしない。
「それとも、そこの彼女が攻撃役に回る？それなら万が一でも勝機はあるかも・・・知れないわね」
「・・・・・・っ！！」
ちらりとウィンドが零を見。苦笑を浮かべた。
「はん、レイの手なんざ必要ねえよ。お前は俺達だけで充分だ。見下してんなよ、女狐め。・・・皇の傍に居なかったのはある意味好機だ。此処でお前を仕留めればゼオムントを護る奴は居なくなる」
「私を？此処で？仕留める？・・・・・・あはははは！笑わせないでウィンド。・・・戯言も飽きたわ。さあ、いらっしゃい。此処を貴方達の墓場にしてあげる」

42話　朱を統べるもの

ウィンドが零を突き飛ばす。そこに巨大な炎が炸裂し。壁に手を突く形でげほげほと零はむせ返った。
シヴェリが剣を手にアリスへ迫り、その刀身を振り下ろす。硬質な音を響かせてアリスが杖でそれを受け止め。
にぃ、と笑った後、シヴェリの腹を蹴り飛ばす形で間合いを開けた。
「陛下！！」
少し離れた所に着地をするシヴェリだが、零の声に顔を向ける余裕は無い。
アリス・マグ・アークストーン。見た目は華奢な美女であるが、魔力だけじゃない・・・・・体術も覚えがあるのか。
動けない3人の前でアリスがにっこりと笑った。

「さあ、次は受け止められるかしら？」
アリスが杖の先に魔力を集め始め。ウィンドが零を連れてシヴェリの傍へと向かった。
「シヴェリ」
「・・・・・・！？」
「此処は俺に任せて先に行け」
ウィンドの言葉に零もシヴェリも驚いた表情を浮かべた。だがウィンドは険しい表情のまま言葉を続け。
「レイが居ればこの先の罠もかいくぐれるだろう」
「・・・・・私達2人掛かりで梃子摺っているというのに、お前1人で倒せると？」
「そうよ、無茶だわ」
シヴェリと零が口を揃えて言い。ウィンドが鼻を鳴らして笑う。そのままぽん、と零の頭を撫でた。
「俺の得意分野は召喚術だ。この手の術は1人の方が都合が良い。・

・・・・・それに、口論してる余裕は無いみたいだぜ？」
ゴゥ！！と轟音を響かせ炎が爆ぜる。
「行け！！」
ウィンドが吼えるのとシヴェリが零の手を引き走り出すのとほぼ同時だった。
微弱な防壁を張り、炎を突っ切る形でシヴェリとレイが飛び出して来て。アリスの横に着地する。はっとその方を見遣るアリスの注意を引く形でウィンドが剣を振るい。アリスが杖でそれを受け止めた。直撃ではないものの軽度の火傷を負い顔を煤けさせたウィンドがにやりと笑う。そんな2人の後ろをシヴェリと零が駆けていき。ウィンドの剣を受け止めたまま、ふう、とアリスが溜息を吐いた。
「なるほど、ね。・・・・・良い男が台無しよ？ウィンド」
「・・・・・そうか？煮られても焼かれても俺はいつも良い男だぜ？何なら・・・いつかのあの日のように抱いてやろうか」
「そうね・・・・・。あの時は楽しませて貰ったわ。でも今はそういう楽しみ方をしたい気分じゃないの」
杖を振るわれ、ウィンドが間合いを開けた。得体の知れないものを感じ、ぞくりと肌が粟立ち。
「じゃあ今はどんな気分なんだよ？」
「・・・・・知りたい？」
「正直・・・あんま知りたいもんじゃねえけどな。・・・・・よっ！！」
剣を持っていない方の手に魔力を集めると風の真空破を放ち。アリスが苦笑のまま防壁を張った。しかしその真空破はアリスではなく壁に当たり。がらがらと通路が崩れていく。
分断された。アリスはちらりと瓦礫に埋まった場所を見つめた後、ウィンドを見返した。
「・・・さて、ショータイムだ。ロストレヴェスは召喚術より精霊術の方が長けているだろう？・・・好きなだけ見せてやるよ。イシュバートの召喚術をな」

ぶわっとウィンドの周囲の熱量が異常に増し。アリスがはっとした。
「ま、待ちなさい！こんな狭いところでそんな術を使ったら・・・・・・っ」
「そうだな。召喚術と精霊術では威力は段違い。膨大な熱量には防壁なんざ意味は無い。それに・・・・・大き過ぎる炎は空気を蝕む」
にやりとウィンドが笑い。アリスが喉を震わせた。
「ウィンド、貴方・・・」
「・・・・・・白の果て、金の果てに眠りし朱のものよ。我が名の下、来たれり。其の紅蓮の腕(かいな)で全てを包み込め」
「やめなさい、わかっているの？ウィンド！」
「・・・・・・鳳炎帝、フィリシサス！！」
ウィンドが放った炎が燃え盛る不死鳥の姿を為し。そのまま通路一杯に翼を広げた。
アリスの叫びも、ウィンドの笑み顔も、全てを朱金に飲み込んで。
そして。

ドゥ！！！
凄まじい音と共に衝撃波が襲い。走っていた零はバランスを崩してその場に膝を突いた。はっとしてシヴェリも立ち止まる。
今の音は、ウィンド達の居た方だ。暗い通路の奥では音が幾重にも重なり合い、未だ轟音を響かせている。
魔法の炸裂音というより、これは・・・・・・・爆発？
「これは・・・・・・」
戻り掛けるシヴェリの衣を零が掴んだ。はっと、シヴェリが零を見遣り。
「・・・・・・ウィンドが・・・・・・・っ！」
「待って、陛下・・・っ。ううん、シヴェリ。今戻ってどうするの

？どうして・・・どうしてウィンドがあの場に残ったのか・・・・・・っ」
「あの音は尋常じゃないっ！！」
「シヴェリ・・・っ」
零が立ち上がり、ぐいっとシヴェリの衣を掴んだまま唇を噛み締めた。
「ウィンドが大変な事になってるだろう事はあたしだってわかってる！でも思い出して！貴方は皇帝として、今何をすべきなの？ウィンドが・・・ううん、ウィンドだけじゃない、モーラさんやサーシェスさんも、どんな思いでこの道を作ってくれたか・・・。貴方をこの先へ進ませる為に。イシュバートに勝利を齎す為に。そうでしょう、シヴェリ・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「戻っては駄目。今は、1分1秒でも時間を無駄に出来ないの。・・・・・前を向いて。前だけを、見て・・・・・・。お願い、シヴェリ・・・・・・」
ぽたぽたと涙を零して項垂れる零にシヴェリが眉を下げ。ぎりり、と握り拳に力を込めた。食い込んだ爪が手の平を傷付け。一筋の血がその場に落ちる。
「わかった・・・・・・、レイ。行こう、全てに決着を付ける為に。それが皇帝としての私の・・・役割だ」
シヴェリの言葉に零が泣きながら頷いた。
ウィンド・・・どうか、無事でいて・・・・・・。

43話　肖像画

整えられた通路を踏み締めれば、思い出すのは嫌な思い出ばかり。
またこの地に、ロストレヴェスに、戻って来る事になるとは。
長い長い連絡口を抜けたシヴェリと零が出た場所は皇宮の中枢に近い大聖堂の裏側だった。ほとんどの兵はイシュバートの残党軍との交戦に駆り出されているのかその姿はほとんどなく。
それでも若干数残されている兵達の視線をかいくぐる形で2人は奥を目指していた。
「・・・・・何処に皇が居るかなんて、わかるんですか？」
ひそ、と尋ねる零にシヴェリが顔を向ける。
「幼い頃だが、此処には父上と共に来た事がある。うろ覚えは否めないが、恐らく・・・この先の」
「！！シヴェリ・・・っ」
零がはっとしつつ声を上げ。シヴェリが反射的に剣を抜いた。そこには1人の兵が立っており。
「イシュバート皇帝シヴェリ陛下でございますね。お待ちしておりました。・・・ゼオムント陛下がお会いになられます、どうぞ此方へ」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
あっけに取られている2人の返答を待たずに兵が歩き始める。
これは罠か。
・・・・・・絶対的勝利を確信した上で誘っているのか。
それとも。
「・・・・・・行くぞ、レイ」
「シヴェリ・・・・・・」
ごく、と息を飲み。零もシヴェリに続いて歩き始めた。
連れて行かれた先は皇間であり。玉座にゼオムントは座っていた。

シヴェリと零の姿を見付ければ重い甲冑を軋ませて立ち上がり。
「・・・・・・良く来た。イシュバートの亡霊よ。その怨嗟の声、今日この場で全て断ち切ってくれる」
「・・・・・・・・・・・・・・」
ちゃり、とシヴェリが剣を構え。零が少し下がった。
「・・・あの子供が此処まで成長し、戦火を生き延び、わしに剣を向けて来よる。・・・時代の流れだな。シヴェリよ」
「・・・・・・時代の、国の流れだ。ゼオムント皇。貴方を打ち倒し、私は私の国を取り戻す！！」
ギィン！！
激しく剣と剣がぶつかりあった。ぎりぎりと鍔迫り合いとなれば体格差で若干シヴェリが押され。それでも斬り返す形で間合いを開ける。
そこにゼオムントが迫り、再び剣を打ち合う・・・・・・。まさに剣技の押収。どちらも互角に近い剣の腕だった。
「・・・・・・我等は肉食獣よ。互いに互いを喰い合わねば生きられぬ。創始以来、そうしてどの国も成長して来た。これまでも、これからも」
「血塗られた定め。これまでのものは変えられない。だが、これからのものは幾らでも変えられるだろう」
「・・・・・・変えられるのか？若き獅子よ。・・・・・・ふん！！」
ゼオムントの鋭く力強い横薙ぎが剣ごとシヴェリを床に叩きつけ。追撃にシヴェリが跳ね上がり、左手に集めた炎のかたまりをゼオムントに投げ掛けた。それをゼオムントが剣に集めた冷気で相殺する。
「変えられる、じゃない。変えるのだ。・・・・・・それこそ皇としての私の務めだ！！」
一進一退。なかなか勝負がつかない。こうなれば先に隙を見せた方が負ける。
零はオロオロしつつも遠巻きにそれを眺めていた。

どうすれば。このままではシヴェリが・・・・・・・。
「・・・・・・・・・・・・・？」
ふと、頭上に微かな違和を感じ、零は顔を上げた。自分が立っている、すぐ真横の壁に大きな絵が掛けられている事に気付き。
「え？」
綺麗な女性と、そして女性が抱いた愛らしい赤ん坊の肖像画。そして零の眼が大きく見開かれた。
「なっ・・・・・・・。これって・・・・・・・！！」
皇間に反響した零の声に2人がはっとした。一瞬止まった剣撃。先に動けたのはシヴェリであり。そのまま甲冑の隙間からゼオムントの腹部に剣を突き込んだ。
「がっ・・・・・・・！！」
膝を突いて剣を取り落とすゼオムントに零がその方を見る。
荒い呼吸を繰り返しつつシヴェリがゼオムントから間合いを開け、そして零を見遣り。
「・・・・・・・・・・・・・シヴェリ・・・・・・・」
零の声は震えていた。肖像画に描かれている女性と赤ん坊。そして赤ん坊の手にあるのは・・・赤い「自動車」の玩具だ。
「・・・・・・その絵が、どうかしたのか？」
零の動揺の意味がわからずシヴェリが問い掛け。だが零が答える前にその場に崩れたゼオムントが低く喉を震わせ、笑った。
「矢張り、お前の国のものだったか」
「・・・・・・・！？」
「・・・・・・もしかして。もしかしてこの絵に描かれてる女の人も・・・違う世界、から・・・・・・？」
「・・・・・・・・・・・・。その女はまだ幼少の頃・・・突然この国に現れた。それを見付け助けたのが先代の皇。・・・・・・娘はやがて皇に愛され、皇妃にまで上り詰めた」
ごふっ、と血を吐いたゼオムントに咄嗟に零が駆け寄り掛け。だがその足が止まる。

「・・・・・・・・・・・・まさか、この赤ちゃんは・・・」

「ふ、ふ。母が生まれた世界とお前の生まれた世界に繋がりがあるか・・・わしは確かめたかった。今となってはもう意味を成さぬ事ではあるがな・・・・・・。よもや小娘の叫び1つが致命傷となるとは・・・これも運の尽きか」

シヴェリがそっとゼオムントの傍にしゃがみ込み。その顔を見下ろす。口と腹部から相当量の出血をしつつもゼオムントがにやりと笑い。

「見事だ、シヴェリ・クイ・イシュバート皇帝。・・・冥界よりお前の決意、見届けさせて貰うぞ。血塗られた定め、何処まで変えられるか・・・とな・・・・・・」

動かなくなったゼオムントの前で眼を伏せ。その手を握る。

「・・・・・ゼオムント皇が、あたしの世界の人とのハーフだったなんて・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・」

恐らくゼオムントの母であった女性もまた元の世界に戻れる日が来るのを心待ちにしていたのだろう。

何年も、何十年も、ずっと。

彼はそんな母の姿を見て来た。・・・・・・だからこそ。

・・・・・・・・・・だからこそ・・・・・・・・・・。

ゴォン・・・・!!!

突然轟音が響き渡り、皇間の巨大な扉に亀裂が入る。

はっとしてシヴェリが立ち上がり、少し離れた零の所まで駆け。

「レイ!」

「シヴェリ・・・っ。・・・・・・!!あ、あれ・・・!!」

兵の突入を覚悟して緊張した2人であったが、現れた軍勢に零の表情が綻び。

「ご無事ですか！陛下！！」
そこには傷だらけではあったものの元気なモーラとサーシェス、そして仲間の兵達の姿があった・・・・・。

４４話　１つの終わり１つの始まり

「サーシェスさん、モーラさん・・・・・・・っ！！」
「レイさま、ご無事で！」
此方の無事を確認し、サーシェスが安堵の息を吐き出した。モーラが倒れているゼオムントに気付き。
「陛下・・・・・・」
言おうとした事を察したか、シヴェリが小さく頷き。黙祷を捧げるようにモーラが眼を閉じる。
「ゼオムント皇を倒しましたか。・・・お見事です。エルリス皇妃さまもさぞお喜びになられる事でしょう・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・？」
ふと、何かに気付いたようにサーシェスが辺りを見回し。
「そういえば・・・ウィンドさまは・・・・・・」
その言葉にシヴェリと零の表情が凍て付いた。返答出来ないままシヴェリが考え込む仕草を見せ、零が涙ぐむ。
「・・・・・・連絡口でアリス・マグ・アークストーンと交戦した。ウィンドは私達を行かせる為に１人残ったが・・・・・・」
「ウィンドさまが・・・・・・」
「だが。・・・・・・だが、死んだと決まったわけじゃない。サーシェス、疲れ切っているところすまないが急ぎ捜索隊を組んで連絡口へ向かってくれないか。もしかしたら・・・・・・」
「・・・・・・了解致しました。陛下はバルコニーへお向かい下さい。皆、陛下の無事な姿を心待ちにしております」
シヴェリが頷き、サーシェスが苦笑を浮かべた。「きっと大丈夫ですよ」そう元気付けて。そのまま兵が待つ方へと駆けて行った。
未だ佇んだまま動けないシヴェリの片手をそっと零が包み込み。シヴェリがそれを見下ろす。
そしてシヴェリの前でモーラが頭を下げ。

「では陛下」
「ああ・・・・・・」
「胸をお張り下さい。今、ロストレヴェスの歴史に幕が下ろされ、イシュバートの新しい歴史が始まるのですから」
ふと零が気付いたように顔を上げ。
「モーラさん。・・・・・・ロストレヴェスの民達はどうなるんですか？」
イシュバートが滅ぼされた時、街も燃やされた話は聞いていた。まさか、とは思ったが。
零の心配にモーラが苦笑を浮かべ。
「街や民には手を出してはおりません。元々圧政に不満を抱いていた者も多い。家を失い新たな居住が必要であるならイシュバート側で受け入れても良いでしょうし、他に故郷がある者は自然とこの地を離れていく事でしょう」
「・・・・・・良かった」
シヴェリが深く息を吸い、そして吐き出した。
「バルコニーへ向かう。レイ、共に来てくれ。モーラは・・・ゼオムント皇の弔いを頼む。敵大将といえど互いに強い信念を抱き剣を交えた相手だ。・・・・・・丁重にな」
「畏まりました、此方の事はお任せ下さい。バルコニーは皇間を出、右の通路の奥にある大扉から出られます」
モーラと数人の兵がゼオムント皇の遺体を運んでいくのを横目で見遣りつつ。零はシヴェリと共にバルコニーを目指した。

バルコニーの扉を開けた零の視線に飛び込んで来たのは既に待機している数人の兵と、燃え盛るロストレヴェス紋の国旗。そして、この位置からは見えないがバルコニーの下で大きな歓声が響いていた。シヴェリがバルコニーに現れると一瞬その声が小さくなり、そして

先ほどよりも大きな声となる。
促され零もシヴェリの横に並び。す、とシヴェリが片手を上げた。
「レイさま、これを・・・・・・」
兵が差し出したイシュバートの国旗。両手で持つ分にはちょっと重たくてふらふらするけれど、兵が傍で支えてくれて。
イシュバートの旗を持ったまま、零もまた笑顔で片手を上げた。
ますます、歓声が大きくなる。
「イシュバート万歳！！シヴェリ皇帝陛下！万歳！！」
たくさんの笑顔に零は涙ぐみ。シヴェリを見遣った。シヴェリもまた笑み返し、そっと零の肩を抱き寄せる。

「陛下！！」
ふと1階下にある小振りのバルコニーから声が聞こえ。シヴェリと零が視線を降ろした。そこにはサーシェスに肩を担がれる形でウィンドが立っており。「よお」と一声上げながら苦笑を浮かべた。
「ウィンド！！」
「良かった・・・・・・っ、ウィンド・・・・・・・」
「・・・ったく、また死に損なった・・・・・・。ああ、くそ。めでたいってのに、声が傷に響くっての・・・・・・」
ひどい火傷を負っていたが致命傷ではないようだ。爆発直後に吹き飛んだ瓦礫に埋もれたおかげで奇跡的に灼熱から多少なりとも逃れられたのだ。
「サーシェス、医療魔術師を呼んですぐに治療を」
「既に呼んであります。さ、ウィンドさま。此方へ」
あだだだだ。情けない悲鳴を上げながら宮内へ引っ込んでいく2人を見送った後、シヴェリと零は顔を見合わせて笑みを深めた。
「本当に良かった・・・・・・」
「ああ、本当に・・・・・・」
そっと顎を取られ、零は驚いた表情を浮かべた。眼の前には何十何百の仲間達がいるというのに。

「待って、陛下・・・・・・っ！！」
「待たない」
わあっ！！と歓声が更に大きくなった。
歓喜に包まれる兵達の前で、シヴェリは零に口付けた。

長いようで短い戦いだった。
今、イシュバートの全ての悲しみが昇華されたのだ。
全てが、終わったのだ。
シヴェリに抱き締められたまま、眼下の数多の喜びの笑顔を見詰め。
零は両眼から涙を零した。
全て・・・・・終わったのだ。これで・・・・・。

45話　分かれ道

程無く、シヴェリ一行はモーラを始めとした一部の兵を残しロストレヴェスを後にした。
（皇を討ち取ったからとて、それで戦争が全て終わったわけではないのですよ）
そう別れ際にモーラが苦笑を浮かべながら言った。
それは先立ってモーラが話した、家や職を失ったロストレヴェスの民等との今後を協議する為のものなのだろう。
勝者が敗者に対する義務のようなものだ、とも。
リュートまでの道程、行軍が近くを通り掛かると知れば近隣の街村から人が集まり、シヴェリ達を祝福した。
力こそ全て・・・・・・如何に多くの民がロストレヴェスの圧政に嘆いていたかの象徴でもあった。

そして。

「陛下ーっ、レイーっ！！」
リュートの大門をくぐった先頭馬車に届いた鈴の鳴るような声に零が幌を開け。バルコニーから身を乗り出して手を振っているリーゼロッテに手を振った。
「リーゼロッテさまっ」
「お帰りなさい、お帰りなさい・・・・・・っ！！」
笑っているリーゼロッテの眼にも涙が浮かんでいた。シヴェリや零。大好きな人達が無事に帰って来てくれた事。そして母の、兄の、セイルーンの民の無念を晴らしてくれた事に幼い身ながら深い喜びを感じていたのだ。
「リーゼロッテ、あんまり身を乗り出すと危ないよ」
シヴェリも顔を出し、そうリーゼロッテに声を掛けた。大きく両手

で手を振り返し、リーゼロッテが宮内へ戻っていく。恐らく、すぐに階下から姿を見せるのだろう。
ロストレヴェスを発ってから車酔いが続いていた零もリーゼロッテの笑顔で元気が出たように。微笑ましくシヴェリと零は笑いあった。

「ウィンドさま！！」
「ウィンドさま、ご無事で・・・っ！！」
ウィンドが乗った馬車が到着したなら、リュートの兵等が驚いた声を上げた。騒ぎを聞き付け、ロマもまたウィンドの所へと駆け付ける。
「陛下、レイさま・・・・・・っ！！」
馬車から降り立った2人の所へマリエ、ルト、ラシェが駆け寄り。ルトがその場に泣き崩れた。慌てて零がその肩に手を添え。ぎゅっとその身体を抱き締めた。
「ルト、ルト、泣かないで。・・・心配掛けさせてごめんなさい。・・・ただいま」
「う、う・・・・・・。レイさま・・・レイさま、お帰り、なさいませ・・・・・・っ。わあ、わあああああん」
ルトの号泣にマリエが苦笑し。シヴェリにそっと近付いた。そのまま礼を1つし。
「お帰りなさいませ、陛下。パールさまもお出迎えを希望なさったのですが・・・」
「・・・・・・良くないのか？」
ええ、とマリエが表情を曇らせた。
そこにパンパンとロマが手を打ち鳴らす音が聞こえ、全員がその方を見た。
「皆の者、宴だ！宴の準備を急げ！！街の者にも伝令を回し、国を挙げての大祝宴を開こうぞ！！」
わーい、と両手を上げて喜ぶリーゼロッテに零が苦笑を浮かべた。

その後、特にシヴェリは眼が回るような忙しさだった。
伝書精霊によるモーラとの通信、ロマ、リーゼロッテ、セイルーン生存兵代表者との会議。主にセイルーンの今後に関してのものではあるが、セイルーンで生き残った民はほんの一握りしかいない事と唯一皇位を継ぐ資格があるリーゼロッテが未だ幼い現状を踏まえ、新生イシュバートとの合併を話し合った。
そうしたいと願い出たのはリーゼロッテと生存兵達だ。シヴェリはそれを快く受け入れ、リーゼロッテ並び、彼女が未来産むであろう子に新生イシュバートの皇位継承権を与える条件で話は纏まった。

会議室から出て来たシヴェリを零が出迎え。そっと微笑む。
「お疲れさまでした、陛下」
待っていた零はマリエ達にすっかり着替えさせられ、白い絹のドレスと銀装飾を纏っていた。その美しさにシヴェリが眼を瞠り。はっとして零が顔を赤らめる。
「や、やっぱり変ですか。お祝いの席だから華やかに・・・って、マリエが・・・・・・」
「いや。あんまり綺麗で驚いただけだよ」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
恥ずかしそうに零が俯き。その手をシヴェリが取る。
「あたしは・・・・・・あたしの、務めをようやく果たせた、と思っています」
「レイ？」
「あの日・・・最期の日に。エルリス皇妃さまに誓ったんです。強くなって、陛下を、そしてウィンドを支えると」
「・・・・・・そうか」
「イシュバートは・・・取り戻した。後は陛下が・・・・・・」
「うん？」
「陛下が新しい皇妃さまとご成婚をして素敵な国を築かれるのを、

見届けたく思います」
「！！」
ギ、と大間の扉が開けられ、ロマを始めとした全員がシヴェリと零の登場に歓声を上げた。
「シヴェリ！！」
ロマに呼ばれ、はっとシヴェリが顔を上げた。その手からするりと零の手がすり抜け。バルコニーへと消えていく。
「・・・・・・っ、レ・・・・」
「何をしているシヴェリ。お前が主役だ。さあ、壇上へ。皆へ祝福を与えてくれ」
ご機嫌なロマにシヴェリは苦笑いしか浮かべられず。そのまま引っ張られるように歩いていった。

自分はただの側室。
国を取り戻した以上、これ以上陛下の愛を独り占めにするわけにいかない。
これからのイシュバートをきちんとしたものにする為には、陛下は他国から姫を娶らねばならない。
それが皇帝というものだ。

今までは傍に寄り添い、あの人の心を護る事が役目だった。だけど、これからは。
・・・・・・見守る事が、自分の役目だ。

夜風に当たりながら零は1人考えていた。

「レイさま？」
遠目、シヴェリから離れた事で違和を感じたのか。ワインボトルの入った籠を手にしたままのマリエがその背に声を掛けた。

振り返った零は、月光を浴びている所為もあって一層青白い顔をしており。
心配げにマリエが近付いていく。
「どうなさったのです？レイさま・・・・・・」
「・・・・・・あ、ごめんなさい。ちょっと気分が良くなくて」
「・・・・・・・・・・・・・」
「ねえ、マリエ」
マリエが緩く首を傾げ、零がその方へと向き直った。
「本当なら、あたしは「レイさま」なんて呼ばれるような存在じゃないんだよね」
「・・・・・・レイさま？」
「お姫さまごっこはもう・・・終わりにしたいな・・・・・・」
涙を滲ませるままに呟き、少しふらついた零の姿に慌ててマリエが手を差し伸べ。
「大丈夫。少し人に酔っただけだから。・・・・・・あ」
挨拶を終えたシヴェリが此方へ歩いて来るのが見え、はっとした零がマリエの手を離させた。
そのまま逃げるようにもう一方の扉から出ていき。そこにシヴェリが到着する。
「何があった？」
「いえ・・・・・・」
ふとマリエが何か思い当たるように口元に手を当て。
「陛下、少々・・・お伺いして宜しいですか？」
「・・・・・・？」
「レイさま、道中に貧血を起こしたり・・・食欲が落ちている、ような事は・・・・・・」
「・・・・・・矢張り何処か悪いのか？」
矢張り。その言葉にマリエが眉を寄せた。そしてシヴェリに頭を下げ。
「確証が無い事なので、今は何も言えません。・・・・・・失礼致

します」
少し苛立った声でそう言い残し、足早にマリエは零の後を追っていく。1人残されたシヴェリはわけがわからないままその場に立ち尽くし。
すぐにまた国賓等に引っ張られる形で宴の席へと戻っていった・・・・・・。

46話　求婚

「レイさま、レイさま。お待ち下さい」
部屋へ戻ろうとする零の背にマリエの声が掛かり。涙を指先で拭いながら零が振り返った。
侍女長ともあろうものが廊下を走って来たのだろう、息を弾ませながら速度を緩め、そして。
「レイさま・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・もしも、です。間違っていましたらどうかお赦し下さいませ。レイさまはもしかして・・・陛下の御子を・・・・・・？」
尋ねるマリエに零が表情を曇らせた。そっと冷えた肌に、肩に、マリエが手を掛ける。
「・・・・・・そうなのですね？何て無茶を・・・、そんな身体で従軍するなんて・・・・・・っ」
「此処には産婦人科も無いし検査薬も無いし・・・・・・確証は無いけれど。それにそうなのかな、って思ったのは戦いが終わった帰り道、だったから・・・・・・」
どちらの単語もアーシアス生まれアーシアス育ちのマリエにはわからないものだ。だが、子を身篭った事を確認するものだという事はすぐにわかり。
「陛下には・・・・・・」
「・・・・・・陛下にはお伝えしないで。ううん・・・・・・出来れば。マリエだけの内密にしてくれると嬉しい」
「レイさま？」
「・・・・・・陛下はこの後、イシュバートの為に他国の姫を娶らねばならない身。あたしに子が出来たとなったら陛下の婚儀の支障になるのは・・・政治の事に詳しくないあたしにだって、わかる話

だよ」
「・・・・・・ですが・・・・・・」
お2人はこんなにも愛し合われているのに。視線でそう訴えるマリエに零が苦笑を浮かべた。
「陛下の事は、愛してる。でも忘れないでマリエ。あたしは・・・本来なら、仮住まいを与えて貰う為だけに地位を与えて貰ったただの名前だけの側室。保護者と被保護者の関係でしかないの」
「・・・・・・・・・・・・」
「でも、良かった。・・・・・・マリエに後々頼みたい事があったから」
え？と零の言葉にマリエが顔を上げ。
「お腹が目立たないうちに、国を離れたいの。本当ならイシュバートが元の形を取り戻すまで、とは思っていたけれど。・・・時間は無さそうだから」
「レイさま・・・・・・」

「・・・・・そんな事を私が赦すと思っているのか」
聞こえた声にはっと2人が顔を上げ。そこには怒りを孕んだシヴェリの姿があった。「陛下・・・」と呟く零の手を乱暴に握って、歩き出す。
「陛下！・・・・・陛下、どうかお怒りをお鎮め下さいっ、レイさまは陛下の為を思って・・・・・・っ！！」
その後ろをマリエが慌てて追い掛け。シヴェリは空き部屋の一室に零と共に踏み込んだ。マリエも戸口に立ったまま不安げに2人を見詰める。
肩で息をしつつもシヴェリは零を置かれている寝台に座らせ。
「・・・・・身体の具合はどうなんだ。ずっと隠して、無理をしていたのか」
「道中・・・無理をしている自覚は・・・ありませんでした。・・・・・・ご迷惑をお掛けしました」

はあ、とシヴェリが零の膝に額を押し当てるように深く息を吐き。眼を閉じた。
「・・・・・・だから危ないんじゃないか」
「・・・・・・・・・・・・ごめんなさい」
「マリエが意味深な事を言うから。もしや、と思って伯父皇の杯を断ってまで追い掛けて来たのだぞ。・・・・・・まさか、子が、なんて。・・・後で医師を呼んで診させる。良いな？レイ」
有無を言わさないシヴェリの言葉に零が「でも・・・」と言葉を濁した。言いたい事はわかり、シヴェリは零の顔を見詰めた。
「・・・・・・お前の身体が一番に心配ではあるが、それでも。・・・子が出来たと知れて嬉しかった」
「だけど、あたしは・・・・・・っ」
「我が母エルリスも後宮の出だ。側室が皇妃になる事はさほど珍しい事ではない。・・・・・・それに、レイ。私はお前以外のものを妻と呼びたくはない。今回の戦いで多くの兵も、民も、お前の事を支持している。正妃の位置に立つ事を認められるのは、お前だけだ」
マリエが涙ぐみながらそっとその場を離れ。静かに扉を閉める。
ポロ、と零の眼からも涙が零れた。
「・・・・・・っ、あ・・・たし・・・・・・。陛下のお嫁さんになっても良いの・・・・・・？」
そこには仮面の剥がれた17歳の少女の泣き顔があり。苦笑を浮かべた後にシヴェリはそっと零の頭を抱き寄せた。その胸に縋りながら零が泣き出し。
「当たり前だ。信じられないなら何度でも言ってやる。私の妻はお前だけだ。後宮も迎えるつもりはない。・・・・・・愛している、レイ。だからもう、何処かへ行く等・・・言わないでくれ」
そっと重ねられる口付け。眼を閉じ、零は涙を流した。
その唇が離れれば、間近でシヴェリが笑む。
「私と、結婚してくれ」
「・・・・・・・・・・・・はい」

泣き顔ながらも、零は満面の笑顔でそう応えた。
「とはいえ・・・・・。正式な発表や挙式はイシュバートが復興してからになるか。いや、それでは遅い。イシュバート復興の際には神殿を最初に修復させよう。それなら出産前に間に合うはずだ。ああ、伯父皇にも知らせ・・・るのは後々の方が良いな。今話すと興奮されて宴が数ヶ月続きかねん。胎の子というものは１０月１０日で出て来てしまうのだろう？・・・・・だが義姉上には先に・・・・・」
慌しく算段し始めるシヴェリにくすりと笑い。とりあえずはいつまでも皇帝たるもの宴の席から離れてはならないから一緒に戻りましょうと声を掛けた。

・・・・・その時。
扉が叩かれ、扉越しにマリエの声が聞こえて来た。
「陛下、レイさま、お話中の所申し訳ありませんっ」
「マリエ？」
「パールさまのご容態が・・・・・っ」
震えを帯びたマリエの言葉にシヴェリと零が顔を見合わせた。

47話　誰が為に

シヴェリと零がパールの部屋に入ると内部は静まり返っていた。
寝台の上でかたく眼を閉ざしたまま荒く呼吸をしているパールと、
その手を握り締めているサーシェスの姿。
立ち尽くすロマの傍らには医師が在り、深刻な表情を浮かべ、頭を下げ。
「・・・・・・サーシェス」
そっとシヴェリが声を掛ける。サーシェスが少し疲れた表情でシヴェリを見上げ。正気付いたようにはっと立ち上がろうとする。
「ああ、そのままで良い。・・・義姉上の容態は・・・・・・」
無言のままサーシェスが俯き。代わりに、と医師が口を開き。
「極めて危険な状態です」
「・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・ウィンドは・・・・・・・？」
小さな声で零が呟き。サーシェスが息を吐き出した後、ようやく口を開いた。
「宴の席にいらっしゃらなかったので・・・宮の者に探させております。恐らく、居辛かっただけとは思いますが・・・・・・」
逃げ出したりはしないだろう。ウィンドはそんな事を望んではいない。
恐らくは人気の少ない場所で時間を潰しているのだろうが・・・・・・唯一の血縁者である姉が危篤状態にあるなら、何としても間に合わせたい。
「・・・・・・あ、あたしもウィンドを探しに行きます」
そう零が口を開いた瞬間。荒々しく部屋の扉が開かれた。
全員がはっとその方を見ると、息を弾ませたウィンドが立っており。
苦しげに眠り続けるパールの姿を見止め、眼を細めた。
「・・・・・・ウィンド」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・姉上」
ぽつりと呟き。ウィンドはパールに近付いた。サーシェスが立ち上がり席を空け。ウィンドがそこに座り、パールの手を握り締める。
「・・・・・・・っ。・・・・・・・は」
一瞬苦しげな表情を浮かべた後にウィンドが笑い出し、そのまま言葉を続ける。
「あーあ、ったく・・・ただでさえ痩せてるのにこんなに痩せちまって。・・・・・・がらがらじゃねえか」
苦労を掛けた。
その元凶は自分だ。
ぎり、と歯を食い縛ったままウィンドが俯き。肩を震わせる。ウィンドの肩に手を添えようとしたシヴェリだったが、ウィンドの内に尋常ではない魔力の高まりを感じ、その手を止めた。
魔力を感じる事が出来るアーシアスの民・・・・・・シヴェリ、サーシェス、ロマ、そして医師等がはっとし。
「え？」
感じる事が出来ない零が戸惑った声を上げた。
「何を・・・している？ウィンド・・・・・・」
お前。そうシヴェリがウィンドの肩を掴もうとした瞬間、バチッという大きな音と衝撃が走り。シヴェリが半歩下がった。
ゆらり、と不可侵の結界が展開されていくのが見え。シヴェリが眼を瞠る。
「何をしていると言っている！！」
「なあ、シヴェリ。俺ずっと考えていたんだ。・・・俺は多くの生命を不幸へ追い込み、苦しみを与え、死の淵へ叩き込んだ。そんな俺がどんな形で誰に償えるのだろうと、考えていた。・・・・・・ロストレヴェスの刺客に討たれた時も死に切れず、アリスと刺し違えた時も死に切れず、それでも俺が生きているという事は、アーシアスの神が未だ何かすべき事があると伝えているのではないか、ってな。・・・・・・ずっと。ずっと、考えていた。俺に残された役

目。それが何なのか、と」
「・・・・・・ウィンド、お前、・・・・・・まさか」
「陛下？」
「・・・・・・この術は同じ血を持つ者にしか使えない」
「ウィンド！！」
ぽつりと呟いたウィンドにシヴェリが結界に挑み掛かる。強く弾かれたシヴェリを零が受け止め。
「陛下、どういう事です！？」
「・・・・・・ウィンドは死ぬつもりだ」
シヴェリの言葉に全員の表情がかたまった。
その術を、シヴェリは知っていた。自らの生命を対象に与える術。生きてさえいれば外傷内傷がひどかろうが不治の病に感染っていようが回復出来る最高最強の回復術。ただし代償として術者の生命全てを与える為に術者は死ぬ。
その為、イシュバートのみならず全ての国で禁忌術として認定されているのだ。あのロストレヴェスでさえ使うのは禁じられていたというのに。
「やめろ、ウィンド！！」
「勉強はしとくもんだぜ。半ば自棄に片っ端から術を契約しまくったのが・・・今更になって活きるなんてな」
「そんな事をしてパールさまが喜ぶと思うの！？・・・・・・貴方の生命で助かって、パールさまが喜ぶと・・・・・・。生きて償うって、誓ったじゃないっ！！」
零の言葉にぴくりとウィンドの眉が上がった。
「・・・・・・喜ばねえだろうなあ。だが、俺が生きているよりも姉上が生きている方が・・・・・・誰にとっても良い話だ。それに。・・・・・・俺はたった1人の姉まで不幸にしちまった。せめて、さ。姉上だけは・・・幸せになって貰いたいんだよ。・・・・・・結果的に憎まれる事になってもな」
光が強くなり、「やめてーっ！！」と、悲痛な声で零が叫んだ。

ウィンドが構成式の呪を唱え始め、シヴェリが舌打ちした後に結界解除の呪を唱えた。
本来なら数分掛かる呪を一息で完成させ、結界が消え失せるのと同時にウィンドに掴み掛かり。
「!?シヴェ・・・」
「陛下!!」
シヴェリはウィンドの呪を妨げる事はしなかった。ウィンドの声に自分の声を重ねる形で・・・・違う形で呪を完成させ。
部屋が、白に染まった。

瞬間、零は見た。
強すぎる光で何も見えないはずなのだが、光のなかから大きな鳥が浮かび上がり、パールの内へ消えていったのを。

あれは何?
そう思った瞬間、光は唐突に消え。零は視界を慣らす為に両眼をぱちぱち、数回瞬いた。
気付けばサーシェスもロマも医師も・・・・・・倒れている。そしてシヴェリとウィンドも・・・・・・。
「!!・・・・・・陛下、ウィンド!!」
零の言葉にサーシェス、ロマ、医師が眼を覚まし。零はシヴェリを抱き起こした。
頬をぺちぺちと叩いてみる。
「・・・・・・・・・・・・・・あ・・・・・・・・」
あたたかい。生きてる。見ればウィンドもよろよろと起き上がろうとしていた。・・・2人共、生きてる。
(ウィンドは死ぬつもりだ)
そうシヴェリは言った。だが生き延びた。それはつまり、術の妨害

に成功したのか。だが、それなら最後のあの光は一体・・・・・・？
「くっ・・・・・・・・・・・・」
薄くシヴェリが眼を開き。ウィンドがそれを眺めた後、苦笑を浮かべた。
「・・・・・・大した奴だよ、お前は。土壇場で新しい合成術を完成させるとは」
「・・・・・・・・・・・・適当でも何とかなるもんだな」
「センスの問題だよ。・・・こいつはな」
話が見えない零にシヴェリが苦笑を浮かべ。寝台の方を指差した。そこには上体を起こす形で驚いた表情を浮かべているパールの姿があり。
「パールさまっ！！」
事態を把握し切れていない様子で辺りを見回すパールにサーシェスが駆け寄った。
「・・・・・・義姉上はもう大丈夫だ。私達も、死ななかった」
「どういう事・・・です？」
「あの術は血縁者間で生命をやり取りする呪。義姉上とウィンドは同じ両親を持つ血縁者。だが私とて同じ父を持つ血縁者だ。構成式を組み替えて、ウィンドから生命力を全て奪うところを私からも奪わせる事で、死を回避した。・・・・・・互いに寿命を削られる事になっただろうが、まあ・・・今日明日の話じゃない」
同じ条件であるならそれでも相当の生命を失ったはずだが、不思議と身体が軽かった。まるで誰かが代替わりしてくれたかのように。ほとんど疲労感が残らない事を奇妙に思いながらシヴェリは自らの手を軽く握ったり開いたりしていた。
「・・・・・・ウィンド。貴方は、禁呪を・・・・・・？」
パールが口を開き。ウィンドが顔を上げた。そのままパールの傍に向かい。
「・・・・・・・・・・・・姉上」
「・・・・・・・・・・・・」

不意にパールがウィンドの襟首を掴み。そして平手で頬を張った。
あまりの音にその場に居たもの全員が眼を丸くし。
「何故貴方はそう自分の生命を無駄にしようとするのです！！貴方は残された者達の事を考えた事はあるのですか！？元皇帝ともあろう者が・・・・・・っ！！」
「あ、姉上。だが、俺は・・・」
「泣き、悔やみ、死をもって償う事は誰にでも出来る事。だけどそれはただの「逃げ」に過ぎません。たとえ全世界の民が貴方に死ねと言おうとも。貴方は残された者の為に生をもって償う事が義務です」
そこまで言った後、押し黙ったウィンドの頭をそっとパールが抱き寄せて。その眼を閉じた。
「・・・・・・もう二度とこんな事をしないで。助けてくれた事はとてもとても嬉しいけれど、だけど貴方が居ない世界で生きる事は私にとって半身を奪われるのと同じだけの苦しみでしかないのだから。貴方が私の居ない世界を望まなかったように、私も貴方の居ない世界は・・・望みません。・・・・・・死なないで、ウィンド。私の為と思ってくれるならば、どうか生きて、生きて・・・・・・お願いよ・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
生きていてくれて良かった。そう呟いたパールにウィンドが両眼を見開き。そのまま強く抱き締める。ウィンドの両眼からも涙が溢れ。その場に居た全員も苦笑と共に涙を浮かべた。

「・・・・・・陛下、あの・・・・・・・」
零がそっとシヴェリに声を掛け。うん？とシヴェリがそれを見下ろした。
あの鳥は、幸告げ鳥だったのだろうか。
そう尋ねようと思ったが、そのまま言葉を飲み込み。ううん、と首を振った。

「ありがとうございました。・・・・・・2人を、助けて下さって・・・・・・」
「当たり前だ。私の大事な・・・兄姉(きょうだい)だからな」
シヴェリの言葉に零は嬉しげに頷いた。

ドン・・・・・・。
大きな音が聞こえて来る。
宴も終盤。誰かが花火を上げたのだ。
それは、新たな始まりの音でもあった。

48話　ありがとう

・・・・・・目が回るように時は流れていき。数ヶ月の月日が流れた。
お祭り騒ぎが抜けぬリュートを出たのはいつだったろう。今、零はイシュバートの地に居た。
イシュバートは着々と復興を続け、未だ嘗ての戦いの傷跡を色濃く残しているけれど、真新しい建物も相当に増えた。
イシュバート、セイルーンの民、兵士等だけではない。リュートの兵、そして近隣の住人まで駆け付けては復興に助力してくれているおかげだ。
世界がイシュバートを助けてくれている。その状況に零は大地そのものに、そしてそこに生きる全てに感謝していた。

「正式な継承の儀を行っていなかったから、改めてそれを執り行うのはわかるけれど・・・・・・」
金銀宝飾を飾られながら零が困ったような呆れたような声を上げた。
「でもそれと、皇帝陛下の結婚式、更に皇帝の義姉君の結婚式を全部纏めて同時に行うのはどうなのかしら」
「国始まって以来の大騒ぎになるでしょうね」
美しい細工の首飾りを零の首に垂らしながらマリエが笑い。零が苦笑を浮かべた。
「でも陛下らしくもありますわ。サーシェスさまと陛下・・・いえ、陛下だけではなくパールさまもウィンドさまも、幼い頃からずっと一緒でしたから」
それだけ大事に思ってらっしゃるのですよ。マリエの言葉に零は嬉しげに頷いた。
「そうね、あたしもそう思う」

ずっと兄弟同然に在り、共に過ごし、共に戦い、共に国を取り戻した。本当の兄弟になれるのであれば、その嬉しさはきっと誰にもわからないほど大きなものだろう。

コツコツ、とノックの音が聞こえると少し開かれた扉の所にシヴェリが立っており。零が笑顔でその方を見た。マリエがそのまま頭を垂れて。

「準備は出来たか？」

「陛下。はい、もうほとんど・・・」

シヴェリは少々お腹が目立って来たものの純白のドレスに身を包んだ零の姿から眼を離せず、少しだけ頬を染めた。それに気付き零もまた頬を赤らめる。

「こ、これ。ロマ皇さまが贈って下さった・・・・・・」

「あ、ああ、聞いている。だがドレスよりも、我が花嫁の眩しさに目を奪われたよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

恥ずかしそうに俯いた零だったがシヴェリの手に白ホープの花束が握られているのを見。慌てて最後の耳飾を付けた。

様子にマリエが首を傾げ。

「お式にはまだ時間がありますが・・・・・・」

「あ、ううん。ちょっと式が始まる前に、陛下と一緒に行きたい所があるの。式までには絶対戻るから」

「畏まりました。・・・・・・レイさま、やんちゃをなさらないで下さいね？お式の前に折角のドレスが汚れたら大変ですから」

「わかってる。ありがとうマリエ」

シヴェリに手を取られ、長廊下を歩く。

あの日、この世界に「落ちて来た」日。まさかこんな形でこの国に留まる事になるなんて・・・・・・思ってもいなかった。

多くの人達が自分の前を通り過ぎ、留まり、或いは消えていき。辛

い事も悲しい事も山ほどあった。だけれど、常に心の何処かに希望があったのは・・・・・・。この優しい腕を知っていたから。
ちらりと零は横を並んで歩くシヴェリを見上げた。
そうして向かった先は・・・・・・宮の裏にある地位ある人達の墓地であり。目的の墓の前に立つ男性の姿に気付くと零が片手を上げ、笑顔で声を掛けた。
「モーラさん！」
「レイさま、それに陛下も。・・・・・・おお、レイさま、お美しい。私はアルテナ皇妃さま・・・パールさまとウィンドさまのお母君のご結婚の際も参列させていただきましたが、あの方に引けを取らぬお美しさですぞ」
「そう言って貰えると嬉しいわ」
さり、と若草を踏み締めながら墓の前に行き、そして白ホープの花束を置く。
墓に刻まれた名は、「エリザベート・ラエル・アリエスダヌス」・・・・・・。
「あら・・・・・・」
置かれている花束が全部で３つ。１つは今、零達が持って来たもの、もう１つはモーラが置いたもの。だが最後の１つは・・・・・・。
「ウィンドさまが、これを」
「・・・・・・ウィンドが・・・・・・」
「陛下。私は愛娘をウィンドさまに奪われました。だがウィンドさまが苦しまれた姿も充分に見て来ました・・・・・・。私はもうウィンドさまをお恨みする事は出来ません。エリィもまたそれを望んではいない事でしょう」
真っ直ぐにモーラがシヴェリを見。シヴェリが眼を細めた。
今日の儀の後、ウィンドは収監される。その事をモーラが言っているのはわかっていた。
「どうか、ウィンドさまの減罪を。あの方が行って来た厄の根源は全てロストレヴェスのアリス・マグ・アークストーンに・・・・・・

」
「モーラ。それは私の一存では決められない。だが、尽力はする。それだけはお前に、そして・・・・・・エリザベート姫の墓前で誓おう」
深くモーラが頭を下げ。零が眼を細めた。

「・・・・・・エリザベートさま。あたしは今日、陛下と結婚します。あの日エリザベートさまが逃がして下さらなかったら、今のあたしはきっと存在していなかったでしょう。サーシェスさんに助けられる事も無く、陛下とも、再会出来なかったと思います。・・・・・・迎えに行くと約束したのに。助け出してあげられなくて、ごめんなさい。そして・・・・・・ありがとうございました。あたし・・・エリザベートさまの分まで頑張って、生きて・・・陛下をお支えします。どうか天より見守っていて下さい・・・・・・」
零の言葉にモーラが号泣し。シヴェリがその手を置いた。
「レイさま、勿体無いお言葉です。娘もさぞ喜んでいる事でしょう・・・・・・っ」

「ああ、矢張り此処でしたか！」
聞こえた声に3人がその方を見。ラシェが笑顔で向かって来る。
「陛下、レイさま、そろそろお時間でございます。どうか儀式の間へ」
ラシェの言葉に零が頷き。そして緊張気味にシヴェリを見上げた。
大丈夫、と笑顔で頷かれ。そして零もまた大きく笑い返した。

49話　新たな始まり

再建された神殿に在る儀式の間はとても広く。深紅の絨毯と宝飾に彩られた中央部分以外は観客の席になっている。
イシュバートの要人、軍人は勿論の事、リュートのロマ皇、セイルーンのリーゼロッテ姫等が参列している。
本来はその時の皇妃にあたる人物が式の進行を行うが、今皇妃の地位に在る者は存在しない。その為、神殿の巫女が皇妃の代行として儀の進行を執り行っていた。
「汝、シヴェリ・クイ・イシュバート。そなたを血列の誓いに沿い、ウィンド・ディ・イシュバートの後継として皇帝の位を与える」
膝を突き、頭を垂れ、眼を閉じる。その頭に皇帝の証であるサークレットが載せられ。一部から感動のあまりすすり泣く声が聞こえ始めた。
零は真っ直ぐにシヴェリを見詰めていた。
その姿がいつかのウィンドの姿と重なり。つきんと胸が痛む。
・・・・・・式にウィンドの姿は見えない。式が終わるまではウィンドは自由の身だ。だがウィンドはこの儀に参列しなかった。
もし自分がウィンドだったら。そう思えば無理強いは出来ない。何処かで独り、心苦しい思いをしているのだろうか。
自分にはシヴェリが居る。だがウィンドには。・・・・・・誰が、ウィンドの心を守ってやるのだろう。きゅ、と苦しげに眼を細めて項垂れた零はそっと肩に手を置かれ。驚いてその方を見た。
パールだった。静かな笑顔でじっと此方を見ている。大丈夫ですよ、そう口には出さなかったが、パールが言いたい事はわかっていた。

「・・・・・・レイ」
立ち上がったシヴェリが零を呼び。はっとして零が立ち上がる。
「・・・・・・確りね」

小さな声でパールに励まされ。零は涙ぐみながら頷いた。そのまま、シヴェリの方へと向かい。促されるまま神官の前に膝を突いた。
「レイ。そなたにはレイ・ハルピュリス・イシュバートの名を与え、シヴェリ・クイ・イシュバートの正妃と認める。陛下・・・・・・」
神官がシヴェリに声を掛けつつ後ろへ下がり。シヴェリが零の前に立った。
シヴェリの手には皇帝のサークレットと良く似たデザインの、皇妃のサークレットがあり。それをそっと零の頭に載せ。す、と零が眼を開き、シヴェリを見上げた。
「レイ・ハルピュリス・イシュバート。これからも我が傍で、国を、そして私を支えてくれ」
そしてそっとシヴェリの手が零の頬に添えられ、一瞬驚いた零であったが、そのまま眼を伏せ、シヴェリの唇を受け止めた。
瞬間、宮の外で歓声が沸き上がり。零は驚いて戸惑った表情を浮かべた。
兵がバルコニーへ向かい、イシュバートの旗を立てたのだ。それは民に、新皇帝と新皇妃が誕生した事を伝えるものだった。
「あ・・・・・・」
どうしたらいいのかわからず動けない零の手をシヴェリがそっと取り、立たせる。
「聞こえるか？国が震えているのが。私を、お前を、皆が祝福してくれているのだ。・・・・・・声に応えてやれ。それが皇妃としての最初の仕事だ」
シヴェリと共にバルコニーへ出る。そこには多くの民が集っており。零は恥ずかしげに頬を染めた後にそっと片手を上げた。
今此処に、イシュバートの新しい歴史が刻み込まれ、動き出したのだ。
新しく生を得た、と言っても過言ではない。
「おめでとう、レイ。家族が増えて嬉しいわ」

この後の結婚式を控え、零とは違う純白のドレスに身を包んだパールがサーシェスと共に歩いて来る。
軍服がデフォルトだったサーシェスも、こうして高貴な衣を纏っていればまるで何処かの国の皇子さまのようだ。
「ありがとうございます、パールさま」
「あら、これから姉妹になるのですもの。義姉(あね)と呼んで欲しいわ」
笑いあいながら話している花嫁達を眺めながらサーシェスが眼を細め。そこにシヴェリが近付いていき、そっとその肩に肘を置いた。
「陛下・・・・・・」
「これで本当に兄弟だな」
シヴェリの言葉にサーシェスが苦笑を浮かべ。そうですね、と眼を閉じた。それから悪戯っぽく顔を上げ。
「陛下は私の事を義兄(あに)と呼んで下さるのですか？」
うん？とシヴェリが片眉を跳ね上げ。それからにやりと笑う。
「・・・・・・呼んで欲しいなら幾らでも。義兄上？」
しっかり念を押すような言い方をするシヴェリにサーシェスは一瞬かたまるように動きを止めた後、自分の額に手を当て、眼を閉じた。
「・・・・・・いえ。私が悪かったです。申し訳ございません」
「顔色が悪いぞ？あ・に・う・え？」
「へ、陛下。もうお赦し下さい・・・・・・・っ」

「陛下！！」
呼び声にシヴェリが顔を上げ。零とパールの方へ手を振った。そしてまだショックから立ち直れていないサーシェスの首を腕でかき抱いて。
「行くぞ、花嫁達が待っている」
「は・・・・・・」
くすりとシヴェリとサーシェスは顔を見合わせ苦笑を浮かべ。花嫁達の方へ向かって歩き出した・・・・・・・・・・・・・。

その頃、ウィンドは皇宮が良く見える小高い丘に立っていた。傍らには大きな馬車と御者の姿が在り。
「・・・・・・さってと、そろそろ俺達も行くかい」
そう御者に声を掛ける。馬体を拭いていた御者がウィンドの声に顔を上げ。
「・・・・・・宜しいんですか？何なら一度皇宮の方へ戻られても・・・・・・」
「まさか。幾ら俺でも幸せな空気をぶち壊すような真似はしたくないさ」
シヴェリの口添えでウィンドは死罪を免れた。その代わり、これより２０年、湖の小島にある牢獄に収監される。
とはいえ食事もきちんとしたものが与えられるし、欲しいものも差し入れて貰える。きちんとした手続きを受ければ面会だって可能だ。
「さて行こうぜ。あんまりだらだらしてたら日が暮れちまう。着いたら「新居」の掃除をしないといけないからな、これでも忙しいんだ」
腕を伸ばしながらウィンドが馬車へ乗り込んでいき。やがて馬車はゴトゴトと夕焼け迫る山道を走り始めた。

幸せになれよ。シヴェリ、零、姉上、サーシェス。
その思いは直接伝える事は出来なかったけれど。だがきっと幸告げ鳥が伝えてくれるだろう、そうウィンドは信じていた。

50話　ありったけの幸せと希望を貴方へ

穏やかに穏やかに時間は過ぎていく。
それから更に数ヶ月後。未だ復興は完全ではないが、それでも建築中の建物は増えていく。
外部からの手伝いの数も増し、年内には8割方の復興が叶いそうだ、というところか。

そして・・・・・・。

「陛下、陛下！お生まれになりました！！」
嬉しげなルトの声が響き渡り。皇間で落ち着き無く歩き回っていたシヴェリはその声に顔を上げた。
後にリーゼロッテが語る。あの時の陛下はまるでお腹を空かせた熊みたいであったと。
シヴェリは皇間を出、そのまま産室へと走った。部屋の前に立つパールが眉を寄せ。
「シヴェリ。皇帝ともあろう者が廊下を・・・・・・」
「義姉上。レイは・・・・・・子は？」
咎めの言葉も耳に入っていない様子に溜息を零し。それから柔らかく微笑んだ。
「大丈夫ですよ。母体も御子も大事ありません。・・・・・・とても愛らしい、お姫さまです。おめでとう、シヴェリ」
「女・・・・・・」
はは、とシヴェリが笑い。
一国の皇であるなら、どの国でも第一子は男を望むもの。だがシヴェリは違っていた。
男であれ女であれ純粋に子が無事に生まれた事を喜び、そしてパールに確認を取る事も無く産室の扉を開けた。

「レイ、レイ！！」
年甲斐無く浮かれた声を上げる義弟の姿にパールは苦笑を浮かべた。
「陛下、お静かにっ」
医師の声にシヴェリがはっとして。様子に寝台に横たわったままの零がくすりと笑った。
「陛下」
「レイ・・・・・・・」
「・・・・・・女の子なんです」
「良いじゃないか。きっとレイのような美人になる。・・・・・・・抱いても大丈夫か？」
零の傍らで眠っている生まれたての赤子のお包みを見遣り。それから医師に確認した。
「構いませんがきちんと首を支えてあげて下さい」
「それは大丈夫だ。今日の日の為に城下の母親達にたくさん指導をして貰ったからな」
そっとシヴェリが赤子を抱き上げる。まだ毛も生えておらず顔もしわくちゃで肌も赤黒いが、それでも既に眼に入れても痛くないほど愛おしい。
「・・・・・・陛下。名前はどうしますか？」
「ん？ああ・・・・・・・。それなんだが、男女共に候補がまだ１００以上あって絞り切れていないのだ。１日、いや、半日、待って貰えないか」
困った様子でそういうシヴェリに医師が笑い。パール、シヴェリ、零の３者が医師を見た。
「いや、失礼。パールさまがお生まれになった時にアルバさまも同じ事を仰っていた事を思い出しましてな」
「父上が？・・・・・・・それはそれで・・・何やら複雑な気持ちだな・・・・・・」
くすくすと零も笑い。その声にパールもまた笑みを深めた。

そして丁度その時、産室の扉が叩かれ。両手一杯の白ホープの花束を抱えたサーシェスとモーラが顔を覗かせて。
「皇妃さま、おめでとうございます」
モーラの言葉に零が困った笑いを浮かべた。まだ皇妃と呼ばれる事に慣れていないのだ。
「サーシェスさん、モーラさん。・・・・・・来て下さって嬉しいです」
「おいサーシェス。後で名前の候補を絞るのを手伝ってくれないか」
赤子を抱いたままのシヴェリにそう言われ。サーシェスが眉を寄せた。あからさまに呆れたように。
「陛下、まだ決めあぐねていたんですか・・・・・・」
「さぼっていたわけじゃないぞ？どれも良い名前で決めきれないだけだ。・・・・・・ああ、いっそウィンドにも選ぶのを手伝って貰うか」
後で一緒に湖の島まで行くぞ、とさらりと言うシヴェリに、はいはい、とサーシェスは肩を竦めた。どうやら、付き合わされるのは必至のようだ。
「・・・・・・ウィンドも赤ちゃんを楽しみにしてくれていたから、早く会わせてあげたいです」
零がそう言い。パールが傍らで頷いた。
「レイの身体が落ち着いたら、皆で島に行きましょうね」
「ウィンドさまですか。そういえば陛下知ってますか？ウィンドさま、最近看守の女魔術師の方と良い仲なんだとか」
モーラの言葉にシヴェリが、うん？と首を傾げ。内容に苦笑を浮かべた。
「ほう？それは初耳だ。ならば訪問の際はその話もきっちり聞かないとな」
「・・・お弁当いっぱい作って、看守さんとウィンドと・・・皆で食べたいです」
のんびりとした零の言葉におどけるようにモーラが肩を竦め。

「牢獄の島の名が台無しですな？」
「そう言うな。イシュバートらしいではないか」
シヴェリの言葉にその場に居る全員が笑い出した。

幸告げ鳥が空を舞う。青と暁の空を舞う。
白々翼をはためかせ。願いし夢に舞い降りる。
与える夢の代償は。悲しみ暮れた涙の雫。
さあ笑え。さあ謳え。約束の地で。
さあ踊れ。さあ謳え。幸告げ鳥は神の鳥。

幸せの息吹がそよ風に乗ってイシュバートへ訪れる。
その日、第一皇女の誕生報告に国は再び歓喜の声に包まれた。
そして人々は幸告げ鳥に感謝し、この歌を歌ったのだと・・・・・・
。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9209o/

天の鳥舞い降りるは月色の都

2011年4月8日17時44分発行